
星の女王 ～ソラの物語～

夏乃市

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の女王 ～ソラの物語～

【Nコード】

N7928M

【作者名】

夏乃市

【あらすじ】

ひとが星々に住む世界を広げた時代。信念をもって世界を渡り歩く女性？ソラ？の物語。彼女と世界の出会いの先にあるものは……

『赤と青の星』 プロローグ

折に触れて思い出すのは幼い頃の記憶。

すり切れた布団。汚れた天井。忍び込むすきま風。

すすけた母の背中。姉と慕ったひとの手のひら。師とあおいだひとの声。

ただ流された日々と、雌伏の時と信じた日々と、世界と対峙することを決めた日。

座ったまま四方の壁に手が届く——その広さが世界そのものだった頃と比べると、彼女の世界は途方もなく大きくなった。夜空に輝くあの星にも手が届く。きっと、銀河の果てにだって手が届く。

今、彼女の両の眼が見ている世界はとてつもなく広い。両の手で抱えているモノも大きい。両の足元に積み上がっているモノも高い。それでも、折に触れて彼女が思い出すのは幼い頃の記憶だ。

世界と対峙すると決めて、自らの力で全てを切り開くと決めたあの日、幼い自分とは決別をした。しかし、それをなかったことにするつもりはない。

今、彼女が歩いている道は、まごうことなく過去から続いている道だ。今の自分は、あの頃の自分の延長線上にある。ひとに語ったことはないけれど、それは彼女の中で常に一貫していることだから。

あの幼い日々の記憶が呼び起こされる時、それは彼女の生き方の本質に関わる時。端からは単なる感傷に見えようとも、そこには彼女の人生そのものの筋が通っている。

それはたいがい、他愛もない場所での、些細なことが発端となる。たとえば。

赤と青の惑星の片隅での、小さな出会いのような——

『赤と青の星』 海沿いの町 1

チヨルココ星系、第三太陽系、有人惑星ルテボボ。

ここは 青の大陸 西岸の町ミレトト。

照りつける太陽が湿った空気を熱し、そこかしこで景色が揺れている。道幅ばかり広い道路の周りには、さらにただっ広い砂地がどこまでも広がっている。ほとんど舗装されていないので分かりにくい、一帯は飛行場ということになっていた。よくよく見てみれば、ところどころに砂で汚れた平屋があることが分かる。飛行機の銀色の翼も見え隠れしているが、いかんせん距離が遠すぎて判然としない。

「どんだけ広いのよ、まったく」

道路の端、つまりは飛行場の入り口に立ったソラが独りごちた。

人間が銀河の星々を渡り歩くようになった今でも、惑星上の局所的な気温までは細かく調節することができない。彼女はひとつ大きく息をついた。

飛行場入り口脇では、矢印の形をした簡素な案内板が施設の方向だけを指し示していた。

ソラは大きなリュックを背負い直すと、矢印のひとつが指し示す方向に向かって歩きだした。

「それは、禁止されている」

簡素なテーブルを挟んで、日焼けした髭面の男が顔をしかめた。

「知っているわ。でも、ここならなんとかしてくれるんじゃないかって、そう聞いてわざわざ来たのよ」

男の顔を見ながら、ソラが食い下がった。

ミレトト共同飛行場の一角。ルゲナ小型飛行商会の事務所だ。入り口から一時間もの時間をかけて、ソラはここまで歩いてきた。砂

埃にさらされ続けたせいで、彼女の漆黒の髪はボサボサになってしまっている。

「どこでそんなことを聞いたのか知らないが、無駄足だったな」

「そもそも、赤の大陸へ渡ってはいけない、というのは何故なの？」

「そりゃあ、危険だからにきまっている。海図もないし、赤の大陸の地図もない。あっちの大陸には人も住んじやいないから、燃料の補給もままならないし、水や食料だって手に入らねえ」

ルゲナ小型飛行商会の社長、ドンド・ルゲナは腕組みをしたまま小さく息をついた。

「あんたが何の目的で赤の大陸に行きたいのか知らないが、興味本位ならやめときな」

「赤の大陸に向かったら、何か罰があるの？」

「罰？」

「法律的に罰せられるのか？　ってこと」

「そうじゃねえよ。危険だから禁止なんだ」

「じゃあ、その危険を私が承知ならいいのね？」

ドンドは困ったように頭をかいた。

「わからねえ姉ちゃんだな。いいか、海図がねえってことは、どうやって行ったらいいか分からねえってことなんだよ。飛行機で海上を飛んでいくから関係ないだろうと思うかも知れないが、それは素人の勘違いだ。燃料はなんとかなるかもしれねえが、だからって飛行場もなにもない。赤の大陸にどうやって着陸するつもりだ。さらにいえば、赤の大陸がどんなところだかも分からないんだよ」

「分からないから行ってみたい、それじゃだめなの？」

「だめだ。とにかく、俺のところから飛行機は出せねえ」

「……一機まるまる購入する、ってことでもだめ？」

「馬鹿言っちゃいけねえ。飛行機が一機いくらするかわかってんのか？　冗談も休み休みにしな」

「冗談なんか……」

「ほら、帰れ帰れ」

ソラの言葉を途中で遮ると、ドンドは席を立った。そのまま事務所の奥へと引っ込んでしまう。

応接セットに取り残されたソラは、事務所の中を眺め回した。断られたからと言って、すぐさま灼熱の屋外へ出る気にはなれない。無理矢理追い出されるまで、しばし冷房の効いたここで涼んでいても罰は当たらないだろう。

『赤と青の星』 海沿いの町 2

惑星ルテボボは、テラフォーミング地球型惑星改造を施した有人惑星である。赤道半径は約五五〇〇キロ。一日は地球標準時間で22時間。惑星の四分の三を海が占める水の星である。

大陸は二つ。人類が入植している 青の大陸 と、いまだ手つかずの 赤の大陸 。二つの大陸は、ほぼ赤道上に位置しており、惑星上でちょうど裏表の位置関係にある。ここルテボボは、惑星発見当初、水が豊富だったにもかかわらずほとんど生物の痕跡が見つからなかった。そのため、惑星改造にあたっては完全地球型の植物相が人工的に持ち込まれた。二つの大陸を同時に改造するには手間も予算も限られていたため、選ばれたのが 青の大陸 だったといういことになっている。ちなみに、それぞれの呼び名は入植が開始されてからつけられたものだ。惑星軌道上から見ると、植物が豊かな青々とした 青の大陸 と、砂岩が中心の赤い大地 赤の大陸 の対比は非常に印象的である。

惑星ルテボボに入植が始まって三十年。国としてのこの星は非常に若い。正確を期すならば、ルテボボはチヨルココ星系国家の一惑星という扱いで、単一の国ではない。さらには、星系は銀河に広がる広大な人類の生活圏でもかなり端に位置している。乱暴に言ってしまうえば、ルテボボは田舎の惑星、なのであった。現在、首都ラグタタにはチヨルココ星系政府ルテボボ支府が置かれていて、この星の行政を一手に担っている。

そんなルテボボの主産業は農作物の輸出だ。なぜか標高の高い山岳地帯がほとんどない広大な 青の大陸 は、地球産の農作物の根付きも良く、入植を初めて数年で、一大穀倉地帯となった。まるで誰かがならしたかのような地形についての謎は、現在でも解けていないが、多くの人間にとってはそれはどうでも良いことだった。実際問題として農作物が良く育ち、収穫から大きな利益が得られるな

らば、それで良いのだから。

現在の惑星ルテボボは、田舎ながらも、新興の農業国として少しずつその勢いを増しているところだった。

「ちよつと、あんた……」

不意に背後から声をかけられて、ソラは無意識に飛び上がり身体を反転させた。一瞬腰にまわった手が、冷たい金属の塊を握って身体の正面に戻ってくる。

「待った！ 待った！ ちよつと待った！」

「……」

ソラの目の前には、若い男が両手を肩の高さに上げて立っていた。歳の頃は十六七。日焼けした顔は、どことなくドンドに似ていた。「とりあえず、その拳銃を下げてくれ。自分とこの事務所で、寝ぼけた女に撃ち殺されるなんて冗談にもならねえよ」

「背後から突然声をかけるからよ」

ソラは男に向けていた銃口を下げると、小さく息をついた。どうやらルゲナ小型飛行商会の事務所で眠ってしまったらしい。首都ラグタタから丸三日をかけた長距離バスでの移動は、予想以上に彼女の体力を奪っていたらしい。事務所の外は暗くなりかけている。いったいどのくらい眠っていたのだろうか。

「あんただろ？ 赤の大陸 へ行きたいってのは」

「ええ。あなたにならお願いできるの？」

ソラの眼差しが、ひたと男に据えられる。まるで肉食獣のような光をたたえている。

「そんなに恐い顔しないでくれ。とりあえず座ろつ。俺はルード・ルゲナだ」

「私はソラ」

ソラは拳銃を腰のベルトにはさむと、ゆっくりと椅子に腰かけた。昼間ドンドが座った位置に、今度はルードが腰を降ろす。

「ソラ……か。美人だね」

ルードはソラを上から下までなめ回すように見た。その瞳には、年上の女性への憧憬が見て取れる。

「ありがとう」と答えたソラの言葉は素っ気ない。

「親父が言ったことは本当だ。赤の大陸へは誰も行ったことがない。いや、政府の調査団とかは別だろうけど、俺らは行こうなんて思わない」

「なぜ、と訊いた方がいいのかしら？」

「……まあね。ええと、何の利益にもならないからだ」

「あなたのお父さんは、危険だと言ったわ」

「危険なのは危険だけど、行けないことはない」

「なら、利益が出るならば行くこともできる、ということの良いのかしら」

「よほどの利益が出るならば、ということだよ」

ルードは横を向き、少し考え込むように頭をかいた。そして、ゆっくり向き直る。

「例えば、新しい飛行機が一機買える程度とか……」

「いいわ。商談成立。金額を提示してちょうだい」

ルードが鉛を飲み込んだような顔をして固まった。「……本気？」
「なあに？ 冗談だったの？」

「い、いや。そんなことはない。ちょっと待ってくれ」

慌てて椅子から飛び出したルードは、事務所の奥から通貨カード読取り端末を持って戻ってきた。恐る恐る端末に数字を打ち込み、それをソラに提示する。

ソラは上着の内ポケットから通貨カードを無造作に取り出すと、読取り端末に近づけ、端末の指紋認証窓に指を近づけた。小さな電子音が認証したことを告げると、続けて端末にパスコードを入力する。待つこと数秒、決済が終了したことを示す電子音が鳴り、ソラは顔を上げた。

「はい。これで良いかしら」

ルードは端末を無言で見つめている。新しい飛行機が一機買える

金額、それはルゲナ小型飛行商会の一年分の利益にも相当する。ルードはゴクリとつばを飲み込んだ。

「あんた、何者だ？」

「それは飛行に必要なことなの？」

「いや……」言いよんだルードは、思い出したように付け足した。

「あのさ、今更何だけど、ちょっとした交換条件で割り引きも考えていたんだ」

「あら、そう」

「……」

「どんな条件？ と訊いた方がいいのかしら？」

「……いや、訊かないでくれ」

ルードはしばらく、端末の金額とソラの顔を見比べていたが、小さくため息をつく、諦めたように首を振った。

「出発は明日早朝。今夜は……」

「この事務所に寝かせてもらえるとありがたいけれど」

「……そう。わかった」

なぜかがつくりと肩を落としたルードは、「あとで食事くらい持つてくるよ」と言つて事務所をあとにした。事務所を出る直前、「ぜんぜん隙がねえなあ」と聞こえよがしにつぶやいたルードの言葉を、ソラは聞かなかつたことにした。

『赤と青の星』 首都ラゲタタ 1

どこまでも広がる広大な農作地の中に、唐突に生えている銀色のビル群。それが、惑星ルテボボの首都ラゲタタの風景だった。チヨルココ星系政府ルテボボ支府を始めとする行政機関、輸出産業を支える商社、内需向けの製品を作っているメーカーの本社など、ルテボボの主要な機能はすべてここに集中している。

そんなビル群の一角、政府要人などにも利用されるホテルの一室に、ベルカルチャ惑星開発会社は臨時の事務所を構えていた。

「相変わらずのれんに腕押しですね」

頭を抱えるようにして、ステイーが唸った。明るいブラウンの髪をくしゃくしゃにかき回す。

「商売つ気がないというより、むしろ何かを隠しているのではと疑いたくなってきましたよ」

ベルカルチャ惑星開発会社は、チヨルココ星系政府からの依頼で惑星ルテボボの開発支援に赴いていた。惑星開発は高収益が期待される大事業だが、個々の惑星政府ではノウハウが不足している分、思うにまかせないことが多い。各政府が民間の業者に調査から企画、あげく開発そのものまでを委託することもままある。ベルカルチャ惑星開発会社も、そんな民間企業のひとつだった。

チヨルココ星系政府の星系開発委員会が眼をつけたのは、未開発の赤の大陸だった。そこから有用な鉱物が採取できるのであれば、ルテボボは資源惑星としても価値を増す。赤の大陸は誰も住まない不毛の地だから調査は簡単に進むだろう、と委員会も、依頼をつけたベルカルチャ惑星開発会社も高をくくっていた。しかし、話はそんなに簡単ではなかった。

問題は、地権者の存在だった。

現在、銀河にあまた存在する人が住む惑星のうち、約半分に地権者が存在する。惑星そのものの所有者ということだ。王制をひいて

いる惑星で、王家が所有者というのが良くあるパターンだが、いわゆる民主主義のような政治体制の国でも、星の所有者が別に存在しているという場合が存在するのだ。それは、惑星開発の初期にまでその理由を遡る必要がある。

宇宙開発が地球上の国家単位の事業だった頃。発見した惑星の権利は、発見した国がそれを主張することができた。そして更には、一部の貴族や富豪たちは、みずからの力で惑星を発見したいと考え、それを実行した。地球という限られた土地を分け合うのではなく、無限に広がる宇宙に新たな土地を見いだす。これが彼らを駆り立てた大きな理由だったのは言うまでもない。そして、当然発見した惑星の権利は、彼らが主張することになる。以降、個人の調査行で発見した惑星は、その個人が権利を主張するという慣例が生まれた。宇宙大航海時代の幕開けである。

その後、惑星の権利は投機の対象ともなり、多くの投資家や企業のもとを転がることになる。一方で、投資家たちは惑星上の行政にはさほど興味を示さないことが多かった。そのため、行政は惑星上で自然発生的におきることも多く、それが結果的に権利者と対立することも少なくない。しかし、惑星の権利者のほうが行政よりも立場が上のことが多く、惑星全体の総生産から幾ばくかの権利料を受け取るのが普通だ。たとえわずかな率であっても、元が惑星単位の総生産額なのだから、相対的には莫大な金額になる。

「資源の輸出で利益が上がれば、彼だつて収入が増えるはずなのに、なんででしょうね？」

今回の案件で涉外担当のステイーは、ここ数日、惑星ルテボボの地権者に 赤の大陸 を調査する許可をもとめているのだが、はかばかしい返事が得られていないのだった。

「なにか、やばいことでもやっているんじゃないですかあ」そう言っただのはデイーア。

今回、彼女の担当は調査計画の立案なのだが、調査そのものの許可が下りないので暇をもてあましている。ちなみに彼女のトレード

マークはピンク色のビジネススーツだ。

「このまんまじゃ、私たち無能者扱いでお払い箱になっちゃいませんかあ？」

「おい、まるで俺が無能みたいな言い方じゃないか」

「あれ、そんな風に聞こえました？ 気のせいじゃないですか？」

「やめろ、ふたりとも。明日は俺もステイーと一緒に行く。惑星開発にはそれぞれ固有の問題がついてまわる。今回はそれが地権者だつたってことだ。泣き言を言っている暇があったら方法を考えろ」

今回の案件の責任者デニスは、ステイーとデイーアを交互に見た。ルテボ開発計画のグループは基本的にこの三人。ベルカルチャ惑星開発会社はそれほど規模の大きい会社ではなく、調査から開発計画の立案までを主な仕事としている。実際の調査に際しては地元政府や、地元企業の力を借りざるを得ない場面が多々あり、それに伴うトラブルは日常茶飯事なのだが――

「ステイーはもう一度地権者のことをよく調べておいてくれ。それから、デイーアは 赤の大陸 について何でも良いから調べて欲しい。地権者が調査を渋っている理由が、何か分かるかも知れない」

「はい」とふたりが声をそろえた。

「それで、あの……」とデイーアが恐る恐る口を開く。

「ん？」

「社長はどちらへ？」

「……彼女のことは気にするな。我々三人は依頼通りの仕事をこなせばいい」

そう。本来ならばもうひとり、この場にいるべき人物がいるのだが――それは言っても詮無いことだと、三人が三人ともあきらめていた。

『赤と青の星』 首都ラゲタタ 2

首都ラゲタタの中心部から車で三十分。広大な小麦畑の真ん中にその建物はあった。建坪こそ大きいが、木造平屋建ての作業場を兼ねたその家は、惑星の地権者が住むには質素すぎる気がする。

「何度来てもらってもなあ、答えは変わらないよ」

デニスとステイーの前に座る老人は、心底申し訳なさそうにそう言った。日に焼けた顔と長いあごひげが、いかにも大地に根付いた農夫といった雰囲気だ。しかし、彼こそが惑星ルテボボの権利を持つテール・ルゲナ翁その人であった。なお、彼の一族は非常に多くこの惑星にはルゲナ姓を持つひとが非常に多い。

「ルゲナ翁、私はベルカルチャ惑星開発会社の副社長、デニス・ロ―デンスキーです。部下が何度も失礼いたしました」

「いやいや、彼には色々話を聞いて貰って嬉しかったよ」

ステイーが小さく肩をすくめた。おそらく、翁の思い出話を延々と聴かされたに違いない。

「しかしなあ、赤の地へは触れてはならぬ。それだけはいかん」

「ルゲナ翁、その理由を私にお聞かせ願えますか？」

「ふむ」

翁は安楽椅子に大きく沈み込むと、ゆっくりとあごひげをしごいた。

「ルテボボを見つけたのは、我らのご先祖様だ。あの宇宙大航海時代、野心に燃えたご先祖様たちは、仲間たちとともに宇宙船をかって銀河の外へ外へと探索の範囲を広げていった。やがて、後にチヨルココ星系と呼ばれる地にまでたどり着いたご先祖様たちは、星系内を手分けして探索することにした。仲間たちには四つの氏族がいた。氏族ごとに分かれて探索をすることで、見つけた惑星の取り扱いになることを避けようとしたのだ。結果、三つの氏族が新しい惑星を見つけた。ルゲナのご先祖様がみつけたのが、ここルテボボだ」

「ルテボボとはどういう意味ですか？」とデニス。

「その時の族長、偉大なるラグタタ・ルゲナの娘の名だ」

「娘……」ステイーがつぶやく。どのような娘の顔を思い浮かべているのか。

「さて、偉大なるラグタタたちが降り立ったのは、赤の地だった」

「赤の地……つまり 赤の大陸 ってことですね？」

「しかし、惑星発見の喜びもつかの間、ラグタタたちは神の怒りを目の当たりにする。赤の地は触れてはいけない土地だったのだ。一方で、惑星の裏側に恵みの地があることも知る。神の怒りにひれ伏したラグタタたちは、赤の地を未来永劫封印し、一族がそこを守り続けることを条件に、ようやく許された。ほうほうの体で赤の地を抜けたラグタタたちは、改めて恵みの地へと降り立ち、そこに住むことにしたのだ」

「地球型惑星改造の最中も、一族はここに住んでいたのですか？」

「我々は軌道上からずっと見守っていた。それは厳しい試練だった。しかし、何代もの長きにわたり堪え忍んだおかげで、恵みの地はこうして豊穡な畑となった。これ以上なにを望んだらよいのだ」

『赤と青の星』 首都ラゲタタ 3

「じいさんのあの話、どう思います？」

ビールのジョッキを豪快に傾けながら、ステイーがデニスに訊いた。「今時、神の怒りだとかなんだとか、ナンセンスだと思いませんか」

「そうだな。きつと、言い伝えの裏に何かがあるんだろうよ」

「何かって……なんです？」

「わからん」

デニスもジョッキを傾ける。惑星ルテボボのビールは絶品だ。

「ああ――、先に始めてるなんてひどいですよ。待っててくださいよう」

ホテルのバーの入り口に、むくれた顔のディアーが立っていた。

「私が一生懸命働いているっていうのに、それを労おうって気はないんですか、おふたりは！」

「俺らだって働いている。じいさんの訳分からん話を延々と聞かされたんだぞ」

ステイーのぼやきをさらっと無視したディアーは、バーテンダーに向かって大きな声を出した。「ビール、大ジョッキで！」

ひと時、ディアーが人心地つくのを待って、デニスは切りだした。「で、何かおもしろい話はあったのか？」

「デニス副社長って何歳でしたっけ？」

「あ？ 今は……三十歳だ」

「以外と若いくせに、ノリ悪いですよ。ビール飲んだるときくらい仕事の話やめませんか？」

一瞬の空白の後、デニスがにやりと笑う。

「それは魅力的な提案だな。ただし、ここの支払いは割り勘だ」

「え？ あれ？ そんな。だから労ってくださいよう」

「仕事の成果を示したら労ってやるよ」

「うう……」

がつくりと肩を落としたディアーを、ステイーが面白そうに眺めている。と、ディアーの目が一瞬据わり、ハイヒールの足が目にも留まらぬ速さで動く。

「ぐあっ……痛ってえ！」

弁慶の泣き所を押さえて転げ回るステイーを見てわずかに溜飲を下げたディアーは、デニスに向き直ると、自分の携帯端末を開いた。「今回の件に関係あるないの判断は後にするとして、いくつか面白い……いえ、面白くはないんですけど、聞き捨てならないような話題がありました」

『赤と青の星』 首都ラゲタタ 4

ディールアが拾ってきた話題、そのひとつ目は、ここ 青の大陸
での話だった。

「なんていうか、怪しげな儲け話がまことしやかに囁かれています。
誰でも一攫千金が狙えるんだそうです」

詳細はこうだった。

ここ一年ほど、あちらこちらの町でひと集めの仲立人が出沒して
いるという。その仲立人は、ふらりと町に現れると、半年という期
間限定で、屈強な男たちを集めていくという。交点軸にあまり傾き
のない惑星ルテボボは、季節による温度差が少ない。そのため、農
作業の閑散期というものがあるわけではない。それでも、仲立人
から提示される条件は破格のもので、多くの男たちがその誘いに乗
っていくという。

「まさか、帰ってこないとか言うんじゃないだろうな」

「いえ、そんなことはありません。ちゃんと帰ってきているようデ
す。ただ……」

「ただ？」

帰ってきた男たちは、自分たちがどこで働いていたのか分からな
いというのだ。

仕事の内容は覚えている。ある者はどこかの工場で働いたという。
ある者は炭坑で鉱物の堀出しをしたという。ただ、それがどこなの
かがわからない。

「ほかの星じゃないかって、もっぱらの噂です。宇宙船で一度宇宙
にあがった、という声が多いらしいですから」

「一攫千金というのは？」とステイー。

「なんか、鉱山で働いてた人が、掘り出した石を持って帰ってきた
そうなんです。調べたら宝石の原石だったって」

「宝石って言ったって色々あるだろう？」

「うーん、そこらへんはつきりしません。拳大のダイヤモンドやルビーだったって話もあれば、たんなる水晶だったという話もあります。今日一日では、実際にこの出稼ぎをやった人を見つけれませんでしたから」

「ふーん」

「ただですね、この話には別の説があるんです」

「別の説？」

「他の惑星や、どこぞの資源小惑星での秘密裡の開発って話が通説ですが、実はここ惑星ルテボ上じゃないかって説があるんです。分かりますか？」

ディーアがデニスの目をのぞき込む。その眼差しが答えを雄弁に語っている。

「……赤の大陸」

なんともいえない沈黙が三人の間に流れた。

しばらく後、全員のジョッキが空になっていることに気づいたディーアがバーテンを呼んだ。なんとなく空気がかきまわり、ディーアが話の穂を紡ぐ。

ふたつ目の話題は、チョルココ星系全体の話だった。

「最近、海賊船が頻出するらしいんです」

海賊というのは通称で、実際に襲われて何かを奪われた宇宙船はないらしい。ただ、本来航路上にいるはずのない所属不明の武装宇宙船が突如現れ、戦闘速度で急接近したあげく、なにもせずに通り過ぎていくのだという。

「一部では幽霊船という呼ばれ方もしています」

「どこのメーカーの船なんだ？」

「それが、データベースには存在しない船らしいんです。海賊船に遭遇した船のレコーダーに残された映像を解析しても、該当する船はないらしくって」

「どっかのメーカーの試作船じゃないのか？」とスティー。

「いや、しかし、この近辺にメーカーの造船工場はなかったはずだ

が」とこちらはデニス。

「そうなんです。しかも、試作品の試験航行にはそれなりの決まり事があります。いきなり戦闘速度でつっこんできて良いなんて話はありませんし……それに、武装宇宙船だなんて穏やかじゃありません」

現在、武装宇宙船を主軸とする艦隊を保有する国家は多くはない。地球国家時代の軍隊組織を永続させている国家が示威のために保有していることがほとんどだ。それだって、SF作品のような宇宙艦隊同士の戦闘などあったためしはない。

「武装宇宙船だと分かった、ということは、何か派手な武器を積んでいたってことかな？」

デニスの言葉に、ディアーは小さく頷いた。

「何かの砲身にしか見えないものがたくさん付いていたそうです。実はこれは単なる飾りです、なんて冗談ではすまされないほどに。そして……これが、今まで海賊が出現した場所です」

ディアーの端末から、三人の目の前の空間にひと抱えもある大きな立体星間地図が浮かび上がる。地図の一部がビールのジョッキで隠れてしまい、ディアーはジョッキを脇へとずらした。

「赤い輝点が海賊目撃地点です。で、ここがルテボボ」

赤い輝点は、不規則に散らばっているように見える。しかし——
「なんというか、あからさま過ぎないか？」ステイーがあきれ顔でいった。「ルテボボ周辺だけ、ブラックホールのように海賊が出現していないじゃないか」

「こうすると分かりやすいです」

広範囲で表示された星間地図上の輝点。それぞれの点を大きな球に拡大していくと、いずれ隣の球とぶつかり、空間が赤く塗りつぶされる。ある程度まで球を広げると、チオルココ星系のほとんどが赤に塗りつぶされるのだが——惑星ルテボボの周囲だけがぽっかりと抜けている。

「ルテボボの周辺空域がなにかの特別扱いをうけているような

気がします。もちろん、偶然という可能性もありますけど……でもねえ？」

デニスが地図を睨みつける。

「特別扱いというよりも、ここから海賊船が飛び立っているという可能性のほうが高いんじゃないか。誰だって自分の家の近くでは悪さはしないだろ？」

「じゃあ、あのじいさんが 赤の大陸 を調査させたくない理由って……」

「いや、それはまた別とみた方がいい。ルゲナ翁が嘘をついているとは思えない」

と、ディアーが思い出したように付け加えた。

「そういえば、星系政府のひとが言っていましたけど、ルゲナ本家の頭首は頑固ですけど、親族の中にはそうじゃない人もいるみたいですよ」

「そうは言っても、あのじいさんが頭首で地権者なのは変わらないだろ？ 俺らは政府の要請で動いてるわけだから、そこをすっ飛ばすわけにはいかないよ」

「そうですよねえ」

ディアーが端末の電源を切り、バーのテーブル上に投影されていた星間地図が消えた。

「ま、今日はこんなところです。どうですか、デニス・ローデンスキ――副社長」

「面白かった。存分に飲め」

「やたっ！ ビール追加でお願いしまーす」

ディアーの声を聞きながら、デニスは思考が深化していくのを感じた。

謎の出稼ぎ。

頻出する海賊。

赤の大陸 の言い伝え。

そして、今ここにいない、彼女。

これは、単なる惑星開発調査では終わりそうにない――

『赤と青の星』 海を越えて 1

朝靄にかすむミレトト共同飛行場は、昼間とは違う幻想的な風景を描き出していた。

滑走路の真ん中に立ち、ソラは大きく深呼吸をする。

「いい天気になりそうだ」

背後からルードの声が聞こえる。もつとも、昨日のことで懲りたのか、無造作に近づいてきたりはしない。

「赤の大陸 まではどのくらいかかるの？」

ソラの問いに、ルードが小さく肩をすくめる。

「さあ。実際には俺も行つたことないから」

「あら、あなたが操縦してくれるのね？」

ソラは今更ながらに、飛行服姿のルードに気がついて言った。

「うちの契約パイロットで、今回の件を受けてくれるヤツはいなかった。俺は今17だけど、飛行機は10歳から飛ばしているから大丈夫だよ」

「そう」

「……」

ルードがじつとソラを見る。しかし、ソラがその瞳に気を払う様子はない。ルードはひとつため息をつく、小さくつぶやいた。

「あのさ、何か言うことはないの？」

「……ねえ、あなた。これはビジネスよね？ 昨日払ったお金以外に、あなたへの気遣いも必要なの？ だとしたら高すぎるわよ」

「ぐ……」

図星をつかれてルードは言葉に詰まった。

「とは言つても、へそを曲げられちゃ敵わないわね。ねえ、坊や。よくお父さんを説得できたわね。もしかしたら黙って飛行機を持ち出したの？ 私の為にそんなことまでしてくれるなんて嬉しいわ。赤の大陸 に行ったら帰ってこれないかも知れないけど大丈夫？

あなた勇敢なのね」

ルードは下を向いて震えていた。耳まで真っ赤になっているのが分かる。

「まだ足りない？」

「もついい！ さっさと出発する」

肩を怒らせて、ルードは駐機場へと歩き出した。それにソラも続く。

「今回使うのあの貨物機だ。頑丈で航続距離が長い。荷台に追加分の燃料を積みば、惑星を二周はできる」

ルードの指さした先には、銀色の機体が朝靄の中に鎮座していた。

「一応客席もある。副操縦席も空いている。どちらにする？」

「副操縦席にするわ」

「ソラってさ……」

「？」

「なんでも即答するよな」

ソラは答えない。

「迷うってことはないの？」

「迷ってなんかいられない」朝靄の駐機場にソラの凜とした声が響く。「世界は待ってくれないのよ」

「地図がまるつきりない訳じゃないんだ」

貨物機の操縦席に収まったルードは、手元のモニターに地図を表示させた。かなり大ざっぱなものだった。

「衛星からの画像を元にした地図ね？」

「そうだ。ミレトトから大体四〇〇〇キロ程度で 赤の大陸 にたどり着くはずなんだ。時間にして……七時間くらいかな。予定通りにいく保証はないけどね」

「いいわ。出発してちょうだい」

「了解」

靄の晴れ始めた飛行場を貨物機がゆっくりと動き出す。西向きの滑走路に向かって、平坦な風景が流れていく。

「さっきの話さ……」

「？」

「親父をどうやって説得したのかって話……説得はできてないんだ。喧嘩した。形としてはさ、あんたが払った金で俺がルゲナ小型飛行商会からこの飛行機を買ったことになっている。俺は解雇さ」

「そう」

惑星ルテボボの太陽は、地球と同じく東の空から上る。貨物機は滑走路に長く自分の影を映し出す。

「だからさ。ここから先は一蓮托生だ。赤の大陸で最後までつき合つよ」

「……」

「どうしてそこまで、って訊いてほしいけど、自分で言つよ。ソラ。一目惚れだ」

「そう」

「そうだ」

銀色の翼が朝の大気を切り裂き、貨物機がぐんとその高度を上げた。

『赤と青の星』 海を越えて 2

ミレトを飛び立って四時間、ルテボボの自転の関係で、ソラたちは常に夜明けの中を飛んでいた。眼下にはたなびく雲。特段の問題もなく、飛行は順調に続いていた。

「冷蔵庫の中に飲み物があるから自由に飲んで」

副操縦席から一旦客室に移動していたソラに、ルードが声をかける。航路に問題なしとみて、自動操縦のまま飲み物を取りに来たようだった。

ソラは携帯端末を熱心に見つめている。

「……？ 何を見ているの？」

「赤の大陸の衛星写真。少し古いけれど」

「一般に流れている衛星写真は、たしか三十年くらい前のやつだね。入植がはじまったころのやつ。もっとも、ほっとらかしなんだから変わらないだろうけど」

「そうかしらね」

「火山の噴火とかで地形が変わるってこと？」

「三十年でそれはないでしょうけれど」

ソラはそこで言葉を切った。あきらかに続く言葉を飲み込んだ様子だ。

「ところで、赤の大陸についたらどこへ行けばいいの？」

「この貨物機、自動地図作製機が積んであったわね」

「ああ。積んである」

自動地図作製機は、航空写真を自動的に繋ぎあわせて地図データを作成していく装置だ。地図の作成が追いついていない新興惑星などでは、飛行時にデータを取っておくと、後々高く売ることができ。民間の飛行機ほどよく搭載していたりする。

「今、大体のルートを決めるから、それに沿って自動地図作製機を動かしながら飛んでちょうだい」

「何かを探しているの？」

「そうね。でも確証がある訳じゃない。だから、そのための調査よ」
「あのさ……」

ルードは一旦窓の外を見て航路に問題がないことを確認すると、ソラと通路をはさんだ反対側の客席に腰を下ろした。貨物機なので、客席の数は二十程しかない。

「ちよつと聞きかじった話なんだけどさ、チヨルココ星系政府が赤の大陸の調査を民間に依頼したらしいんだ。それと何か関係があるのかな」

「政府の依頼なら、わざわざ西海岸まで飛行機を探しになんかいかないわ」

「でも、この星の所有者は、政府の調査にはいい顔をしないと思うよ」

「へえ……」ソラが興味深げに顔を上げた。「それはどうして？」

「そういう言い伝えだよ。ほら、俺の姓ルゲナってのは、この星を所有しているテール・ルゲナ翁の血筋なんだ。まあ、この星にはルゲナ姓を持つ人は腐るほどいるんだけどね。で、ルゲナ一族にはさ、赤の大陸は触れてはいけない地だ、っていう言い伝えがあるのさ」

「言い伝えを詳しく聞かせてもらえる？」

ルードは、偉大なるラグタタが惑星ルテボボを発見した言い伝えを語った。

「その話、この星の人々はみんな知っていることなの？」

「さあ、どうだろう。俺は、たまたまじいさんがそういうのが好き……っていうか信じていて、ちっちゃい頃から散々聞かされてきたからなあ。でも、学校で教わる訳じゃないし、知らないひと多いんじゃないかなあ」

「あなたは、あまり信じていないのね」

「まあね。いくら宇宙大航海時代の話って言ったって、ちゃんと調べれば記録は出てくるだろうし。そこに神の怒りなんてことが書い

てあつたら、ルゲナのご先祖は笑いものだよ」

「じゃあ、言い伝えは何だと思う？」

「わからない。だから、俺も 赤の大陸 には興味があつたんだ。ソラの興味は別のところにあるみたいだけど」

「そうね」

ソラは視線を手元の端末に落とすと、作業を再開した。

ルードはしばらくそれを眺めていたが、やがて操縦席へと戻っていった。

「見えた」

操縦席でルードが声を上げた。まだ宵闇に沈む地平線に、海とは違うシルエットが見え始めている。 赤の大陸 の稜線だった。

「地図のどのあたりかしら」

「航路から算定すると、東海岸のこのあたりのはずだけど」
ルードが地図を指し示す。

「さっき決めたルートに沿って飛んでちょうだい」

「でも、こんなに暗いと、自動地図作製機の解像度が上がらないけど」

「構わないわ。とにかく飛んでちょうだい」

ソラは副操縦席から身を乗り出すと、肉眼で地上を見下ろし始めた。

赤の大陸 。衛星写真で見ると赤い砂岩ばかりが目立つ大陸。

青の大陸 とは違い、こちらは自然の造山活動による峻厳な山々も見ることができる。ソラの設定したルートは、山脈に沿って、禁の平地を重点的になぞっていた。

大陸上空に入ってから約二時間、空がうつすらと明るくなり始めたその時――

「戻って!」

「え?」

「今のところにもう一度戻ってちょうだい」

「戻る？ え？」

ルードは言われるままに貨物機の機首を旋回させる。

「ルートからはずれるよ」

「灯りが見えたわ」

「灯り？ 気のせいじゃないか？」

「気のせいじゃない。人がいる。何かの小屋のようなものがあるわ」
「……」

ソラの指示に従って、貨物機は岩山の禁に近づいていく。大きな岩がそこかしこに転がる平原に、朝日が少しずつ光を当てていく。

「高度を下げて」

ルードが操縦桿をぐっと押し込んだその時――

地上で何かが光った。

「避けて！」

「！」

ソラの絶叫とともに、貨物機に強烈な横向きの力がかかる。一拍遅れて、突き上げるような衝撃がソラたちを襲う。

朝焼けの空と、赤い大地と、点滅する操縦席のランプ類がぐるぐると回り、さらなる衝撃とともに、ソラの意識は暗闇へと飛んでいった。

『赤と青の星』 公文書館分室 1

「公文書館というか……図書室、くらいの言い方が正確ですね」
数機の検索端末が並ぶだけの小さな部屋を見回して、ステイーがぼやいた。

ルゲナ翁との交渉に手詰まりになったデニスたちベルカルチャ惑星開発会社の面々は、チヨルココ星系政府に公文書の閲覧許可を求めたのだった。ここはルテボ支府内の星系公文書館分室だ。

「公文書館なんてどこもこんなものだ。利用者が多い施設じゃないしな。さつさと始めよう」

デニスが検索端末の前に腰を下ろす。カード型の政府専用パスキ―を端末に差し込むと、検索画面が立ち上がった。

「俺は現状の 赤の大陸 について調べる。ステイーはルテボが発見に関する報告を調べてくれ。デイーアは、昨日の？出稼ぎ？と？海賊？についてなにかあるかだ」

政府から支給されたパスキ―は三つ。デニスが使っているものが政府高官専用の閲覧リンクS。他のふたりのものは一般政府関係者のリンクBだ。

「ときに、前から副社長に訊いてみたいことがあったんですけど……いいですか？」

端末に軽やかに指を滑らせながらデイーアが訊いた。

「なんだ？」

「副社長と社長って、どうやって知り合ったんですか？」

「秘密」

「ええ？ けち。教えてくださいよう」

「社長に訊いてくれ」

「……あの社長が教えてくれると思いますか？」

「さあな。女同士だとどんな話をするのか知らないしな」

「俺、噂ならきいたことがありますよ。副社長がナンパしたんでしょ

「？」

「秘密だ」

「じゃあじゃあ、話変えます。社長と副社長って肉体関係あるんですか？」

「……もつと秘密だ」

「隠すってことは、あるってことですね！　そうですね！」　ディーアが身を乗り出す。

「いやいや、逆を取ってないのかもしれないよ」とステイ。

「何それ」

「だってほら、どう見ても社長と副社長はパートナーじゃん？　ビジネスだけじゃない訳だから、俺らから見れば男女の関係なのは一目瞭然……に見えるじゃん」

「うん」

「ところが、ぎつちゃん」

「ぎつちゃん？」

「実は二人の間には何もない……なんてことになったら、デニス副社長の意気地なし、とかそんなことになるわけだよ。デニスさん面目丸つぶれ」

「ああ、そっか！……そうなの？　副社長」

「おまえら仕事しろ！」

「……計算、合わないですね」ディーアがつぶやいた。

「計算？」

「ええ。見てください副社長。これがルテボボ中央銀行の月ごとの預金残高。これが貿易収支。ルテボボの通貨はチヨルコ星系発行のものだから……本来の流通量はこの数字ですね。で、全体を合計すると……ほら、計算が合わないんですよ」

ディーアが示した数字は、どこから政府が把握していない資金の流入があることを示していた。基本的に通貨は通貨カードの残高としてやりとりされるので、キャッシュによる筆筭預金のようなものはそれほど金額にはならないはずだ。

「噂の出稼ぎが証明されたつてところか？」

「……それだけでは説明しきれないですね。金額大きすぎますよ。個人の収入だけじゃなくて、企業規模で非課税の収入があるんじゃないですか？」

「我々は税務署ではないから課税の有無はともかく……なんだと思う？」

「海賊のことが頭をよぎりますよね」

「そうだな」

「妄想全開で話しますけど…… 赤の大陸 に武装宇宙船の製造工場があるんじゃないですか？ ルテボボの企業のいくつかはそれに力を貸しているんじゃないかと思うんですよ。もちろん、チヨルコ星系政府には秘密で」

あながち妄想とはいえないな、とデニスは思った。いくつかの事柄はこれで説明が付いてしまう。ただ、その通りだとしたら、武装宇宙船を作っているのはいったいどの誰なのだろう。どこかの大国が、密かに宇宙艦隊の増強を図っているのだろうか。それとも、いまは伏している新たな勢力があるというのだろうか。その勢力が、

この惑星上にいないという保証はなにもない。とすれば、星系政府に請われて 赤の大陸 を調査しようとしている我々は、邪魔もの以外の何者でもないだろう。

「ステイー、そっちはどうだ？」

「……ルテボボ発見の経緯が、リンクBで閲覧できないなんてことありますかね？」ステイーが困惑気味に顔を上げた。「リンクSのパスキー、貸してもらえますか？」

デニスからパスキーを受け取ると、ステイーは再び検索端末に向かった。

「年代は……で、惑星ルテボボの第一次調査報告つと。あつた……あれ？ あれ？」

「どうした？」

「惑星ルテボボの第一次調査報告書が、リンクSでも閲覧不可になつてます」

「不可？ 馬鹿な。それ以上の閲覧リンクなんてないだろう」

「……そうなんですが」

デニスとデイーアがステイーの後ろから端末画面をのぞき込んだ。「これ……もしかしたら誰かが意図的に封印したんじゃないですか？ ステイー先輩、ちよつと代わつてもらえますか？」

デイーアは検索端末の前に座ると、端末脇の目隠しパネルを開いた。

「先輩、入り口見ててもらえますか？」

「俺が？」

「ほかにいないでしょう？」

「頼むよ、ステイー」

「……はい」

渋々、ステイーが公文書館分室の入り口脇に張り付く。

「いいですか？ 副社長」

「ああ」

デイーアは自分の携帯端末を取り出すと、外部接続コードを引つ

張りだし、目隠しパネル内の端子のひとつに繋いだ。

「閲覧リンク自体は足りてるはずですから……ちよいちよいとやれば……」

ディーアが携帯端末に指を滑らすと、公文書検索端末の画面に何度かノイズが走った。携帯端末側の画面に数字の羅列が走り始める。ディーアが目皿のようにしてそれを見つめ、やがて一カ所に目を止めた。素早くいくつかの数字を書き換える。

「はい、これで閲覧できるはずです」

ディーアの操作に従って、惑星ルテボボ第一次調査報告書が開示される。

デニスはいり入るようにそれに目を通して――

「な、なんだこれは……」

突如、大音量のブザーが鳴り響いた。

「なんだ？」

「おそらく、この報告書にトラップが仕掛けられてたんですね。パラメータを書き換えて閲覧したら作動するようになってたんじゃないかと思います」

「おい、これやばくないか？ 逃げなきゃまずいんじゃないのか？ スティーがあわてて駆け寄ってくる。」

「逃げる？ まあ待て。ディーアが報告書を元通りに書き直してからだ」

「戻しておく意味があるかどうかは分かりませんがけどねえ」

「そんなのんびりしてて、警備とかとんでくるんじゃない」

「だから落ち着け、スティー。よく聴いて見る。これは火災報知器だ。件の報告書を閲覧した人間を驚かすだけのためのものだよ」

「できました。行きましょうか」

ディーアが立ち上がる。三人が揃って公文書館分室を出たことで、ルテボボ支府の警備員が数人走ってきた。

「大丈夫ですか！」警備員のひとりがデニスたちに声をかける。

「何ですか？ どこかで火事ですか？」とデニス。

「そのようなのですが、まだ出火もとが特定できません。あわてずに建物の外へ避難してください」

「分かりました」

何食わぬ顔をして、三人はその場をあとにした。

「副社長、いったい何が書いてあったんですか？」

「細かな話はあとだ。ただ、あの報告書が本当なら、赤の大陸の地質調査どころの話じゃなくなるな」

「……」

「デューア。社長の居場所、強制的に検索できるか？」

「……やってみます。この大陸にいるなら何とかなと思いますけど。衛星がカバーしていない地域になると……」

「試してみてください」

「はい」

衛星がカバーしていない地域。

この星を出てしまっていることはないだろう。

とすれば――

『赤と青の星』 赤い大地 1

灼熱の太陽がじりじりと大地を焼いている。辺りは見渡す限り砂と岩が広がっている。不毛の大地という言葉が、これほどの確な場所をソラは知らない。

「飲み物のボトルが何本か無事だった。よかったよ」

ソラが座り込んでいる岩影に、ボトルを抱えたルードが現れた。数百メートル先には貨物機の残骸が横たわっている。

今から三時間ほど前、ソラたちの乗る貨物機は何者かに撃墜された。墜落する直前に、ソラは小型の地对空ミサイルのようなものはつきり見ている。それは後部の貨物室に直撃し、貨物機はあえなく墜落した。ただ、ソラの叫び声にとっさに反応したルードが、緊急脱出装置を作動させたことがふたりの命を救った。

地上を見ようと高度も速度も下げていたことも幸いした。貨物機はバラバラにはなったものの、奇跡的に燃料への引火が起らずにいた。落下の衝撃から目を覚ましたふたりは、それを見つけて狂喜した。なんとか中に入り、一部の荷物と、食料や飲料水を運び出すことに成功したのだった。

「しかし、これは想像以上に暑いね」

「そうね」

今、ふたりは夜が来るのを待っている。この日差しの中を動いたりしたら、あつという間に干からびてしまうだろう。

「ねえ、ソラ。やっぱり考え直さない？　ここから移動するなんて無理だよ」

「間違いなく人のいる施設があったわ。私たちが狙撃されたのが何よりの証拠よ」

「なら、いけば殺されるかもしれない」

ソラは無意識に腰に手を回し、いつも拳銃がはさんであるベルト付近をなでた。落下の衝撃で拳銃はどこかへ行ってしまう、結局見

つかっていない。

「待っていても助けはこないわ」

「それが現状に対する正しい認識なのはわかるけど」

「そうじゃないわ」

「え？」

「それは人生についての普遍的な認識よ。どんな時でも、待っていても助けはこない。自分で動かなければだめなのよ」

「……」

ソラはごつごつとした岩に背を預けると目を閉じた。

「夜通し歩くことになるわ。眠れないかもしれないけれど、休んで起きなさい。あと、持って動ける荷物は限られるわよ」

「なんて図太い女だ……ソラ」

ルードが感嘆する目の前で、ソラは小さく寝息をたて始めた。

『赤と青の星』 赤い大地 2

満点の星空の下を、ソラとルードは歩いていった。それぞれに大きなりユックを背負って、ひたすらに足を前に進めている。

「ねえ、ソラ」

「なに？」

「そろそろ聴かせてくれてもいいと思うんだ。なにを探しているのかを」

「……」

「明らかに、ソラは人がいることを予測していた節があるよね。やつぱり、政府の関係者とか、もつといえバスパイとか、そういうのじゃないの？」

「スパイ？」珍しくソラが笑っていた。「そんなまだるっこしい存在になるつもりなんてないわ」

「じゃあ何？」

ソラが笑ってくれたことに気をよくして、ルードは勢い込んで訊いた。

「私は、自分が思った通りのことをして生きている。それだけ」

「この大陸に来たのも個人的な思いがあつたからってこと？」

「そうよ」

「どんな？」

「あんまり女のことを根ほり葉ほり訊くと、嫌われるわよ」

「あれ、女は自分のことをしゃべりたいものなんじゃないの？」

「しゃべりたいことだけ、しゃべるのよ」

「……じゃあ、俺のことをしゃべろうか」

ルードは少し歩調を速めて、ソラの前に出た。

「いないわ」

「聴いてよ。すぐ終わるから」

「……どうぞ」

「俺はさ、男ばかり四人兄弟の末っ子なんだ。兄貴たち三人は、なんだかみんなやりたいことってのを見つけて出て行ってしまった。俺は、しかたなく親父の会社の手伝いをすることにしたんだ。それが俺のやりたいことなのかどうかは分からないけど、仕方がないしって。それでも、いつかきつと何かチャンスがくると信じていた」

「何かチャンス？」

「そうだ。たとえば 赤の大陸 に行きたいって、そんな美人が訪ねてくるとかね。終わり」

ルードはくりりと振り返ってソラを見た。そして、ソラが肉食獣のような瞳でルードを見つめているのを見た。

「え？　なんか怒ってる？」

「怒ってなんかいないわ。ただ、幼い頃のことを思い出しただけ」

「へえ、ソラの幼い頃ってどんなだったの？　さぞ可愛かっただろうね」

幼い頃の自分。

誰かが、何かが助けしてくれると信じていた自分。

「私は小さい頃、王様になりたかったわ」

「ははは。それは、誰もが憧れるね。でも、お姫様じゃなくて王様なんだ」

「そう。王様はみんなを幸せにする存在だから。だから私は王様になりたかった」

満天の星空に、すーっと流れ星がひとつ走る。

「その夢は叶えられそうなの？」

ふっ、と自嘲気味にソラが笑う。攻撃的だった瞳の色が柔らかくなり、その眼差しが星空へと向けられる。

「全てのひとを幸せにする王様。そんな存在がどれほどに難しいモノなのか、それを知るのにたいして時間はかからなかったわ。だからそれは、私の仕事では無いのかも知れないとも思うようになった。今でも理想としては私の中にあるけれど。……それに、私は知ったから」

「知った？ 何を？」

「星の女王」

ソラの凜とした瞳が、ひととルードに据えられた。歩みが止まっている。

「この宇宙にはね、全てを見通している星の女王が存在するわ」

ルードはソラの瞳に絡め取られたような気がした。

「それは……神様のようなもの？」

「さあ。私にはわからないわ」ソラの視線がはずれる。「でも、あの時知ったのよ。あの星々の向こうから、透徹で、伶俐で、それでいて慈悲深い眼差しが、常に私を見ていることを。見ているだけで助けてはくれないけれど、でも、時々微笑んでくれる気がするわ」

「それって、ソラが目指した王様とは違うんじゃない？」

「そうね。でも良いのよ。世界の全てを見ている星の女王のもとで、私は、私が見える範囲だけでも幸せにできるように努力をする。ひとの身でできるのはそれが精一杯だと知ったからね」

ソラはまた歩き出した。

「じゃあ、これも誰かの幸せのためなの？」

「もちろん」

『赤と青の星』 ルゲナ一族 1

ベルカルチャ惑星開発会社の面々は、何度目かのテール・ルゲナ翁との面談に臨んでいた。

「またあんだ達か。何ど来られてもなあ」

「ルゲナ翁。今回は少し趣旨が違います」

デニスの言葉に、ルゲナ翁は少し興味を惹かれたようだった。

「翁。我々がチヨルココ星系政府から依頼されたのは、赤の大陸の地質調査です。星系政府は、あの大陸に豊富な鉱物資源が眠っていると踏んでいます。それは、今までもお話した通りです」

「ふむ」

「我々は改めてこの惑星ルテボボの歴史を調べてみることにしました。ベルカルチャ惑星開発会社は、この星系からはずいぶん離れたところに本拠地をおいています。我々の経験では、地域にはそれぞれの風習や慣例があり、それはおいそれと余所者が無視してよいものではない場合が多いのです」

「当然じゃな」

「赤の大陸に手を出すべからず、という翁のお言葉はよく分かりました。それが、惑星開発以降、この星に住む人々の不文律となってきたことも。ですから、地質調査に関しては、チヨルココ星系政府に対して、諦めるように進言することも考えています」

翁はひげをしごきながら鋭い視線を送ってくる。

「地質調査に関しては……と申されるか？」

「そうです。地質調査などしなくとも、赤の大陸は既に十分開発されている可能性があるからです」

「……何やら良くわからないが」

と、突然部屋の外がざわつき始め、翁と面会中の部屋の中へ、数人の屈強な男たちが入ってきた。その誰もがベルカルチャ惑星開発会社の三人をにらみ付けている。

「翁、こういうことですよ」男たちの中のひとりが言った。「こいつらは、俺たちが赤の地でこっそり悪さをしているんじゃないか、と言っているんですよ」

「なんと……そんなことがあるはずがない」

「翁、あとの話し合いは俺たちがする。それで良いか？」

「……あまり手荒なことはせんようにな」

「分かってるよ」

まっ青になる三人を尻目に、テール・ルゲナ翁は部屋を出て行った。残ったのは、屈強な男たち五人と、ベルカルチャ惑星開発会社の三人。

「さて、話し合いを続けようか。え、余所者のお三人様よ」

翁が座っていた安楽椅子にどつかと腰を降ろしたのは、びつしりと髭を蓄えた壮年の男だった。彼はドラン・ルゲナと名乗った。

「さっき言っていたこと、詳しく聞かせてくれないか」

「どのことですか？」とデニス。

「赤の大陸　が既に開発されてるって話さ」

「……最近、この近辺の宙域で、海賊船と呼ばれる未確認の武装宇宙船が多数目撃されています。それは恐らく　赤の大陸　で建造されているか、そこを根城にしているはずですよ」

「海賊の噂はきいたことがあるが……この星が根城だなんて噂は初耳だ」

「出現ポイントを全部調べたわ」とディーア。「この惑星の周りだけ海賊船が目撃されていないの。不自然なくらいに。でも、ある程度の距離を置くと急に目撃数が増える。まるで自宅の近くで悪さをしない子供のようにね」

「……」

男たちは黙ったままディーアをにらみ付けた。

「ま、まだあるぞ」と今度はステイー。「不自然な出稼ぎ労働があ

ちこちであるそうじゃないか。惑星内の通貨流通量もよく調べるとおかしい。星系政府が調査に乗り出せば、ルテボボ中の多くの企業に追徴課税がなされるに違いないんだ！」

「なあ、お前達はなにがしたいんだ？」

ドランが低い声を出した。

「お前達は一介の調査会社だろう。いったい何を思ってそんなこと調べたんだか知らないが、仮にお前達の主張がその通りだったとして、だからなんだ。何か関係あるのか？ それとも、これはそう……脅迫つてやつか？ だまってやるから金を出せとか言うつもりかい？」

「惑星開発つて、何のためにやるか知ってますか？」

ドランの凄みに対して、デニスはどこ吹く風でそう質問した。

「何？」

「それは、そこに住んでいる人々を幸せにするために行うんです」

「……」

「少なくとも、それが我が社の社是なんですよ。だから、武装宇宙船を秘密裡に造っているようなことがもし本当にあるなら、それは黙って見過ごせない」

「正義の味方気取りかよ」

「我々は女王の味方です」

「女王？」

「星の女王。常に我々を見てくれている」

「訳のわからねえ宗教か」

ドランが立ち上がった。胸の前で拳を解す。そんな威嚇の態度にも動じず、デニスは続けた。

「ねえ、ドランさん。我々は惑星ルテボボ第一次調査報告書を閲覧しました」

どよっ、と男たちが動揺した。

「ああ、その様子だと何が書かれていたのか知っているようですね」「な、何のことだ」

「あの報告書が本当なら、この惑星ルテボボの所有権をルゲナー族が主張するのは少し難しくなりはしませんか？」

「馬鹿な！ あの報告書には、少々妙なことが書いてあるだけだ」

「でも、星系政府や、他の惑星国家はそういう判断はしない。宇宙管理機構惑星権利裁判所の訴訟に持ちこめば、少なくとも所有権保留という結論ぐらは出そうですね」

「何が言いたい」

「全てを話してもらえませんか。ここ惑星ルテボボの人々が、武装艦隊を整備しようとしているとは思えません。今、私が言ったのと同じような話で脅迫されているのではないのですか？」

「仮にだ。仮にそうだとすると……お前達に何ができる」

「調査ができます」

「調査？」

「ルテボボ第一次調査報告書に変な言いがかりをつけられる前に、赤の大陸の正式な調査報告書を我々が提出すれば良いんです。そうすれば、ルゲナー族の所有権が揺らぐことはない。下手に隠すからつけいる隙を与えるんですよ」

『赤と青の星』 ルゲナ一族 2

「副社長…… かつこよかったです」

ルゲナ一族との面会からホテルに戻る車内で、ディーアが腰をくねらせながらデニスに迫った。

「デニス副社長、俺にはいまいち状況が見えないんですけど」

「ああ、そうだな。惑星ルテボボ第一次調査報告書にはな——」

ステイーは、デニスの話を聴いているうちに驚愕の表情になった。

「そ、それって、世紀の大発見じゃ……」

「ルゲナ一族が 赤の大陸 を封印した意味も分かってるってものだし、更に言えば、この 青の大陸 の不可思議な状態についてすら解決の糸口になるかもしれない」

「最初から妙に平坦だったってやつですね」とディーア。

ステイーはしばらくこめかみを押さえてうんうん唸っていたが、やがて口を開いた。

「でも、ルゲナ一族の所有権を揺るがすってのはいい……」

「ステイー先輩って馬鹿ですよねえ」

「なに？」

「よく考えても見てください。報告書に書いてあったこと、先輩は百パーセント、掛け値なしに信じられますか？」

「いや、それはちよつと信じがたいが」

「はい。んじゃ、先輩なんかよりずーっと頭の固い、チヨルココ星系政府の役人や、他の国のお偉いさんとかはどうですか？」

「…… そうか。とすると、報告書の解釈が違ってくるのか」

「そういうことですよう」

「この宇宙にはさ」とデニスが口を挟む。「人間が知らないことなんか山のようにあるんだよ。人間の認識なんて狭量だから、自分の目で見たモノしか信じることはできない。惑星ルテボボ第一次調査報告書の記載も、自分達に理解できる内容に読み替えてしまつんだ。

ルゲナの先祖たちは、恐らくそれが分かっていたんだろうな。だから、時期が来るまで 赤の大陸 を封印したんだと思う」

「ただ、それが仇になった……」とディーマがつぶやく。

有人惑星の大陸がまるまるひとつ立ち入り禁止——こんな好条件はなかなか見つからない。武装宇宙船の艦隊を整備したい何者かが、これを見逃すはずはなかったのだ。

「ディーマ、社長は見つかったか？」

「だめです。携帯端末は検索可能範囲外にあるみたいです」

「この惑星に偵察衛星はないのか？」

「そんなのありません。静止衛星ばかりです」

「となると……宇宙船で代用するしかないか」

「え？」

「この星域にうちの息がかかった宇宙船はいないか？」

「あ……ちよつと待ってください」

ディーマが携帯端末で検索を開始する。

「お隣の惑星チヨルココ第一に向かっている商船がありますね。ベルカルチャ船籍です」

「呼び出せるか？」

「はい」

「ステイー、状況説明と応援を依頼してくれ。ディーマは依頼航路の作成を」

車がホテルに着くと、ステイーとディーマは飛び出していった。

その背中を眺めながら、デニスは次の一手に頭を巡らせた。

『赤と青の星』 洞穴 1

ソラとルードは一晩中歩いた。

ソラは貨物機が狙撃された場所の地形を大体覚えていたが、空から見るのと地上を歩くのでは勝手が違う。墜落の衝撃でずいぶん距離が離れてしまったこともあり、ふたりは地形を確認しつつひたすらに東を目指した。そして、東の山が朝日に染まり始めた頃、岩と岩の間にできた洞穴を見つけ、そこで昼の暑さをしのぐことにした。「本当に 赤の大陸 は 青の大陸 と違うよな。 青の大陸 にはこんな山々はほとんどないもんな」

ひんやりとした洞穴の岩に寄りかかって、ルードがぼんやりとつぶやいた。

「おかしい話ね。どちらの大陸も同じように赤道付近に位置しているのに」

「大きな隕石の激突で山がすべて吹き飛ばされたんじゃないか、つてのが有力な説だけだね」

「その説には賛同しかねるわ」

「なぜ？」

「 青の大陸 の衛星写真を見ても、それらしい痕跡は見つけられない。それに、隕石の落下跡って、なかなか植物が根付きにくいんだよ。でも、 青の大陸 は豊穡な土地だわ」

「それは地球型惑星改造の結果ってことじゃないのか？」

「そうね。そうかも知れないわね」

ソラはそれ以上は議論に乗ってこなかった。ルードはなんとなく手持ちぶさに周囲を見回し、地面から小さな石を拾い上げた。わずかに赤色の結晶を含んでいる。

「これ、宝石だったりしないのかな」

「……おそらくルビーだと思うけれど、宝石的な価値があるかどうかは不明ね」

「へえ……本当に？　宝石ってそんなに簡単に転がっているモノなの？」

「簡単ではないけれど、造岩鉱物なのだからあっても不思議ではないわ。宝石としての価値は、綺麗な結晶に相応のカットを施して初めて決まるのよ」

「ふーん。ルビーは工業用にも重要な鉱物だね」

「工業用のルビーは人工的に結晶させたものが殆どだけれど」

「さすがに女性は宝石に詳しいね。俺なんか、ダイヤモンドとルビーと、あとはサファイアぐらいしか知らないよ」

「ルビーとサファイアは殆ど同じモノなのよ」

「？」

「どちらも鋼玉という酸化アルミニウム鉱物なの。微量のチタンと鉄が含まれると青くなってサファイアに、クロムが含まれるとルビーになる。クロムのせいでルビーの結晶は育ちにくいから、希少価値ならルビーのほうが高いわね」

「ルードがまじまじと手元のルビーの原石を見つめる。」

「一晩歩いてみて、ボーキサイトの岩をずいぶんと見かけたわ」

「ボーキサイト？」

「アルミニウムの水酸化鉱物。アルミニウムの原料になるわ。アルミは宇宙船の重要な資材よね」

「……やっぱり、ソラは調査団の一員じゃないの？」

「この程度の知識、地学に興味があれば誰だって知っているわ。今日日、惑星の地質はビジネス的にも重要なものよ」

「教えてくれ。ソラはいつたい何の仕事をしているひとなの？」

「この状況でそれが重要なの？」

「ソラのことを知りたいんだよ」

「秘密」

「またそれ？」

「ええ、またそれ。女は秘密が多い方が魅力的でしょ？」

『赤と青の星』 洞穴 2

「ソラ、眠っている？」

「なに？」

「このまま何も見つからず、青の大陸に帰ることができなかつたら、俺たちはずっとふたりで暮らすことになるんだよな」

「……そうはならないわ」

「何だよ！ そうなる可能性もあるだろ？」

「……」

「俺、ちょっと頼りないかも知れないけど、ソラのこと大切にするからさ……」

切羽詰まった表情でルードがソラににじり寄ってくる。

「抱かせるってこと？」

「いや…… そんなにはつきりとは言っていないけど」

「顔に書いてあるし、行動が示している」

「い、いざとなったら男の腕力には敵わないだろ？」

「さて、どうかしら」

「ソラは俺みたいな年下は嫌い？」

「年齢でひとの評価を変えたりしないわ」

「じゃ、じゃあ！」

「でも、発言と行動で評価を変える。ねえ、坊や。そんなに眼を血走らせてたら女性は興ざめよ。行動で惚れさせるぐらいしてみなさい」

「そ、それなら、行動で示したら俺の彼女になってくれる？ 抱かせてくれるか？」

はっ、とソラはひとつため息をついた。

「それは、娼館で娼婦を買うのと同じような言いぐさよ」

ソラは立ち上がると、洞穴の外へと歩き出した。

「ど、どこへ？」

「しばらく外すわ」

「！」

ルードが泣きそうな顔になる。ソラは振り向かずと言った。

「日が暮れたら出発するわよ。どうしても我慢できないなら、それまでにひとりで処理しておきなさい」

西に傾いた太陽を、ソラは岩の上から眺めていた。気温はまだ高いが、真昼よりは過ごしやすい。真っ赤に染まるルテボボの太陽は、地球で見た夕焼けを思い出させた。

さっきのルードの顔を思い出してわずかに胸が痛む。彼が年頃なのは分かっていたことだ。早晚迫ってくるだろうとも思っていたし、予定通りいなした訳なのだが――

ああいうストレートな迫り方は、ソラとしてはいつそ好ましくもあるのだが、今はそれどころではない。加えて言えば、ルードを単なる無邪気な年頃の少年と見る訳にはいかない事情もある。

「……ほとんど確証はないけれど」

墜落した貨物機から脱出したあのとき、ソラが気付いたときには、ルードは既に動き始めていた。あつちに貨物機の残骸があるよ、とソラに語りかけた。

「……」

ソラは無意識に腰に手を回し、そこに拳銃がないことを確認する。緊急脱出装置はシートごと搭乗者を機外へ放り出すものだった。シートのパラシュートが開き、地面に落ちたときもシートに座った格好のままだった。シートと腰の間に挟まっていた拳銃が、いかな衝撃とはいえ簡単にどこかへいつてしまうものだろうか。

そして――

ソラは上空を見上げ、右腕に固定してある携帯端末を掲げる。

ソラには、仲間たちが自分を見つけてくれるという確信がある。

この 赤の大陸 上空に衛星は飛んでいないかも知れないが、それ

でも彼女を捜し出してくれるひとたちがいることに確信をもっている。ソラの落ち着きは、そこに根ざしていると言って良い。

しかし。

ルードのあの無邪気さはなんだろう。こんな岩と砂しかない不毛の大地で、ふたりで暮らそうなどと、普通感覚ならば言えるはずもない。

ソラの瞳に暗い光が宿る。肉食獣のようなそれは、暮れゆく西の空に据えられ続けた。

『赤と青の星』 洞穴 3

完全に日が暮れたのを見届けて洞穴に戻ると、入り口前でルードがソラを待っていた。なにかを吹っ切ったような顔をしている。ソラはさっきのことには触れずに、行きましようか、と言って歩き始めた。

ふたりは道なき道を歩き続けた。砂と岩ばかりの山裾は、時に大きく迂回し、時に小高い丘を越えて進まなければならなかった。

そうして、二人が何度目かに丘を越えたところで、眼下に見覚えのある地形が広がった。

「ここね……」ソラがつぶやく。

星明りに慣れた目には、丘の禁の平地の状況がよく見える。明らかに人の手による小屋が、大きな岩に寄り添うように建てられていた。今日は灯りは見えない。

「行ってみましょう」

ソラが丘を下り始める。

「待つて。そんな、武器も持たずに危ないよ」ルードが後を追ってくる。「俺らの飛行機を打ち落とした奴らだぜ」

「何者かは知らないけれど、でも、対人武装を持っているとは思えないわ」

「なぜ？」

「赤の大陸 にひとはいないのだから」

「……」

ソラは後ろを振り向かず走った。小屋は岩を積み上げた粗末なもので、窓にはガラスもはまっていない。ソラは窓の脇にぴったりと体を寄せると、慎重に頭だけで中をのぞき込んだ。

「誰もいないわ」

「そう」

頼りは星明りだけだが、中にひとの気配は感じなかった。

ソラはぐるつと小屋の周りを見て回り、一気に入り口へと近づく。そこは扉すらはめられていない。

ソラは周囲を見渡した。ルードがわずかに離れたところに立っている。それ以外にひとの気配はない。

ソラはゆつくりと小屋の中に歩を進めた。

岩で囲った上に木の板で屋根を葺いただけの粗末な小屋。木製の古ぼけたテーブルが中央におかれていて、それ以外には椅子すらない。テーブルの上には、一枚のメモが置かれていた。無造作に殴り書きされている数字とアルファベット。

——1534E06。02、

「ねえ、ルード。この部屋のどこかに、地下への入り口があるんでしょう?」

「何を言っているんだ? そんなの知らないよ」

ソラはメモをルードの目の前にかざした。

「15時34分、東方06度02分……私たちが飛んできた時間と方角にぴったりね」

ひとの住まない 赤の大陸 に現地時間はない。

「レーダーで捕捉したんだろ?」

「こんな小屋、黙ってやり過ごせば絶対に気づかれないのに。砲撃は、わざわざ居場所を教えてくれたようなものよ。おかしいでしょう?」

「……」

「まだあるわ。あなた、出発前に言っただわよね。貨物室にも燃料を積みめば、惑星を二周だってできるって」

「言っただかな」

「でも、貨物室に予備の燃料は積んでいなかった。だから貨物室を狙撃されたにも関わらず燃料への引火を免れた」

「まいったな……」

ルードが星明りの中で、がりがりと頭をかいた。

「燃料代は高いんだよ。ケチったのが仇になったか。まだあるんだ

る？」

「訊きたいの？」

「是非」

「この大陸に落ちてからのあなたの態度よ。明らかに助かることを知っていた。そうでなければ、あんなに脳天気私に迫ってなんてこれないはずだもの」

「俺に言わせれば、君の方が驚嘆に値するよ。こんな状態になれば心細くなって簡単に落ちると思ったんだけど」

「ルードの手がずっと差し出された。その手には、黒光りする金属の固まりが握られている。」

「やっぱり」

「茶番は終わりにしよう。おとなしく従ってくれないと、君は自分の拳銃で死ぬことになるよ」

『赤と青の星』 小さな出会い 1

初めて降り立った惑星ルテボボの気は、予想以上にさわやかだった。首都ラグタタの宇宙港からでも、この大陸がどれほど平らかなのが良く判る。

「打ち合わせは明日から行います。ホテルにご案内しますので、旅の疲れをゆつくりとお癒してください」

迎えに出た担当者がにこやかに言う。

「ありがとうございます。お言葉に甘えさせていただきますわ」

「あの、お連れ様はご一緒ではないのですか？」

「ああ、他の連中は少し遅れてくるわ。前の案件で別の場所にいたものでね」

「分かりました」

空港を出て、車で十分も走ればホテルだった。チェックインをして、部屋に荷物を放り込むと、ソラは夕暮れのラグタタに飛び出した。

ルテボボの一日は地球時間で22時間。短い夜を満喫しなければ。歓楽街での、ソラの楽しみ方は独特だった。ひとつの店に三十分程しかないのだ。目に付いた店に飛び込み、カウンターに座ると飲み物とお勧めのメニューを頼む。店主や周りの客に気さくに声をかけ、追加をすることなく店を出る。そうやって、一晩で十件近い店をはしごしてまわるのだ。

いつものようにラグタタの歓楽街ではしごを繰り返しての六件目。小さなミュージックバーにソラは入った。

ステージではランペットが哀愁漂うメロディーを奏でている。

テーブルはいっぱい、ソラはカウンターの端に腰かけた。

「こちら、お勧めは何？」

「何でも美味しいよ」と恰幅の良いバーテンが無愛想に答える。

「そう。じゃあ、ソーセージとビールを頂くわ」

「あいよ」

そうして、ソラがトランペットに耳を傾けながら店内を眺めると、隅っこにしゃがみ込む小さな女の子が目についた。誰か連れがいるようには見えない。

バーテンがビールとソーセージを持ってきたのをつかまえて、ソラは訊いた。

「あそこの女の子は何をしているの？」

「何もしてないよ」

「そう」

ビールをぐつと半分ほどあけたソラは、席を立つと女の子に近づいた。

「こんばんわ、お嬢さん」

「こんばんわ」

女の子はびっくりしたように顔を上げた。栗色の髪に大きな目をした可愛らしい女の子だった。

「私はソラ。お嬢ちゃんは？」

「わたしはネリア」

「そう。ネリアはこんなところで何をしているの？」

「パパを待っているのよ」

「そうなんだ。パパ、早く来ると良いわね。でも、もう夜も遅いわ。お家に帰った方がいいんじゃない？」

「でも……」

明らかにネリアは眠そうだった。しかし、それでもそこを動こうとしない。周りの客たちも、ソラとネリアを見て見ぬふりをする。

「ネリア、なにか食べる？」

ネリアは小さく首をふった。

「ママがね、知らないひとから食べ物もらっちゃだめだって」

「あら、ネリアとソラはお友達じゃないのかしら？」

「ソラはおともだち？」

「お友達よ」

「うん、おともだち！」

「何が欲しい？ 夜も遅いし、温かいミルクはどう？」
「うん」

ソラはバーテンを呼ぶと、ネリアに温かいミルクをやってくれと頼んだ。黙って頷いたバーテンは、マグカップに入れたミルクを出してくれた。

「ありがとう、ソラお姉ちゃん」

「どういたしまして。ねえ、ネリアのパパはどんなひと？」

「すつごく大きくてね、やさしいの！ でも、おひげがゴリゴリしてちよつと痛いんだよ」

「そうかあ。で、今日はここで待ち合わせなのね。お仕事忙しいのかしらね」

「……」

上機嫌だったネリアが、目に見えてしゅんとなった。

「お約束したの。すぐ帰ってくるって。なのに……なのに……ふえっ、ひっ……」

「あらあら」

マグカップを抱えながら、ネリアは泣き出してしまった。ソラはマグカップを受け取って脇に置くと、泣いているネリアを抱き締めた。

「ネリアの親父は、一発当てに行つて帰つて来ないんだよ」先ほどのバーテンが近づいてきて、低い声で言った。

「一発当てに？」

「あんた、ルテボボに来たばかりだろ？」

「ええ。昼間についたばかりよ」

「ああ、だから知らねえんだな。ここいらへんでは有名な話なんだよ。一年ほど前によ、ちよつと人を集めたいって奴があらわれたんだ。半年ほど小惑星の鉱石採掘の出稼ぎをしないかって話でな。ネリアの親父はラグタタ郊外の農場に雇われてたんだが、ちよつとへ

まをやってクビになったばかりだよ。渡りに船ってんで乗ったんだ」

「……それで、帰ってこなかった」

「ああ。ネリアの親父だけが帰ってこなかったんだ」

いつの間にか、ネリアは泣き疲れて眠ってしまっていた。バーテンはちよいちよいとソラを手招きする。ソラはネリアからそつと離れると、バーテンに誘われるままにカウンターへと戻った。

「ここだけの話だが、ネリアの母親には、当初の約束の倍の金が入ったらいいんだ」

「亡くなっただってこと？」

「それは分からなねえけどな。だけど、母親が何度説明してもネリアには分からないらしくてよ……ああやって、毎日ここに来てるんだ。俺らもネリアの親父はよく知っていたからよ……なんだか切なくてなあ」

「そう……」

ソラはネリアを見やった。小さくなって眠っている姿が、なんともやるせなかった。

「あの子の家はどこ？ 連れて行ってあげなくちゃ」

「ああ、すぐ近くだよ」

『赤と青の星』 小さな出会い 2

「あら、どなた？」

ネリアの母親は、ソラの顔を見てつつけんどんに言った。

「ネリアの友達です。眠ってしまったので」

「……そのままバーに置いてきてもらって良かったのに」
「……」

ネリアの顔を見ようとせず、ネグリジエ姿の母親は部屋の扉を開けた。ラグタタの歓楽街から十分ほど歩いた、粗末なアパートメントの一室だった。

「悪いけど、そのままベッドに運んでもらって良いかしら」

「え？ ええ、構いませんよ」

小さな廊下を通って、奥の子供部屋へとネリアを運ぶ。あまり干していそうにないつぶれた布団に、ソラはネリアをそつと寝かせた。
「用事がすんだら、さっさと帰っていただけます？」

「旦那さん、出稼ぎから帰ってこなかったら嬉しいです」

「過去の話です。今はちゃんと新しい父親もいるのに、全然懐かなくてこまっているんですよ」

「そうですか」

ソラは出口に向いながら、母親に重ねて訊いた。

「ネリアのお父さんが行っただっていう小惑星って何処なのかわかりますか？」

「さあ。変なうわさはあったけど、どうでもいいことよ」

「変なうわさ？」

「本当は 赤の大陸 での作業だったって話。あそこでこっそり悪いことしてるんじゃないかってうわさもあったわ」

「悪いこと？」

「よく知らないわよ。ほら、夜も遅いんだから帰ってください」

ネリアの母親は、ソラを部屋の外に押し出すと勢いよくドアを閉

めようとする。ソラはそれを押さえて、最後にひとつだけ、と押し込んだ。

「ネリアのお父さんの名前は？」

「そんなことを聞いてどうするの？ オカムよ。オカム・ディバス」
ばたん、と勢いよく扉が閉ざされた。取り残されたソラは、振り向くことなくその場をあとにした。

歓楽街に戻ったソラは、ミュージックバーには戻らなかった。新たに数件の店をはしごして、明け方になってようやくホテルへと戻った。

「お客様。お連れ様のご到着しております。お部屋番号は……」

「ありがとう。それより、今から揃えてもらいたい物があるんだけど」

「いますぐ……でございますか？」

「そう、今すぐ。それから一番早い西海岸行きのバスの切符も手配できるかしら」

フロントのホテルマンは困惑を顔に出さずに一礼すると、ソラをコンシェルジュのところへ案内した。コンシェルジュは一時間ほどでソラが希望したモノを揃えると、長距離バスの切符と共に部屋へ届けてくれた。

「バスは一時間後には出ます。ただ、西海岸までは三日ほどかかります。お急ぎなら飛行機を使われた方が良いのではないのでしょうか」
「そうね、ありがとう」

ソラはチップ用の小切手を切りながら言った。

「でも、これはちょっとした小旅行なの。バスの旅のほうが道連れが多くて楽しそうでしょう？」

「なるほど。お気をつけて行ってらっしゃいませ」

「ありがとう。それから、この伝言をフロントに預けてもらえるかしら」

「かしこまりました」

伝言に詳細は書かなかった。それはいつものことで、連中も心得ているはずだ。コンシェルジュが用意してくれたのは大きなリュック。中には旅行用品一式が詰め込まれている。そして……腰には使い慣れた一丁の拳銃。

窓の外は白々と明るくなり始めていた。ルテボボの短い夜が明け
る。

ソラはリュックを担ぎ上げると、ホテルの部屋を後にした。

『赤と青の星』 チョルココ星系政府 1

ドラン・ルゲナが語ったのは惑星ルテボボの歴史そのものだった。偉大なるラグタタたちがルテボボを発見してのち、探索隊を組んでいた四氏族は再びあいまみえることとなった。

現在の惑星チョルココ第一および第二を発見したモニック一族は、他の氏族に対して連合政府の設立を提案した。

惑星チョルココ第三を発見したチチリア一族は提案に賛同した。

惑星を発見できなかったイグル一族も、チョルココ第二の行政権を委託されることで、モニック一族の提案を受け入れた。

ただ、ルゲナ一族だけが難色を示した。惑星ルテボボは独立国家になりたいと。

最終的には、偉大なるラグタタはわずかな条件で連合国家に参加することを承諾した。それは、惑星の名前を『チョルココ第四』とはせず『ルテボボ』とすることだった。

「いずれは独立国家に、それがルゲナ一族の悲願なのだよ」とドランは語った。

それぞれの惑星発見から実に二〇〇年。チョルココ第一から第三は、工業惑星として発展した。星系の立地が銀河の端にあることから、銀河中央の繁栄に追いつくことは到底かなわなかったが、手つかずの豊富な鉱物資源を利用し、地球型惑星改造を最小限に留めることで、チョルココ星系政府は勢力を強めていった。

唯一、惑星ルテボボだけが完全な形で地球型惑星改造を行い、一七〇年もの時間をかけた農業惑星への道を選択した。

しかし、ここに来て、チョルココ第一から第三までの経済発展に陰りが出始める。二〇〇年に渡り採掘を重ねた鉱床のいくつかが尽き始めたのだ。それにタイミングを合わせるように始まったルテボボの農業輸出としての隆盛は、一部星系政府幹部の癪に障った。それが、赤の大陸の資源開発へと目を向かせる結果となったの

だが――

「一方で、連中は、惑星ルテボボの権利に対して難癖をつけはじめたんだ」

ドランは拳を何度も自分の膝にたたきつけるようにしながら語った。

「あんたにも知つての通り、惑星ルテボボ第一次調査報告書はああいう内容だ。連中は、ルゲナー族には所有権はないんじゃないか、と言い出したんだ」

現地権者テール・ルゲナ翁の権利に疑義が挟まるからと言って、それが即、惑星ルテボボがチヨルココ星系政府の直轄管理下に移るということでは無いはずだ。しかし、政府内では、ルゲナー族の権利さえ剥奪すれば後は何とでもなるという意見が大勢をしめているようだ。

「そんな時に現れたのがあの男だった」

今から五年ほど前のことだという。

惑星ルテボボにふらりと現れたその男は、テール・ルゲナ翁を訪ねてこう言った。

「この惑星の独立に手を貸しましょう。そのかわり、あなた方も私に手を貸してほしい」

男が出した条件は 赤の大陸 の一部を秘密裡に使わせるということだった。

「はじめは我々も渋ったんだ。赤の地に手をつけないというのはルゲナー族の掟のようなものだったから」

しかし、状況はそんなことを言っではいられなくなっていた。チヨルココ星系政府の圧力が強まる中、件の男までもが第一次報告書の持ち出ししてきた。

「この報告書を封印することが私にはできます。政府を黙らせることもできます。黙って私に力を貸してくれば、やがてはルテボボの独立もかかりますよ」

ルゲナー族が選べる道は一つしか残っていなかった。

「やむを得ず男の話に乗った。すると、すぐに政府からの圧力はなくなった。だが――」

武装宇宙船を建造するなど、想像もしていなかったという。

「今はまだ海賊船だ幽霊船だ、で済んでいる。でも、いずれあの男が武装蜂起を考えているのは明白だ。そのとき、惑星ルテボボが準備に手を貸していたとなったら……考えただけでも恐ろしい」

ルゲナー族は秘密を守り続けるしか手がなくなっていた。今、すべてをさらして独立を掲げるだけの力も後盾もない。

「男がどこの誰かも実はよく分らないんだ。しかし、あれだけの武力をもって立てば、確かにルテボボの後盾としては申し分ないかもしれないが……」

神の怒りにふれる――とドランはつぶやいた。

「その男は、なんと名乗ったのですか？」と話の最後にデニスが訊いた。

「ふざけた名前だった。そいつは、せいがおう星河王と名乗ったよ」

『赤と青の星』 チョルココ星系政府 2

「チョルココ星系政府は、私たちの調査がうまく行かないことが分かっていたんですかねえ」

ホテルの一室で、ベルカルチャ惑星開発会社の三人は膝をつきあわせていた。

「五年前から、その星河王とかいう奴に圧力をかけられて、おそろく今でもそれは継続中だ。外部企業への調査依頼は目くらましのパフォーマンスだな。あれだけの土地を遊ばせておけばどこかで不審がられる。政府は開発しようとしているけれど、地権者がこねてます……って構図だな」

「で、副社長。俺らはどこにつくんですか？」

「どこ？」

「チョルココ星系政府か、ルゲナー族か、まさか星河王とかいう奴ってことは無いでしょうけど……」

デニスは立ち上がると窓の外へ目を向けた。

「強いて言えばルゲナー族か。ルゲナ翁の権利がもつとも優先される権利だからな。それに、その星に住むひとが幸せになる開発を、というのが我々の社是だ」

「そうは言っても、星系政府はともかく、武装宇宙船の艦隊なんて本当に出て来ちゃったらどうしたらいいんですか？ 独立だってそんなに簡単じゃないですよ」とステイ。

「艦隊はともかく、独立は意外に簡単じゃないですかあ？」とディーアが携帯端末をいじりながら応える。

「なんで？」

「だって、基本、後ろ盾になる国家がひとつでもあれば良いんじゃないかってでしたっけ？ 国家の独立って」

ディーアの言葉にデニスがうなずく。

「最低限だけだな。正式な国家の後ろ盾があれば、形だけは整う」

「ほら、簡単じゃない」

ディーアのしたり顔に、ステイーも納得の表情を浮かべる。

「なるほど。とすると、残りは武装艦隊……」

「実際には、完成した宇宙船は慣熟航行も兼ねて飛んでいつてしまっているだろうからな。赤の大陸には建造中のものしか残っていないだろう」

「ああ、なるほど」ステイーが目に見えて安堵のため息をつく。

と、携帯端末に目を落としたディーアが大きな声を上げた。

「捕まえた！」

「社長か？」

「ええ。今現在の場所までは特定できませんが……数日前にでかい買い物してますね。うわっ、なーに買ったんだろっ、こんな金額」
「どこだ？」

デニスとステイーがディーアに詰め寄る。

「西海岸の……ルゲナ小型飛行商会。ああ、これは飛行機まるまる一機買ってますね」

三人が顔を見合わせる。

「決まりだな」

『赤と青の星』 地下工場 1

案の定、小屋の奥には地下へと続く階段があった。

後ろ手にロープで縛られ、ルードに背中から拳銃で追い立てられたソラは、ゆっくりとその階段を下りていく。

やがて、目の前に巨大な空間が広がった。

「なんて大きい……」

それは、地下の空洞としては破格の大きさだった。建造中の宇宙船がまるまるそこに収まっている。

「ソラの予想した通りだよ。この 赤の大陸 はアルミニウムが豊富に採れる。そのほか、宇宙船の建造に必要な資源は採り放題だ。場所も腐るほどあるしな」

「いったいどこの誰がこんなことを。ルテボボではないでしょう？」

「……慧眼だな。でも、賢すぎる女は可愛くない」

「そう」

地下の空洞があまりにも大きいため、地上からの通路はキャットウォークのような有様になっている。目もくらむ高さだ。

「半年間の期間労働で雇った人たちは、ここで働かせているのね」

「ここだけじゃない。ボーキサイトの採掘場や、アルミの精錬所なんかもある」

ソラは空洞の底に目を凝らした。夜明け前の時間帯だというのに人が働いている。今時の造船工場は半自動化しているところがほとんどだというのに、ここでは驚くほど多くの人間が、しかも昼夜を問わず働いているのか。

「どれだけの人がいるの？」

「それは……」

ルードが口を開きかけたとき、通路の向かいから一人の男が近づいてきた。ルードとよく似た男だ。

「しゃべりすぎだ、ルード」

「ちい兄さん」

「この女か、俺たちのことをかぎまわっていたってやつは。あれだけの芝居をうったのに、なんで殺さない？」

芝居——つまり、ソラが予想した通り、あの墜落劇は仕込まれた茶番だったというわけだ。

「いい女なんだ。おれが面倒見るからさ」

ふん、とルードの兄が鼻で笑った。四人兄弟と言っていたから、

「ちい兄さん」というのはおそらく三男ということになるのだろう。

「お前にどうにかできる玉には見えないがな。とりあえず、どっかに放り込んでおけ。王がいらっしゃっている。挨拶するぞ」

「え？ 本当に！」

——王？

ルードはソラを小突くと、通路の奥まで急がせた。そこで粗末なエレベーターに乗り込み、再下層まで一気に降りる。エレベーターを降りたところでは、機械油まみれの屈強な男ふたりがなにやら作業をしていた。

「こいつを、牢に放り込んでおけ」

「これはこれは……へへへへへ」

男たちは、ソラを上から下まで舐めるように見て下卑た笑い声をあげる。

「おい、その女は俺のだ。手をつけたらただじゃ置かないぞ」

「へいへい」

「ソラ、何か言うことはないのか？」

最後にルードが名残惜しげに訊く。

「じゃあね、坊や」

「！」

エレベーターが締まり、中からルードの兄が爆笑する声が聞こえた。

ソラは油まみれの男たちに小突かれながら歩かされ、造船工場の隅にある薄汚れた倉庫へと放り込まれた。

『赤と青の星』 地下工場 2

牢と言っても、使われていない倉庫を牢屋代わりに使っているだけのようだった。トイレも洗面台もないこんな場所では、長期間ひとを放り込んではおけない。

後ろ手に縛られたまま床に転がされたソラは、男たちの足音が遠ざかっていくのをじっと待っていた。連行する際に胸や尻に無遠慮に触られ、油まみれになってしまったのがなんとも気持ち悪い。

耳を澄まし、表にひとがいなくなったことを確信したソラは上体を起こした。現状を確認するために周囲を見渡す。部屋には小さな灯りがひとつ。今にも消えそうな灯りだが、暗闇よりは数段ましだ。そして、部屋の隅にはバケツがひとつと、使い古したモップが三本転がっているだけ。

「トイレ代わり？ まさかね」

ソラは自嘲気味につぶやくと、ドアへと目を移した。瞳には肉食獣のような輝きが宿る。

典型的なシリンダー錠がひとつ。

「さて……ろくに身体検査をされなかったのは幸運だったわ」

ソラはまず壁際まで移動した。背中を壁につけ、左手首に体重を乗せる。

「ぐっ……」

鈍い音と一瞬の痛みののち、はずれた左手首からロープが抜け落ちる。にじんだ涙はそのままに、ソラは今度は右手で左手首を押さえると、力一杯それをはめた。

「痛い——……」

息が整うまで数秒。ソラはうずくまって痛みに耐えた。続いて砂にまみれたズボンを降ろしたソラは、膣内へと指を入れる。

「ん……っ」

そこから取り出されたのは、小さな袋だった。手早く服装を整えると、ソラは袋を開けた。中には小さなナイフと、瞬発型電気雷管、電池、そして錠剤が二粒入っていた。

続いて、ナイフを使って上着の袖を裂き、それをひも状にして左の二の腕に強く巻き付けた。残った布を口にくわえ、深呼吸をして右手にナイフを構える。

つつ、とナイフが左上腕部を走る。皮数枚を裂いたその下には、薄い板状のものが埋め込まれていた。ソラは指をつっこむと、強引にそれを引っ張り出す。痛みに涙がにじむが、叫び声を上げるのはかろうじて耐えた。血と脂にまみれたそれを床に放り出し、手早く傷跡を縛り上げる。現代の医療技術ならば傷跡を消すことなどたやすい。何しろ、これを埋め込んだ跡を完全に消してあったのだから。

傷の状態と手首の状態を確認して、ソラは錠剤を眺めた。痛み止めだ。飲みたい誘惑に駆られるが、これを飲むと逆に感覚が鈍ってしまう恐れがある。ソラは錠剤をポケットにしまうと、腕から取り出した板を手に取り、血塗れた包装を破いた。

プラスチック爆薬。可塑性をもつこの爆薬は、単体では安定していて爆発の危険は少ない。雷管と組み合わせることではじめて爆弾となる。

再びドアの外にひとがいないことを確かめたソラは、扉のシリンドー錠に爆薬を仕掛けた。雷管を差し、そこからつながるコードに電池を繋ぐ――

ぼんつ、という間の抜けた音がして、ドアの錠が飛んだ。大した威力ではないが、錠を開けるくらいなら十分だ。

さっきまで後ろ手に縛られていたロープで髪をくくり上げると、まるで狩をする猛獣のような足取りで、ソラは扉の外へと踏み出した。

『赤と青の星』 地下工場 3

倉庫のあった区画はほとんど使われていないらしく、ソラは誰にも見とがめられずに、建造中の宇宙船を見上げられるところまで辿り着いた。もつとも、元来短期間の出稼ぎ労働者ばかりが集められている現場だ。油と砂にまみれたソラの姿は、誰かに見られたからといって、単に労働者のひとりだと認識されるだけかもしれない。た。こういう場所では、誰もが他人に注意を払わない。

と、工場内にサイレンが鳴り響いた。

ソラは一瞬ぎょつとしたが、よく考えれば夜番と昼番の交代に違いなかった。

案の定、労働者たちがぞろぞろと持ち場を離れていく。その隙を見て、ソラは建造中の宇宙船へと潜り込んだ。交代作業が終わるまでのくらいあるかは判らないが、少なくとも十五分から二十分は中に人が入ってくることはないだろう。

建造中の宇宙船は、ソラの知らない型だった。まだ外装は完全ではないが、どこことなく剣呑な雰囲気漂わせている。

とはいえ、宇宙船内部の構造は、機種によってそれほど変わるものでもないはずだ。ソラは自分の知っている宇宙船の構造に当てはめて、艦橋があるはずの場所へと向かった。

艦橋はまだ骨組みだけの状態だった。今後、このフレームに各種の航法装置などが組み込まれることになるのだろう。しかし――
「妙に広いわね……」

ソラの知る宇宙船と比べると、その艦橋は広すぎる気がした。しばらくフレームの間をうろうろしていると、隙間に何かが挟まっているのが目に留まった。

艦橋の設計図だった。

設計図が紙の状態で用意されているのは非常に珍しい。おそらく、工員達に電子端末を使わせないための配慮だろう。必要な設計図だ

けを紙で渡すことで、全体像を把握させないようにしているに違いない。

そして、設計図の中に？火器管制装置？の文字を見つけて、ソラは息を呑んだ。

——だから広いのか。

ソラは設計図をポケットに押し込むと、艦橋を後にする。その足で何層か下に降りたソラは、ようやく通信室とおぼしき部屋を見つけて中に入った。

「だめか……」

通信装置の設置が完了していれば、とも思っただが、艦橋同様それはまだだった。しかし、部屋の作業台の隅に小さな端末が電源が入ったままで置き去りにされていた。中には宇宙船の電気配線図が記されている。配線チェックは紙では追いつかなかったということだろうか。

「通信機能はなしか……」

それでも、その端末をポケットに突っ込んだソラは、通信室を飛び出した。そろそろ昼の作業員が配置につきはじめるだろう。

途中、船の窓から辺りを確認したソラは、ひとがほとんどいない一角をみつけ、そちらに走った。連れてこられたのとは、地下空洞の中で真反対に位置するあたりだ。

通路に飛び込み、勘を頼りにすすむと、地上へ向かうと思われるエレベーターにたどり着いた。まだ、確認しなければならないことはある。しかし、現状では一旦態勢を立て直す必要がある。

ソラはエレベーターに飛び乗ると、地上を目指した。

『赤と青の星』 駆り立てたもの

ネリアを家に送ってから、ソラはひととき小さなバーや居酒屋を巡った。もちろんそれは、ネリアの父親が帰ってこなかったという出稼ぎについて情報を集めるためだった。

情報は意外と簡単に集まった。それがあまりにも簡単すぎて、いくつかは意図的に掴まされている感じがあったが、それは別に構わなかった。

まず確信に近いものが得られたのは、出稼ぎの人たちが連れて行かれたのは 赤の大陸 だろうということだった。資源小惑星での作業、という触れ込みのことが多いしかったが、空気のこと話題にあがるのが一度もなかったことがそれを物語っていた。小惑星の採掘現場は非常に空気が悪い。うわさ話にもそのことが出なかったということは、それはどこかの惑星上だということを示していた。小惑星までの移動時間——それも、 赤の大陸 と読み替えても差し支えのなさそうなものだった。

そしてもう一つ、作っているのは宇宙船のようだということが分かった。しかも、それは一般に知られているメーカーではないようだった。

宇宙船は、闇でこっそり作ったからといって儲かるようなものではない。売りさばきたいのなら、大々的に宣伝をするべきものだ。とすれば、使い道は自ずと限られてくる。こっそりと、宇宙船の艦隊をつくりたい国が団体、いやもしかしたら個人がいるのだ。

ソラは 赤の大陸 へ渡る手段を求めた。ほとんどの酔客は、そんな手段はないと言ったが、何人かが西海岸へ行けと言った。ルゲナ小型飛行商会は、無茶な依頼でも答えてくれると。

実際には、ソラには 赤の大陸 へ渡る手段がいくつか存在した。宇宙船をまるまる一隻用意して、一旦宇宙へ上がり、 赤の大陸 へ直に降下すれば話は簡単だったのだが——しかし、それでは広大

な 赤の大陸 で途方に暮れることになる。ならむしろ、これ見よがしに動いて相手の罠に飛び込んだ方が効率がよい。

罠――

そう、歓楽街を回っているある段階から、ソラは確かな視線を感じていた。それは、余計なことを嗅ぎまわる余所者に牙をむく獣の視線。目に余るような容赦なく排除しようとする視線。そういう敵意にソラはひと倍敏感だ。そうして、あえてそれをたどった結果は、やはり西海岸への道を示していた。

嗅ぎ回る余所者、ひいては 赤の大陸 に過剰な興味を示すものには西海岸と言っておけ――そういう不文律があるのだろう。

実際問題、ラグタタから西海岸へ行くのは骨が折れる。その時点で興味を失うものがほとんどのはずだ。

しかし、ソラはあきらめなかった。

西海岸行きのバスは、 青の大陸 をあちらこちらと信じられない程の寄り道を繰り返した。その中で、ソラは多くのひとに会った。可能な限り、彼らに惑星ルテボボでの生活や 赤の大陸 のことを訊ねた。

惑星ルテボボは、同じチヨルココ星系内の他の惑星と比べて生活レベルが低い。しかし、ここ数年で急激に増えた輸出のお陰で、大半の乗客は将来に明るい希望をもっていた。農作地は今でも拡大を続けており、一介の農夫であっても、大農場主になるチャンスがある。

一方で 赤の大陸 については、あまりに誰もが無関心だった。普段目にするともない、惑星の裏側にある不毛の地など、興味の対象にならないのは致し方ないことなのかも知れない。しかし、そこで行われているかも知れない謎の出稼ぎについて話が及ぶと、大半の乗客が視線を逸らせた。

知っていて、場合によってはそこで稼ぎもして、それでいて見て見ぬふりをする。

ソラは、別に出稼ぎが悪いとは思ってはいない。生活のために家

族の元を離れて働く——何かの事故があつて、帰つてこれなくなることもあるだろう。だから、ネリアのような子供が淋しい想いをしてしまうのは致し方のないことなのかも知れない。

でも——とソラは思う。

その出稼ぎ先というのが、人には言えないようなことだったのなら。

誰かが己の欲望の為に、世界を欺き続けている結果としてネリアの涙あるのなら。

その誰かを、ソラは許しておけないと思う。

ネリアの父親が本当はどうなったのか、それも確認しなければならぬと思う。

謎の出稼ぎ労働は、ルテボボの人々の生活を支えているのかも知れない。でも、もっと別の、胸を張れる仕事をして欲しいと思う。

ソラは、ネリアの中に自分の幼い頃を見た。

自分は父の顔は知らないけれど——でも、ひたすら何かを待ち続けた幼い自分が、ネリアの姿に重なって見えた。

幼い頃、姉と慕ったひとを亡くした経験がある。あの時、私達と同じような境遇の子供はもう作っちゃいけないんだと思った。それを目指して、世界に向かって飛び出してきた。

しかし、道は半ばだ。

自分の知らない土地で、たまさか出会った子供が泣いている。なんて、なんて自分は無力なんだろうと思う。

その事実のうちひしがれそうになりながら、それでも、何か自分ができることを、とあってソラは立ち上がる。

たんなる感傷だと言われてもいい。

そんなのは自己満足だと言われたって構わない。

人生は、自分という物語をひたすら書き続ける道だ。

最後に読み返したとき、誰かが読んでくれたとき、そこにソラという人間の筋が太く濃く残るように、ひたすらに世界に対峙していく。

サービスエリアで夜を明かす長距離バスの窓からは、振るような
星空を見ることができた。

初めての土地で、初めて会う人々に囲まれて、固い座席で星空を
見上げるようなとき、ソラはいつでも、あの存在を感じる。

透徹で、伶俐で、それでいて慈悲深い、あの眼差しを。

思うままに進めばいいよ——と。

星の女王がそう言ってくれているのを感じる。

『赤と青の星』 星河騎士団 1

「君がルード君か。星河騎士団^{せいが}へ良く来たね」

「お目にかかれて光栄です。星河王^{せいがあつ}」

銀色の髪をたたえた背の高い男に対して、ルードは深く腰を折った。

「よしてくれ。その名前は恥ずかしい。なにしろ名付け親は君の兄上だからね」

星河王が肩をすくめると、部屋の隅に控えていたルードの兄三人が幾分身を固くする。

「まあ、それでも、この地での作業は非常に順調にいつている。すべて君たち兄弟のお陰だ。名前が恥ずかしいくらいは我慢するさ」

ルードはなんと答えて良いのかわからず頭を下げ続けた。

「頭を上げたまえルード君。君は、星河騎士団のなんたるかを知っているかな」

「はい」ルードは大きな声で答え。「銀河に秩序と平和をもたらすものです」

「ふむ。まあ、言葉にすればそうなるね。で、実際には？」

「はい。絶対的な力を示すことによって、一滴の血も流さずに銀河に恒久平和をもたらす。現在ここで建造中の武装宇宙艦隊は、抑止力としての力であり……」

「分かっているならそれでいい。よく教育してあるな」

「は」兄三人が再び身を固くする。

「ルード君、そんなに堅苦しく考えなくて良いよ。地球時代から数百年たった今でも、人類は土地、それから国という概念から逃れられない。今はまだ大規模な星間戦争は起きていないが、人類の歴史をひもといてみれば、それがいずれ起きることは必定だね。そうは思わないか？」

「……はい」

「我々人類はね、早急に国という概念を捨て去る必要があるのだよ。人類というひとつの種族として、この宇宙で団結していかなければならない。その目標を最短で実現するための道具、それが今建造中の艦隊なのだよ」

ルードは神妙に頷いた。

「それに、人類が己の団結を固めるのに、この場所ほど相応しいところはあるまいよ」

「……」

ところで、と星河王は話を切ると、ルードにひたと対峙した。

「君がつれてきた女。確か名を……」

「ソラ、といいます」

「姓はなんと？」

「……は、いえ、存じません」

「どんな女だった？」

星河王はルードを連れてきた三番目の兄に訊いた。

「はい。歳の頃は二十五、六。髪は漆黒で肩胛骨の辺りまで。瞳はブラウンがかっており、大変整った顔をしておりました。体軀は鍛え上げられていて、かなりのばねがありそうでした」

「よく見ているな」

「……恐縮です」

「しかし、ソラという名前はどこかで聞いたことがある」

「え？」

「果たしてどこだったか……」

星河王の反応に驚いたルードは、あることを思いついて口を開いた。

「あの……恐れながら申しあげます。最近、チオルココ星系政府が赤の大陸の調査を民間開発会社に委託しました。どうやら、女はその関係者ではないかと」

「民間開発会社か。名は？」

「えっと……」

言いよどんだルードに対して、二番目の兄が口を挟む。

「ベルカルチャ惑星開発会社です」

「ベルカルチャ？」星河王の目が大きく見開かれる。

「はい。なんでも、かなりの実績のある……王？」

星河王は口元を隠して笑っていた。やがて絶えきれなくなったように大笑いをし始めた。

「ふふふふふ、ははははははは。そうか、ベルカルチャ！ ソラ・ベルカルチャか！ 面白い！ これも何かの縁、いや運命か」

星河王は大股で部屋を横切ると、部屋の扉に手をかけた。

「王、どちらへ」

「決まっている。謁見だよ」

『赤と青の星』 星河騎士団 2

「牢に放り込んだ？」

「はあ……」

エレベーターの中で、ルードは困惑を隠しきれずにいた。

兄三人が尊敬し、そのお役にたきたいと言って飛び出していった星河騎士団。兄たちの薫陶を受け、自分もいずれは星河王のもとで世界のために働きたい思ってきた。ソラが現れたのは偶然で、ただ、結果としてそれが契機になった。ここで自分が力をつけられ、いずれソラだつて見直してくれると思っていた。それまでは、不自由をかけてもどこかに困っておくつもりでいた。なのに――

なぜ、名前だけで星河王があれほど反応するのか？

ソラ・ベルカルチャ？ その姓がなんだというのか？

ソラ――あなたは、いったい何者なのか？

「扉が破られている！」

三番目の兄が声をあげ、ルードは我に返った。目の前の倉庫の扉がこわされている。どうやらソラはここに閉じ込めてあったらしい。「プラスチック爆弾だな」

星河王が扉を検分しながら言った。

「そんな。武器はとりあげました！」とルード。

「身体検査はしたのか？」

「一応しました」と三番目の兄。

「一応、ね。女性は膣内にものを隠すこともできるぞ」

「膣内……」

兄弟四人が絶句する。

「それから、この血をみる。おそらく、皮下にプラスチック爆弾を少量埋め込んでいたのだろ。今の医療技術ならば傷跡を消すぐらいたやすい。膣内にナイフと雷管を持っていれば、それで十分この状況は説明できるな」

「そんな……」

ルードはその場にへたり込んだ。なんというか——格が違う。

「ソラは、ソラはいつたい何者なんですか？」

「ソラ・ベルカルチャはいくつかの通り名を持っている」

ごくつ、とその場にいただれもがつばを飲み下した。

「その果断さと華麗さから 金剛の薔薇 とも、肉食獣のような眼差しから 銀河の雌豹 とも呼ばれるが……」

ルードは血の気が引いていく音を確かに聞いた。その噂は聞いたことがある。金剛の薔薇——銀河の雌豹——その通り名を持つ人物はたしか——

「彼女は、奇蹟の星と呼ばれる惑星ベルカルチャの女王。ひと呼んで 星の女王 だよ」

『赤と青の星』 遺跡の丘

エレベーターは、途中停まることなく最上階まで到達した。

ソラは辺りに注意をはらいながら外に出る。そこは、ただ長い通路が続いているだけの場所だった。あまりひとが通らないのか、床に積もった砂埃がけっこうな厚さになっている。

ソラは迷うことなく通路を直進した。そして、五〇〇メートルほど行ったところで、地上へと続く階段を見つけた。階段は幾重にもつづら折りになっていて、どれだけ昇ったのか分からなくなった頃、ようやくソラは日の光の下へと辿り着いた。

そこは――

「なに？ ここ……」

ソラは、かつて受けたことのない衝撃を受けた。

生れてから二十六年の人生で、大概のことは経験したと思っていた。良いことも、悪いことも、感動的なことも、衝撃的なことも。

だから、どんな場面に出くわしても落ちついていられる自信があったのだが――

「凄い！ 凄い凄い！ これはすごい！」

ソラは走り出した。

ソラの目の前には信じられない光景が広がっていた。

なんと言葉にしたらよいのか――あえていうなら、遺跡。

そう、そこは遺跡だった。

「この柱は孔雀石かしら。こっちのタイルはトルコ石。ああ、あの青はラピスラズリね」

砂岩の岩山に囲まれた空間に、色とりどりの石で作られた、精緻な遺跡が広がっていた。

繊細なトルコ石のタイルが敷き詰められた碧い歩道。両脇に建つ、目にも鮮やかな孔雀石の緑色をした柱。大理石を削った謎の銅像が、白亜の身体で列をなす。

歩道の脇にはベンチとおぼしきものまで用意されて、ラピスラズリの青や自然鉄の赤が彩りを添えている。

でも、これは――

「あるはずのない遺跡……」

どう見積もっても、この遺跡は千年を下らない年月を経ている。

人類がこの惑星ルテボを発見してからまだ二〇〇年。

ならば、これらはいったい誰が作ったものなのか――

ソラは、言いしれぬ興奮と、それから底知れぬ恐ろしさの両方にさいなまれながら、遺跡の中を歩いた。

赤の大陸　が禁忌の地とされているのは、この遺跡が原因に違いなかった。

この惑星を発見した者たちは、これを見てなんと思ったのだろう。おそらく、今のソラと同じように、興奮し、恐れおののき、そして――大陸ごと封印することとしたに違いない。

そうして、今となつてはこの遺跡は爆弾になりつつある。

これが存在するということは、お前たちより先にここに辿り着いた者たちがいるはずだと、そういう難癖をつける輩がかならず現れるだろう。お前たちより先にここに辿り着き、どこから遺跡をもつてきた者がいるのだと――

ソラは思う。これは、可能な限り早急に調査をする必要がある。

宇宙大航海時代より古いことを確定し、さらにはこの惑星で作られ、この惑星に有り続けたのだと証明しなければならぬ。それが確定すれば、ルテボの人々がここを隠す必要はなくなるのだ。

この遺跡そのものを神聖視するのはいい。しかし、それが結果として今回のような事態を招くのなら、それは良くないことだ。それだけは、ソラは胸を張って断言できる。

この素晴らしい遺跡が、ネリアの涙を招いたのだとしたら、それは悲しすぎるから――

ソラは、大通りと思われる道をまっすぐ進んだ。その先には大理石の階段があった。

「祭壇かしら」

ソラは神妙は面持ちで一礼をすると、階段を上がった。階段の上は広場になっていて、中央に大きな真四角形のレリーフが立てられていた。

「宇宙……」

それは、宇宙を表したレリーフのようだった。

星空を表すのは、黄鉄鉱の粒子がちりばめられた瑠璃色のラピスラズリ。

真ん中に輝く水晶は、太陽を表しているのだろう。

レリーフ下部には大きなルビーとサファイアが埋め込まれた赤と青の星、つまりはこルテボボが表されている。

そして、上部には――

「ああ……」

ソラは我知らず膝をつき、祈りのポーズを捧げた。

黄金を使って宇宙の最上に刻み込まれているのは、まごう事なき女神――いや、これは――

「星の……女王」

これを作ったのが人類なのか、それともそれ以外の存在なのか、それは分からない。

でも、星の女王の存在を信じるものたちがここにいた。

その事実だけで、ソラは涙が出るほどの感銘を受けずにはいられなかった。

太陽の光が黄金の女王をきらきらと輝かす。

ソラは両手を胸の前に重ねたまま、あきることなくその姿を眺め続けた。

『赤と青の星』 惑星ルテボボ第一次調査報告書

『惑星ルテボボ第一次調査報告書』

我々、ラグタタ・ルゲナ以下14名は、星歴145年3月2日、絶対座標X $\parallel$ 1688475、Y $\parallel$ 4586248、Z $\parallel$ 5811253において以下の惑星を発見したことをここに報告する。

以降、この惑星を仮称でRと記するものとする。

惑星Rは、赤道半径約5500km。自転周期は22時間。恒星の公転周期はおそらく300日程度だと思われる。（詳細は別紙参照）

衛星軌道上からの観測によれば、海が全体の七割以上を占め、大陸は赤道上にふたつ。この大陸を、仮称で大陸1、大陸2と記するものとする。

我々はまず、大陸1を目標として降下を試みることにした。

上空から観察したところによると、大陸1は砂岩が中心の乾いた土地のようだ。植物相は上空からでは確認できないが、鉱物の採掘には適している様子だ。

空気の組成は、窒素70、酸素28、アルゴン1.5、二酸化炭素0.5。（詳細は別紙参照）植物がないにもかかわらず、酸素濃度が非常に高い。不思議である。

我々の着陸艇は、砂岩が中心の平地に着地した。不毛の荒野にか見えないが、これは地球型惑星改造を施せば問題はないだろう。

着陸艇を中心に、我々は三日間の調査を行うこととした。

調査一日目

晴れ。調査艇周囲の岩石を調べる。加えて簡単なボーリング調査。ボーキサイトが大量に見つかる。アルミニウムは大変に有用な鉱物である。期待がふくらむ。相変わらず植物はひとつも発見できず。

空気中に微生物もない。

調査二日目

晴れ。ボーリング調査の最中に地下に巨大な空洞があることがわかった。鍾乳洞だろうか。今は詳細に調査をする時間がないのが惜しまれる。いずれ、大規模な調査をする機会もあるだろう。楽しみだ。隊員の一人が妙なことを言い出した。神を見たとか。何か幻覚作用のある物質でも浮遊しているのだろうか。酸素マスクを使用することにする。

調査三日目

晴れ。我々ほとんどもないものを発見した。これは宇宙の歴史がひっくり返る。

調査艇から三キロほど離れた小高い丘の上に、大きな砂岩に囲まれた美しい神殿跡があった。未知の遺跡である。人類のものではない、謎の古代文明の遺跡だと思われる。非常に美しく、感銘を受ける。簡易測定では千年以上前のものと出た。しかし、隊員の一人が神殿最上段のレリーフを外そうと試みて、足を滑らせて怪我をした。写真を撮ろうとした隊員は、突然の酸素マスクの故障で、危うく窒息死するところだった。写真は一枚も撮れていなかった。

そして、調査艇のエンジンが故障した。これは、なにか遺跡と関係があるのだろうか。

調査四日目

雨。エンジンの故障は直らない。

調査五日目

大雨。砂が流され着陸艇が傾く。故障は直らない。

調査六日目

大雨。更に着陸艇が傾く。故障は直らない。

調査七日目

大雨。食料が少なくなってきた。故障は直らない。

調査八日目。

大雨。食料残少。水も少なくなってきた。雨水を飲みたいが、濾過器も故障。

調査九日目。

大雨。落雷。故障。

調査十日目。

大雨。落雷。故障。

調査十一日目。

大雨。故障。

調査十二日目。

大雨。故障。呪いなんてない。

調査十三日目。

大雨。故障。そんなハズは無い。

調査十四日目。

大雨。故障。……遺跡で膝をついた。ここは……

調査十五日目。

晴れ。故障が治った。これで助かる……

エンジン故障の原因は最後まで判らなかった。

この後、我々は大陸2を上空から調査した。なぜか山が少ない。河が多く、少し改造を施せば良い農地になりそうだ。しかし、なぜこの大陸はこれほど平らなのか。

我々はこれから仲間のもとに戻る。他の氏族は惑星を発見できているだろうか。この星域には、他にもこんな遺跡があるのだろうか。大陸1をどうするかは、慎重に検討したい。

星歴145年3月8日 ラグタタ・ルゲナ（以下14名）

『赤と青の星』 対峙 1

「そのレリーフがお気に召したようですね、陛下」

背後から声がした。振り向くと、背の高い銀髪と男が、ルード以下四名の男を引き連れて立っていた。そのうちの一人は数時間前に見たルードの兄。顔と雰囲気から、他の二人もルードの兄なのだろうと見当がついた。

「あなたが……王とやら？」

「お初にお目にかかります。私は星河王。星河騎士団の首魁です」

「恥ずかしい名前ね」

「……」

銀髪の星河王は本当に恥ずかしそうだった。

「ええ、まあ。仮の名です。本名は勘弁してください」

「星河騎士団という名前も仮ね。ここ惑星ルテボボでのみ使っているのでしょうか？」

「……」

ルゲナ四兄弟が動揺したようだった。

「崇高な使命の前には、名前なんてどうでもいいことです」

「あなた、武装宇宙船艦隊を使ったテロを画策しているのね？」

「テロじゃない！」と叫んだのはルードだ。「星河王は、戦争のない銀河を、国の垣根を取り払った人類の統一を目指しているんだ」

ふん、とソラはため息をついた。

「ずいぶんなお題目を唱えるのね。でもねルード、そのせいで泣いている女の子がいるのよ」

「女の子？」

「そう。儲け話に吊られて出かけていって、帰ってこなかったお父さんがいる。その女の子はね、いまでも夜な夜なお父さんを待っているのよ」

「くつくくくつ。一国の女王がずいぶんと感傷的なことをおっしゃ

いますね？」と星河王。「そんな話、どこの国のどこにだって転がっているじゃないですか」

「そうね。でも、私が気付いたからには、その根は根絶する。私はそうやって生きてきたし、これからもうやって生きていく」

ソラの瞳がひたと星河王に据えられた。まるで肉食獣のような輝きだった。

「そうですね。一応、武装宇宙船を造っていることは認めましょう。しかし、それがそのまま武装蜂起に繋がるのは短絡的じゃありませんか？ 私はここルテボボで宇宙船を建造する重工業会社を設立するつもりなんですよ。そうすれば、ルテボボの皆さんにだって仕事ができるし良いことだらけじゃないですか」

ソラが目を眇める。

「そういえば、放浪の銀狐 とか呼ばれている詐欺師がいたわね。口八丁手八丁で各国から莫大な資金をひねり出して雲隠れするとか

……たしか、本名は……」

「おっと、まあ私の正体なんてどうでもいいんですよ。ベルカルチャ女王陛下。しかし、陛下ともあるうお方が、こんなところでおひとりなんて迂闊にもほどがあります」

「私はいつだってひとりで行動しているわ」

「そうですね。まあ、でも」星河王は懷から黒光りする拳銃を取り出した。「ひとり旅もこれで終りです」

ひたと、銃口がソラに向けられる。

「しかし、うわさとは当てにならないものですな。どれほど凶悪な顔の女王様かと思いましたが、殺すのが勿体なくなるくらいですよ」

「そう」

「ひとつお伺いしますが、私と手を組む気はありませんか？ 貴女となら宇宙全てが手に入りそうだし」

「お断りよ」

星河王が首を振る。

「残念です。ここで殺しておいた方が、後々差し障りがなさそうで

すね」

星河王が手で合図をすると、ルードを除いた兄三人も拳銃を抜いた。

「ちよっ……」ルードがたまらずに声をあげようとしたその瞬間――

――

『赤と青の星』 対峙 2

「ちょっと待った——！」

カン高い女の声がして、大きな地響きと共にソラと男たちの間に何か降ってきた。

それは巨大な鉄板だった。垂直に落ちてきた鉄板は大理石の遺跡を砕き、呆然とする男たちめがけてゆっくりと倒れるかかる。

ソラがその隙を見逃すはずもなく、祭壇を飛び降りると上空を見上げながら走った。

「デীア！」

「社長——！ お迎えにあがりました——！」

高速移動ヘリコプターが上空から降りてきた。上空五メートル程でロープが放り出され、それを使って、若い男女が降りてくる。ベルカルチャ惑星開発会社のスティーとデীアだった。

「ふたりとも、ご苦労様」

「あちゃー、遺跡壊しちゃいましたかねえ」とデীア。

「後で直せばいい。それよりも、連中に気を付けて」

「言っている間に、スティーが銃撃戦を開始していた。」

「ちィ。できれば遺跡を傷つけるなって、副社長に言われてるのになあ」とスティーがぼやく。

「命が最優先よ。デニスはどこ？」

「お上です」とデীアがヘリコプターを指さす。

「そう。携帯端末を貸して」

「はい」

ソラはデীアの端末を受け取ると、デニスを呼び出す。

「デニス！」

「やあ、ソラ。久しぶりだね」

「どこまで分かっているの？」

「多分、すべて分かっていると思うけど」

「すぐに手はずは整えられる？」

「こっちは大丈夫だけれど、ルゲナ翁たちがどうか」

「説得して。チャンスは今しかない」と

「分かった。すぐに調査を開始する。人類以外の知的生命体を作ったなんて証明はできないけれど、宇宙大航海時代以前の遺跡で、どこから持ってきたものでもないって結果が出さえすればいいわけだ」

「オツケー。あとは、新しい会社をひとつ作るわよ」

「……ああ、それもやるのか。ここは君の星じゃないんだよ？」

「でも、とりあえず銀狐の奴はつかまえてここは潰すから。働いているひとたちのアフターケアにはそれくらいは必要でしょ」

「了解」

ソラが通話を終えたのを見計らって、ステイーが声をあげた。

「連中逃げていきました。どうしますか？」

「勿論、追うわ。でも、このルートはだめか」

ソラはエレベーターが一機だけの地下を思い出す。

「車！」

「ほいさあ、用意できてますう」

ヘリコプターに積んできたらしい車の運転席にディーアが収まっている。ソラは素早く車に乗り込むと叫んだ。

「いくわよ！」

『赤と青の星』 追跡 1

「どこへ行ったらいいですか？」

ディーアと運転を代わったステイーが訊いた。

「このまままっすぐ。あの丘を回り込んだ先に別の入り口があるわ」
「はい」

車がぐんと加速する。後部座席で頭をつきあわせたソラとディーアは、地下の工場からソラが持ち出してきた携帯端末をのぞき込んでいた。

「工場の地図でも入ってないかしら？」とソラ。

「んー、おそらく入ってると思います。ええと……使いにくいOSだな。……？ なにこれ？」

「どうしたの？」

「あ、いえ。個人的に興味深いものが……後にします。地図ありました」

「見せて」

端末に入っていたのは簡単な階層図だった。部屋の間取りは書いてあるが、どこが何の部屋かは書かれていない。

「あの銀色野郎の部屋はどこですかね？」

「おそらく上階から数えて二層目の……ここね」

「なぜです？ なにも書いてありませんけど……」

「部屋の前に小さな部屋が二つ。おそらく秘書室と応接室でしょ」

「なるほど。それに、あいつ高いところ好きそうですしね」

「ええ。この先にある入り口がここ。ぎりぎり間に合うかしらね」

「逃げるってことですか？」

「奴が 放浪の銀狐 なら逃げ足だけは早いわ」

「そんな奴が、大艦隊をひきいて銀河を統一しようなんて考えますかね？」

「なに言ってるんですか？ ステイー先輩。現にやってるじゃないで

すか」

「そうだけどさ……」

「ステイーの言うことは一理あるわね。黒幕がいると考えたほうが自然かもしれないわね」

「見えた！ あれですね」

明け方、ソラとルードが忍び寄った小屋が目の前に迫っている。

「捕まえてみればはつきりしますよ！」とディーア。

「違う」とステイーも続く。

「武装は少ないはずだけど、ふたりとも気をつけて！」

砂埃をあげて車が止まると、三人は飛び出すように駆け出した。

『赤と青の星』 追跡 2

待ち伏せを警戒したものの、地下へと続く階段には誰もいなかった。

三人は慎重に、地下工場を見下ろせるキャットウォークに出る。

「！」

狭い通路を大勢がこちらに向かっていた。三人はいったん銃を構えて、しかし、あわてて銃口を下げる。よく見れば、それは両手を挙げた一般の労働者たちだった。しかも、次々と数が増えている。

「ちっ、考えたわね」

狭い通路は、人垣でふさがれてしまえば進めない。これなら武装していなくても十分時間稼ぎができる。まさかケチらすわけにもいかない。

ソラは辺りを見回した。どこかに飛び移るにしてもここは高すぎる。と――

「伏せて――！」

突然ディーアが大声で叫び、銃を天井に向けて乱射した。

「ディーア、何を……」

「さ、社長いきますよ。足下気をつけてください。セーの、ごめんなさ――い」

「……」

あろうことが、ディーアはしゃがみ込んだ人々の背中を容赦なく踏みつけて通路をかけていった。呆れつつも、迷うことなくソラも後続く。

ひとの背中走りづらい。何度かバランスを崩しそうになるが、それでも通路を渡りきった。タイミングを逸したステイーが、人垣の向こうでオタオタしている。

「先輩使えなさすぎ！」

「……、あんたハイヒールなのに容赦ないわね」

「へへへ」

無駄口をたたきつつも、ソラとディーアは星河王の執務室とおぼしき部屋を目指す。なんのかんのと、数々の修羅場をくぐり抜けてきた組み合わせだけに心強い。

部屋の前には、ルゲナ兄弟の二番目と三番目が銃を構えて立っていた。

「ビンゴ！」

ディーアは躊躇せずに銃線をくぐってふたりに駆け寄ると、奥に立っていたルゲナの次男の鳩尾に膝をたたきこんだ。タイトスカートでよくもそこまで、というほど見事な蹴りだった。

もんどりうった兄に気を取られた瞬間、今度は三男の喉元にソラの肘が容赦なく打ち据えられる。

「ああ、社長だって容赦ないじゃないですかあ……」

「当然」

ふたりは兄弟の拳銃を取り上げると、扉の両脇にぴたちと張り付いた。

ソラが指でカウントをとる。3、2、1、GO！

「！」

応接室と思われる部屋に飛び込んで、ソラとディーアは固まった。

「はい、そこまで」

「あんた……自分の弟になにをしているの？」

「んん？ ひ・と・じ・ち」

ルゲナ兄弟の長男が、ルードの首を後ろから押さえ込み、そのこめかみに拳銃を押しつけていた。

『赤と青の星』 追跡 3

「自己紹介がまだでした。リンド・ルゲナです。以後お見知り置きを、ベルカルチャ女王陛下」

「ソラ……」ルードがおびえた瞳をソラに向ける。

「あんた、自分の弟を人質にするっていうの？」

「ええ。星河王がここを離れるお時間を稼ぐためです。ルードだつてお役に立てるんだから嬉しいだろ？」

「う……う……」

拳銃でこめかみを小突かれて、ルードは真っ青になった。

「ベルカルチャ女王陛下におかれましては、まさかうちの弟を見殺しになさるようなことはあるまいと思ひまして」

「……あなたがここで時間稼ぎをしているということは、銀狐はまだその奥にいるのね？」

「答える義務はありません。それから、あのお方は星河王だ。へんな名前で呼ぶんじゃないねえ」

「……センスのないネーミングはあなたなのね」

「銃をすてろ」

ソラとディーアは銃を放り出した。

「弟たちから奪ったやつもだ」

「……」

ソラとディーアの前に拳銃が積みあがる。

「ふん。両手を肩の高さまで上げて、壁際までさがれ。……よしよし」

リンドは満足そうににたと笑った。

「田舎惑星の女王だかなんだか知らないけれど、星河王の邪魔はさせないよ。これは、銀河で一番崇高な使命なんだよ」

「……この 赤の大陸 を使うことを銀狐に持ちかけたのはあなたね？」

「星河王だ！ まあ、いい。その通りだ。これだけの土地と資源がありながら、遺跡だかなんだかのおかげで封印の地にしまっなんて、もったいねえと思わねえか？」

「そうね」

「あのお方は俺の相談に乗ってくれた。そして、自分の崇高な目的には、この地こそ約束の地だとおっしゃったんだよ。俺のおかげで、この惑星ルテボボがどれだけ潤ったことか！」

ふん、とソラは鼻で笑った。

「残念ながら、あなたは銀狐にいいように使われただけ。あいつには黒幕がいる。たまたまあなたに話をあわせていたに過ぎないわ」

「ばかばかしい」

「なら、本人に訊いてみれば？」

「何？」

執務室とおぼしき部屋から、ちょうど星河王が出てきたところだった。

「王！」

「……リンド、その名は恥ずかしいと言ったでしょう」

「……」

「ま、おおむね女王様の言った通りです。ああ……でも、あなたが私の役に立ったのは本当です。人類統一の夢だって本当……まあ、私の夢じゃないですけどね。同じようなものです」

「な……」

リンドの唇がわなわなと揺れている。

星河王こと 放浪の銀狐 は拳銃で周囲を威嚇すると、せかせかとした足取りで部屋を出ようとした。

「な、なぜ、今さらそんなことをおっしゃるんですか！」とリンド。

「そりゃあ……」銀狐の声が遠ざかる。「私はあなたが嫌いでしたからね」

「く……」

リンドがきつく唇をかみしめ、ルードに向けていた銃口が揺らい

だ瞬間。ルードが思い切り頭を降って、リンドに頭突きをくらわした。

「こいつ！」

腕から逃れたルードに対してリンドが銃を構えた刹那、ディーアの鋭い足払いがリンドに炸裂した。

轟音とともに発射された弾丸はルードのこめかみをかすめ、背後の壁に突き刺さる。

飛び込んだソラは、体制を崩したリンドの右手をつかみ、強烈な背負い投げを決めた。

「が……っ」とリンドの肺から空気がすべて吐き出される音がして、彼は動かなくなった。

「ルード！」

ルードはこめかみから血をながして倒れていた。脳震盪を起こしているようだっただ。

ソラは自分の服の一部を裂くと、ルードの額に巻いてやる。ついていてやりたいが、これ以上は医者と呼ばないことにはどうしようもない。

「ディーア、追うわよ」

振り返ったソラの目にうなだれた銀色の髪が映った。誰かが星河王を小脇に抱えていた。

「ステイー？」

「ははは、俺だったらかつこよかったんですけどね」

ステイーの声は、銀狐を捕まえている人物の後ろから聞こえてくる。

ソラは顔を上げた。

「やあ、顔を見るのは本当に久しぶりだね、ソラ」

「デニス！」

『赤と青の星』 その後 1

『惑星ルテボボに謎の遺跡 鑑定結果出る』

チヨルココ星系政府は、星系内の惑星ルテボボ 赤の大陸 に存在する遺跡について、正式に鑑定結果を発表した。それによると赤の大陸 着陸の原に存在するこの遺跡は、放射年代測定によると建設から最低でも千年は経過しているとのこと。また、使用されている鉱物などから、惑星ルテボボで建設されたことはほぼ間違いなく、他から持ち込まれたものではないことが確認された。宇宙大航海時代をも大幅に遡る測定結果が出たことで、各方面から驚きの声が上がっている。調査を担当したベルカルチャ惑星開発会社のデニス・ローデンスキー副社長は、「驚くべき結果が出ましたが、これを作成したのが人類以外の知的生命体なのかどうかは判りません」とコメントした。

なお、この遺跡は、惑星発見直後からその存在が確認されていたもので、惑星発見の報告書『惑星ルテボボ第一次調査報告書』にもその記載が確認されている。そのため、発見当時すでにこの惑星に到達していた人類がいて、現在テール・ルゲナ氏が相続している第一発見者の権利が無効になるのではないかという議論が一部存在していたようだが、今回の調査によって遺跡の移設が否定されたことで、一応の決着を見たようである。

銀河惑星ニュース

『惑星ルテボボ独立宣言』

星歴458年 ルテボボ歴201年8月7日、チヨルココ星系に属していた惑星ルテボボは、単一国家として独立することを宣言した。初代宰相はドラン・ルゲナ氏。ドラン宰相はチヨルココ星系との経済圏は維持するとの声明を発表。独立を機に、今まで以上に農

作物などの輸出に力をいれていきたいとした。この独立に際しては、ベルカルチャ王国が一番に支持を表明。それに続く形でチヨルココ星系政府も支持を表明した。

銀河通信速報

『ベルカルチャ王国 惑星ルテボボとの共同事業発表』

ベルカルチャ王国のソラ・ベルカルチャ女王は、惑星ルテボボ赤の大陸 への巨大投資を発表した。これはルテボボ王国との共同事業で、豊富な鉱物資源などを利用して、宇宙船開発などの重工業事業を展開していくとのこと。

かの地では、かつて非合法的な鉱物採掘などが行われており、これにより収益を上げていたいくつかの企業は、チヨルココ星系政府に追徴税を支払うことで合意した。なお、この追徴金についても、ベルカルチャ中央銀行が特別枠の融資を用意していると発表されている。

惑星世界経済ネット速報

『広域テロ警戒強化』

銀河広域公安委員会は、大規模なテロ警戒宣言を発令し、各国に注意を呼びかけた。これは、ここ数年多数目撃されている通称？海賊船？を、正式にテロ勢力によるものと認定したもの。この海賊船については、その一部が惑星ルテボボ 赤の大陸 で秘密裡に建造されていたことが判っており、公安委員会はルテボボ王国およびチヨルココ星系政府から提出された武装宇宙船に関する情報を各国政府に公開することとした。

全銀河広域通信

『大物詐欺師 放浪の銀狐 脱獄』

チヨルココ星系刑務所に収監されていた詐欺師 流浪の銀狐 ことシガニア・ダブタラス容疑者が脱獄したことが判った。ダブタラス容疑者は、惑星ルテボボ 赤の大陸 での違法な鉱物採取や、各国での詐欺行為で投獄されていた。なお、脱獄の詳細は不明。

スターニューズネット

『惑星ルテボボは宇宙人の農場だった？』

独立やベルカルチャ王国との共同事業で話題の惑星ルテボボだが、実は、ここは宇宙人の農場だったといったら信じるだろうか？

赤の大陸 の謎の遺跡の件は記憶に新しいところだろう。人類が宇宙に進出するはるか以前のモノという鑑定結果がでた遺跡だ。しかし、惑星ルテボボにはさらなる謎がある。

農業国ルテボボの農場は 青の大陸 にあるわけだが、発見当時から、ここは異様に平らな大陸だったのだ。まるで、宇宙人が耕したあのようなと、と表現した人物もいるくらいだ。さらにいえば、土着の植物がないにもかかわらず、惑星の酸素濃度が異様に高かったのだ。それは、かつて宇宙人が大量の農作物を作っていたとすれば説明が付く。

地権者のルゲナー族が封印していた 赤の大陸 だが、時代の流れにのってその開発が始まった。筆者の説を補強する証拠が、これからどんどん出てくることを楽しみにしている。

銀河ムー特別号

『星河騎士団使用端末のOSについての報告』

過日、星河騎士団から押収した端末に使用されていたOSは、通称？ビオタイト？といわれるものでした。ビオタイトは2年ほど前からネット上で無料配布されているOSですが、最初期の開発者が

誰なのか、もしくはどこの企業なのかが判っていません。バイオイト（黒雲母）という言葉が示す通り、モジュールを重ねて機能を増やしていくこのOSは、現在携帯端末を中心に利用者を増やしています。

しかし、押収された端末に搭載されていたバイオイトのバージョンは、ネットで公開されているモノより高いものでした。加えて、オリジナルのモジュールも確認できました。

確証はありません。しかし、OSバイオイトが今回の事件の黒幕に繋がる可能性もありますので、ここに報告いたします。

ベルカルチャ王国 情報局技官 デイア・スピリトーン

『赤と青の星』 その後 2

ルテボボ王国の首都ラグタタ。政府専用ホテルのスイートルーム。最賓客待遇でそこに泊まっているのはソラ・ベルカルチャだった。

「こんな立派な部屋じゃなくてもいいのに」

「今回は女王様としての訪問ですから。社長」

ソラのぼやきにディアーが応える。

「逃げようたつて駄目ですよ。社長の腕の中には発信器が埋め込まれているんですから」

ディアーがGPS検索用の端末をちらつかせる。最終的に 赤の大陸 にいるソラを見つけたられたのは、彼女の腕に埋め込まれた発信器の信号を、ベルカルチャの商船がつかまえられたお陰だ。

「私にプライバシーはないの？」

「ないです。おトイレもお風呂もばっちりです」

「また 赤の大陸 に逃げようかしら」

「だから、会談・面会の予定が目白押しなんですよう」

「……」

「まずはテール・ルゲナ翁。それからドラン宰相。場所を異動してルテボボ・ベルカルチャ宇宙重工業の役員会議。重工業の従業員代表からの面談も予定されています。その後はルテボボテレビの……」

「わかったわかった。まかせるわ」

と、そこでドアをノックする音がした。「はい」とディアーが対応に出る。顔を出したのはステイーだった。

「社長に面会だ」

「ちよつと先輩。そんな余裕は……」

ディアーとステイーが押し問答をしてる脇を、小さな笑顔がすり抜ける。

「ソラお姉ちゃん！」

「ネリア！」

ソラは大喜びでネリアに駆け寄ると、その小さな身体を抱き締め
た。

「お姉ちゃん、この前はありがとう！」

「あら、わざわざお礼を言いに来てくれたの？」

「うん。お母さんが連れてきてくれたの」

ドアの外には、深々と頭を下げる母親がいた。

「この前は、大変失礼いたしました」

ソラはゆっくりと立ち上がると、ネリアの母親に対峙した。

「ネリアのお父さんは 赤の大陸 で亡くなっていました」

「はい……」

「事故自体は仕方のないことだし、誰にもどうにもできなかったの
かも知れない。でも、その仕事場が非合法で悪意に満ちたモノだっ
たことが私は許せなかったの」

ソラはネリアの母親のあごに軽く手を当てる。母親はびくつとし
て顔をあげた。

「貴女が再婚することはいいいわ。でも、ネリアにとって、お父さん
を過去のことにしちゃいけない。しっかりと向き合わせて、理解さ
せてあげてちょうだい」

「はい」

ネリアの母親は、ソラの眼力におののきつつ、それでも膝に力を
込めて答えた。

「さ、ネリア、何して遊ぼうか？」

「社長！ そんな時間ないんですってば」

「ネリア。こんな恐いお姉ちゃんみたいになっちゃ駄目だよ」

「お姉ちゃんこわーい」

「な、な、なんですかあ。本気になったら社長の方がよっぽどこわ
いじゃないですかあ！」

わ——、とソラとネリアが両手を挙げてディーアから逃げる。

ディーアが大声を上げながらそれを追いかける。

開け放たれた窓からさわやかなルテボボの風が入ってくる。

どこまでも広がる畑の上を、白い鳥がすいと飛んでいった。

『赤と青の星』 その後 3

惑星ルテボボ 青の大陸 西海岸の町ミレトト。

ミレトト共同飛行場内のルゲナ小型飛行商会。

その砂埃で薄汚れた事務室で、ルードとデニスが向かい合っていた。

「怪我はもう大丈夫なのかい？」

「はい」

ルードは左のこめかみを押さえた。包帯はとれているが、銃弾がかすった傷がまだ生々しい。

「女王陛下には、本当にご迷惑をおかけしました」

「陛下というかね、ソラでいいんじゃないかな」

「あの……デニスさんはソラと……」

「どんな関係？」

「……はい」

「ここ、煙草はオツケー？」

「ああ、はい」

ルードが灰皿を用意する。

「最近煙がでる煙草自体少なくなってるからね。ルテボボでこれを見つけたときは嬉しかったよ」

「はあ」

デニスは煙草に火をつけると、美味そうに吸い込んだ。

「君から見たソラはどんなひとだった？」

「綺麗で、強くて、目が離せない……そんなひとでした」

「惚れたろ？」

「……」

「隠さなくていいよ。男はたいがいソラに魅せられる。いや、男に限らないか。ソラは周りのひとを惹き付けてやまないにかがあるんだよ」

デニスはルードの目を見た。

「さっきの質問の答えだ。俺は君と同士だよ。ソラに惹かれたのなら、ソラが目指す世界が実現するように力を貸してやってほしい。ソラと数日とともに過ごしたなら、ソラの言葉は聞いただろ？」
ルードは頷いた。

——全てのひとを幸せに——

灰皿で煙草をもみ消すと、デニスは立ち上がった。

「ソラのことを 星の女王 と呼ぶひともいるが、本人の認識はちよつと違う」

「宇宙から見てくれているって……」

「ああ。しかし、俺は思うんだ。ソラが何歳まで生きるのかは知らないけど、将来、ソラは本当の意味で 星の女王 と呼ばれるようになるんじゃないのかってね」

「……」

「じゃましたね」

デニスは軽く手を挙げると、事務所から外に出た。
空は雲ひとつなく晴れ上がっている。
ソラみたいだな、とデニスは思った。

《赤と青の星 了》

『赤と青の星』 その後 3（後書き）

『赤と青の星』最後までお付き合いいただきありがとうございます。
『星の女王』ソラの物語』はまだ続きます。しばらくは短・中編
ですが、お付き合いください。

『まなざし』

その眼差しは――

どんな小さな星明かりも通すほど透徹で、

どんな小さな嘘も見逃さないほど伶俐で、

どんな小さな祈りも聞き届けるほど慈悲深い、

宇宙の星々の間から、広がり、覆い、包み込む――

1、現在

「ねえ、社長。前々から訊きたかったことがあるんですけどっ！」

移動中の宇宙船のなかで、ディーアがソラににじり寄った。

「なに？」

「いくつまでいけますか？」

「いくつ？ 質問の数のこと？」

「いえすです」

「三つまで」

「了解です」

今回は2時間ほどの移動距離だ。長距離ならば専用の個室を押さえることもあるが、この程度ならビジネスクラスで十分。ベルカルチャ惑星開発会社のソラとディーアは、特になにをするでもなく寛いでいるところだった。

「まずひとつめ。社長は副社長と肉体関係はありますか？」

「また随分唐突ね」

「いえ、この間副社長に訊いたらはぐらかされちゃって」

「あら。はぐらかしたんだ」

「スティー先輩の説によると、あれは何もできてないからはぐらかしたんじゃないかって、そう言っていました」

「ディーアの説は？」

「私は……逆なんじゃないかと思います」

「つまり、私とデニスは肉体関係があるか？」

「はい。……どうですか？」

「ひ・み・つ」

「ええ——？ 社長らしくないですよ。いつもスパツと切って捨てるように答えてくれるじゃないですか。 金剛の薔薇 のふたつ名が泣きます」

「泣かせておけばいいわ、そんなもの」

「ヒント！」

「ひんと？ ありません」

「ううう。じゃ、ふたつめの質問です。こないだ惑星ルテボボで一緒だった男の子」

「ああ、ルード？」

「はい。あの子とは肉体関係に発展しましたか？」

「……ディーア、あなたそんなことばかり考えているの？」

「だってだってえ」

「うーん、確かにルードには迫られたわ」

「おお！」

「でも振った」

「ありや。なんですか？ 可愛い子だったじゃないですか」

「なんでって 赤の大陸 に放り出されてそれどころじゃなかったのよ？」

「でも、でも、映画とかではそういう時にアバンチュールがあるものでしょう？」

「……ディーア、ちょっと耳貸して」
「？」

「あの時はね……」

ソラの耳打ちに、ディーアは眼を丸くした。

「うあ、それは無理ですね。しかし、そんな準備まで？」

「まあね。それがなくても、あんな坊やは願い下げ」

「くう、相変わらず女王様ですね。んじゃ、最後です」

「今度は誰を持つてくるの？」

「違います。あの、社長は常々、星の女王が見てくれているっておっしゃいますよね」

「ええ」

「それを実感したのはいつの事なんですか？」

ソラはちよつと不意を突かれたような顔をしたが、ふうつと身体
の力を抜くと、宇宙船のシートに身を沈めた。

「デイーアには話したことなかったかしら。あれはね――」

2、過去

惑星ベルカルチャにベルカルチャ王国を建国して1年。

惑星は未だ地球型惑星改造が始まったばかりで、王国といっても
惑星軌道上の宇宙ステーションが一機あるだけだった。

ベルカルチャ王国――

女王はソラ。

地権者はデニス。

国民は二十五人。

「言うほど簡単じゃないわね」

宇宙ステーションの自分の部屋で、ソラは開発進行表をながめな
がらため息をついた。

こんにちは、と扉をノックする音がする。

「どうぞ」

「失礼します」

入ってきたのは王室付き侍従長のゲレン。王国なのだからと体裁
を整えるために雇ってみたが、どこぞの王国で長年勤めてきたとか
で、未だにドアをノックするクラシックさだ。

「ゲレン。インターフォンを使ってもらえる？」

「いえ。これが王室というものです。女王陛下」

「そう。で、用件は？」

「はい。先月の収支報告書ができ上がりました」

「ああ……ありがとう」

予想通り、紙の報告書が提出される。

「これもデータでまわしてくれればいいわ」

「いえ。そうはまいりません」

「……」

恭しいお辞儀を残して、ゲレンが部屋を出て行く。残ったソラはため息をついて、収支報告書に目を落とした。

収支は完全に赤字だった。

「まいったわね……」

王国を立ち上げる前、ソラにはいくつかの壮大な計画があった。

まず、いまだ地球型惑星改造をほどこしていない惑星ベルカルチヤに早急に惑星改造を実施する。

つづいて、ソラ自身は惑星改造を請け負う会社を作り、他の惑星の実情などを見て回る。

もうひとつ、将来の為に国民を確保する。

地球型惑星改造については、融資をしてくれる銀行もあり、早々に手をつけることに成功した。いくつかの近隣の惑星国家の協力をとりつけ、建国宣言も行った。

しかし、ふたつめ以降が頓挫している。

ベルカルチヤ惑星開発会社なる会社自体は立ち上げた。登記上はソラが社長、デニスが副社長だが、ほかの社員がいない。加えて、女王の業務が忙しく、ソラが他の惑星へ出向いている暇がない。実績がなければ仕事も来ない。

三つ目は言わずもがな、だ。二十五人の住人の実態は使用人や関係者たちだ。

世界と対峙して、すべてを自分の力で切り開くと決めたのに、自

分は世界の何かに絡め取られてしまっている。

ソラはため息をつく、自分の部屋からふらふらとさまよい出た。

ベルカルチャの宇宙ステーションには？星見台？と呼ばれる広場があった。

全天を透明度の高いクリスタルガラス貼りにした広場だ。

もともとひとの少ないベルカルチャ王国だから、ソラ以外には誰も見あたらない。

ゲレンに見つかったら何と言われるか判らないが、ソラは広場の中央に大の字に寝っ転がると、星々の宇宙を見上げた。

じっと見上げていると、まるで宇宙空間に放り出されたような気持ちになってくる。

私は何をしているんだろう、ソラはそう自問した。

やらなければならないことが一杯ある。そういう焦りが身を焦がすのに、身動きがとれない自分がいる。

ソラは大の字になったまま目を閉じた。

ちよつと考えをまとめる必要が――

雨が降っていた。

雨を見るのは地球以来だ。

雨は容赦なく降り続く。

私を責めているの？

辺りを見回してみる。

ああ、そうか。ここはベルカルチャの大地だ。

降る雨は、惑星改造の結果。

星は今、人が住めるように生まれ変わろうとしている。

変体の苦しみにもだえている。

そう。

私を責めているのはお前なのね。

女王だなんだと気取って、椅子にしがみついている私を責めているのね。

ああ、雨が降っている。

力強い雨。

やがてこれが河になり、大地に緑をはぐくむ。

この大地に多くのひとの幸せが根付くことを夢見て、星はいま苦しみに耐えている。

なのに、私は――

はっと気がつくと、目の前には変わらぬ星空が広がっていた。

「夢？」

上体を起こそうとしたその時、ソラの視線の中を流星が走った。

それは幾重にも重なり、天を横切っていく。

「ああ……」

その流星群の向こうに、ソラは確かな視線を感じた。

透徹で、伶俐で、それでいて慈悲深い眼差し。

人間ごとкиでは手が届かない、絶対の女王の視線。

自分は何にとらわれていたのだろう。

女王という形にとられる余り、身動きができなくなっていた。

でも、私は本当の女王なんかじゃない。

本当の女王は星々の彼方にいるではないか。

あの眼差しが見守っていてくれるなら、私は、私のやりたいようにやれば――

「陛下！　こんなところで何を！」

大の字に寝転がったソラを見とがめて、ゲランが駆け寄ってきた。

「ゲラン。明日朝一番に出掛けます」

「どちらへ？　お戻りは？」

「さあ。どうしようかしら」

「公務はどうなさいますか？」

「そうね。なら、あなたに代行を命じるわ」

「は？」

ゲランの驚いた顔をみて、ソラは笑った。

星々の彼方で、星の女王も笑っている気がした。

3、現在

「へえ。社長にもそんな時期があっただんですね」

「そうよ。いままで通ってきた道すべての上に私はなりたっているの」

「その時のゲラン宰相の顔、見てみたかったですっ」

「まあ、その時はまだ侍従長だったわけだけだね。彼がとんでもない実務家に変身したのには驚いたわ。ひとは立場が替われば変わるものね。本人が一番驚いていたみたいけど」

「星の女王って、わたしにも見られますかね？」

「さあ。何をどう感じるかは人それぞれだから。私には女王様と感じられたけど、ひとによってはそれは神様かもしれないわ」

「最近では、社長ご自身が 星の女王 と呼ばれることがありますけど」

「ああ、それは困っているのよね」

「金剛の薔薇、銀河の雌豹、星の女王……社長のお気に入りはどのふたつ名ですか？」

「どれも気に入っていないわ。だいたい、ふたつ名を自分でつけるひとはいないでしょ？」

「……だめですか？」

「つけたのね？」

「はい。当ててみてください」

「神速の酒樽」

「ひどいです。社長、それはひどすぎますう」

「ごめんごめん。じゃあ、ディアーのふたつ名はなにがいいの？」

「桃色の雌豹」

「……」

珍しくソラが爆笑し、ディアーは残りの時間をふくれっ面で過ごした。

《まなざし 了》

『星をあげるよ』 プロローグ

「君に星をひとつあげるよ」

僕が彼女に初めてかけた言葉は、今思い出せばなんと陳腐な言葉だったことだろう。

当時は、夜空に輝く無数の星に名前を付けることがはやっていた。恋人へのプレゼントに星の命名権を買う——宇宙管理機構が販売していた正規のものから、民間企業が小売りにした期限付きのものまで、それはもう、見上げることができるとあらゆる星々に名前が付けられたものだった。恋人同士で連名の名前を付けて、別れたあとに裁判沙汰になったなんて話は日常茶飯事だったのだ。

そんな僕の言葉を聞いたときの彼女の顔を、僕は一生忘れることはないだろうと思う。栄養不足と疲労でやせこけた顔の中央で、瞳だけが射るような光をたたえていた。気まぐれで声をかけた僕を、捕食せんとする輝き——

「貰うわ。見返りはなに？」

後から知ったことなのだけれど、彼女は星の命名権をプレゼントすることが流行っている、なんてことは知らなかったのだ。だから僕の言葉を文字通り受け取った。星がひとつ、丸々彼女のものになると素直に思ったのだ。いや——素直という言葉は間違っているかも知れない。当時の彼女はもう、僕の言葉に賭けるしかなかったのだ。

そして——

僕の言葉は、言葉通りの意味だった。

「僕はこれからその星へ旅立つ。なにもない、田舎の星さ。僕と一

緒に旅をしてくれるのが条件だ」

そんなこと——おやすいご用だわ、と彼女は言った。

ユーラシア大陸極東の小さな宇宙港の片隅でのことだった。

もちろん、僕には僕の理由があり、彼女には彼女の理由があった。しかし、そんなことにはお互い斟酌せず、あるうことかお互いが名前も知らないままに、小一時間後には、僕と彼女を乗せたシャトルは地表を飛び立った。

それは、長い旅の始まり。

僕が目撃し、彼女が成し遂げることになる、長い覇道への第一歩だった。

『星をあげるよ』 花街 1

「お誕生日おめでとう、ベルカ姐さん」

「ありがとう、ソラ」

少女から少女へ手渡されたものは、小さな髪飾りだった。フォー
クのような形状で、端にはきらきらと光る飾り玉があしらわれてい
る。かつて、極東の島国で簪かんざしと呼ばれたものだった。

「珍しいわ。結い上げた髪に挿せばいいのね？」

「やってあげるわね」

畳二畳にも満たない小さな部屋で、ソラと呼ばれた少女は、もう
ひとりの少女ベルカの背後に回った。壁には薄汚れた鏡がひとつ。
すでに日が暮れた時間で、明かりは隣の部屋から漏れてくるばかり
だ。

ソラに髪を結わせながら、ベルカは簪をくるくるともてあそんだ。

「こんな髪飾り、高かったでしょう？」

「姐さんの誕生日だもの。値段のことは言いつこなし」

「ふふふ、ありがとう。今日から私は働くんですものね。いっぱい
稼いで、ソラの誕生日には、もっと綺麗な髪飾りを贈るわね」

「期待しているわ」

ふふふ、という少女たちの忍び笑いが小さな部屋を満たす。しか
し、小さな幸せを絵に描いたようなその空間には、絶えず、男と女
の嬌声がどこからともなく漏れ聞こえていた。白粉の臭いや、なん
とも言えない饴えた臭いもただよってくる。ただ、それらは、彼女
たちにはあまりにも日常で、そこに存在してあたりまえのもので、
今更気に掛けるようなことではない。

そこは、花街の一角。遊女達が仕事中に子供を押し込めておく小
さな部屋。花街で生まれた少女達の多くが、同じような部屋で育ち、
年頃になると店に上がるようになる。なんの疑問も持たず、なんの
教育も受けずに。

少女ベルカは、12歳になった今日から店に上がる。はじめは小間使いとして、やがては遊女として――

「はい、できた」

ソラが結い上げた髪に、ベルカはゆっくりと簪を挿した。

「姐さん、綺麗」

「ソラ。あなたは今年でいくつになるの？」

「十になるわ」

「そう。もう、私は遊んであげられないから……明日からは、町外れのルチャバあさんのところへ行くといいわ。きつと色々教えてくれるわよ」

「教えてくれるって、何を？」

「さあ……、私たちが知らない何か。でも、きつとあなたのためになるわ」

「……姐さんがそういうなら、そうするわ」

いい子ね、とベルカは笑い、ゆっくりとソラを抱きしめた。

「あなたは、こんな町出て行けるといいわね」

「姐さんと離ればなれにはなりたくないわ」

「私もよ」

遠くからベルカを呼ぶ声が聞こえて、ベルカはソラから体を離れた。

「行かなくちゃ。頑張って働いてくるわね」

ぶっきらぼうに呼ぶ声に、ベルカは大きな声で返事をしながら部屋を出て行った。結い上げた金髪に栄える簪の紅の玉が、ソラの中で妙に印象に残った。

『星をあげるよ』 花街 2

「ソラ」

ソラがベルカを送り出した翌朝、仕事から帰ってきた母親に、ソラはいきなり頬を張られた。

「あんた、こんな高価なモノどこで手に入れた！」

母親の手には、ソラがベルカに送った簪が握られていた。

「それは、子守の手間賃を集めて……」

「ふざけるんじゃないよ！ 人にこんなものをやる余裕があったら家にいれな」

「ひどい！ 返して！ それはベルカ姐さんに贈ったもののなに」
再び、母親の平手がソラに飛んだ。

「あんな女の娘となんか仲良くするんじゃないよ！ 今日食事抜きだ。こんな髪飾り！ まったく……誰のお陰で日々の食事にありつけていると思ってるんだか……」

母親は髪飾りを地面にたたきつけると、ベッドに潜り込んでしまった。ソラの家は、遊女屋の子供部屋と同じくらい小さい。母親が寝ている昼間は、起こさないように外に出ていなければならぬ。ソラは、たたきつけられて欠けてしまった髪飾りを手に、スモッグに煙る昼の花街にさまよい出た。

「ベルカ姐さん……」

ふらふらとベルカの家を目指した。昨日の夜から働き始めたのだから、今は寝ているかとも思ったが、それでもひと言謝りたかった。母さんがごめんなさい、と。

ベルカの家にとどり着いたソラは、家の前に呆然と座り込むベルカの母親を見た。母さんが「あんな女」と称した人——。でも、ベルカ同様優しい人だ。

「あの……ベルカ姐さんは……」

「ああ、おソラちゃんか」

ベルカの母親はぼそつとつぶやいた。

「あの子もついてなかった。弔ってやっておくれ」

「……え？」

言葉の意味が分からず、ソラは真っ白になった。

「とむらうつて……え？」

ベルカの母親がゆつくりと家の中を指さした。小さな家の中にはむしろがひかれ、ベルカが眠っていた。いや——あれは——

「姐さん……どうして……」

「酔った客がベルカの髪飾りに手を出したのさ。それで、おソラちゃんに貰った大事なモノだからやめてくれって……怒った客に殴られて、勢いで階段から転げてさ……」

「わたしの……せいで……」

「運がなかったんだよ。でも、考えようによっちゃあ、客を取る前に逝ったんだから良かったのかもしれないねえ」

「……うちの母さんは、そんなベルカ姐さんから髪飾りを取ったの？」

「ああ、それはあたしが返したのよ。おソラちゃんに返してあげて。どうせ無理して買ってくれたんだろ？」

「無理なんか……」

そこから先はもう言葉にならなかった。溢れる涙で滲む瞳で、ただベルカの顔を見つめ続けた。

欠けてしまったけれど、せめてこの髪飾りを手向けに——

「それは、ベルカの形見だと思って持っていておくれよ、おソラちゃん」

「でも……」

「ここはさ、場末の花街だ。結局、ベルカには外の世界を見せてやる事ができなかった」

「外？」

「ああ、外だよ。いいかい、おソラちゃん。この町は小さい。人はね、ほかの星にまで住んでいるんだよ」

「ほかの星？ お空にある星？」

「ああ、そうさ。おソラちゃんには、ベルカの分も、いっぱい生きて貰いたいんだよ。あたしがどうこうしてやることはできないけどさ、でも、こんな町、出て行くにこしたことはないんだよ」

——あなたは、こんな町出て行けるといいわね

昨日聴いたばかりのベルカの言葉が蘇り、ソラはまた泣いた。1才で命を落とした少女を弔にくる者もない花街の片隅で、ソラは簪を握りしめながらひたすら泣き続けた。

その胸に、小さな決意が形になるのを感じながら。

『星をあげるよ』 末裔 1

お前は貴族の末裔だ、とハイスクールに進む頃に父に告げられた。ユーラシア大陸の北、かつてロシアと呼ばれた大国のなれの果て、雪に閉ざされた小さな町の片隅でのことだった。

人の世界は、既に地球から離れて久しかった。かつて、国という概念は地球上に区切られた国土を指し示すモノだったようだけれど、それは今や、惑星単位での概念となっている。地球は地球という国で、銀河系にあまた散らばる有人の惑星と並び立つ単位のひとつでしかない。もちろん、人類発祥の地という自然遺産的な意味では特別な星ではあるけれども、それは、経済的な裕福さとは無縁の事柄でしかない。

だから、こんな一地方の貴族の末裔だからといって、それがなにか腹の足しになるのか、という話である。

「それで、父さん。貴族の末裔なら、なにか財宝でも持っているって言うの？」

「あるのは会社の借金ばかりだ。何もない……と、言いたいところだが、実はあるんだ。ひとつだけな」

父は食品スーパーのチェーンを運営していた。かつてこの地域は社会主義という社会体制をひいていたことがあったらしいけど、今やそんなものはない。地球不況が叫ばれて久しいが、誰もが必死に働いてなけなしの収入を得ているのが現状だ。父の会社運営も厳しく、不渡りが出るのも時間の問題のようだった。

「俺のじいさまの更にまたじいさまの時代のさらに昔、宇宙開発が地球上の国家単位の事業だった時代があるのよ」

父はテーブルの上になにやら古い封筒を引っ張り出した。

「当時はまだ貴族の末裔で羽振りも良かったご先祖様がな、惑星の権利をひとつ手に入れたんだ」

「惑星 B M 〓 5 7 8 9 2 ……」

「一応、人が住むことのできる星だ。開発はほとんど進んでいないがね。そして、お前が生まれたときに、この星はお前の名義に変更した」

「……」

渡された権利書と一緒に、惑星までの地図が添付されていた。

「ずいぶんと遠いね」

「だから、今でもほとんどうち捨てられているんだよ」

それでも、惑星ひとつの権利というのは馬鹿にできない。売れば会社の再建も可能だろうに。

「いや、それは代々引き継がれてきた星だからな。開発しようが貸そうが住もうが勝手だが、売ることだけはダメだ。それが家訓つてやつだ。だから、いざとなったらお前を勘当する」

「は？」

「そうすれば、その星もお前も家とは無関係だ。会社の抵当に押さえられる心配もない」

もちろん、会社をつぶすつもりなんかない、とその時の父は笑った。なんだかんだいっても、世の中の厳しさを知らなかった子供の僕は、その言葉を信じた。

そして、父とそんな話をしたことさえすっかり忘れてしまったいた18歳の夏。

僕は勘当された。

そのとき、僕はカレッジの友人数人とバカンスに出ていた。裕福な友人がもつ森の別荘に、男女併せて十人が泊まり込み、毎晩乱痴気騒ぎを繰り返していた。

「デニス、なんだか大きな荷物が届いているよ」

別荘の持ち主マラットに呼ばれて玄関に出てみると、大きな旅行鞆がひとつ、速達便で配達されていた。

「なんだよ、着替えの追加を送ってもらったのか？」

「ああ……そんなところだ」

もちろん、そんな予定はなかった。僕は鞆を二階の部屋に引っ張り込むと、大あわてでそれを開いてみた。中には僕の着替えと、愛読書が数冊と、それから古びた封筒が入っていた。見覚えのある封筒だった。

あわてて封筒をひっくり返すと、あの日父に見せられた権利書と一緒に、一通の手紙が出てきた。今時、紙に手で書いた古風な手紙だった。

愛しいデニス

お前を勘当する。

ふがいない父ですまない。

父の会社が倒産したようだった。

僕はのほほんと遊んでいた自分に腹が立ったが、いまさらどうしようもなかった。家にとって返して、惑星の権利書を借金取りにたたきつけることも考えたが、それを父が喜ぶとは思えない。

手紙には続きがあった。

借金取りがお前を追っている。逃げてくれ。

それに続いて、体につけて、という母の一筆も添えられていた。

そうだな。いくら形式上勘当したからといって、借金取りがそれで見逃してくれるほど世の中は甘くないだろう。

「デニー、どうかしたの？」

部屋にとじこもったまま出てこない僕を心配したのだろう、ナターシャが声をかけてくれた。僕はすぐるような想いで答えた。

「ねえ、ナターシャ。宇宙の果てまで一緒に旅をしないかい？」

「ぷっ！ なあに、それ？ 新しい口説き文句？」

「僕は本気だよ」

「宇宙の果てってどこ？」

「名もない惑星」

「いやよ。ネオ・ニューヨークあたりなら考えるわ」

「……」

ネオ・ニューヨークは、銀河系で最も繁栄している惑星の名前だ。

「そろそろ夕ご飯ができるわ。早く降りてきてね」

「ああ……」

ナターシャが階段を下りる足音を聞きながら、僕は自分の携帯通信端末を確認した。父の名義で契約されている携帯通信端末は、今でも通信可能状態になっている。しかし——これをたどって借金取りはこちらに向かっていることだろう。みんなに迷惑はかけられない。

ぼくは手早く荷物をまとめると、部屋を出た。マラットの別荘は大きくて、食堂の前を通らずとも階下へ降りることができる。

携帯通信端末は適当なところで捨てよう。

行く先は、ヨーロッパ地方へ逃げるもいいし、海を渡って南米大陸へ行くもいい。

でも——

僕は旅行鞆をひとつポンと叩いた。

「宇宙までは追ってこないだろう」

「ルチャばあさん、いる？」

「おお、ソラか。奥にいるよ」

「どうしたのルチャばあさん、外はとってもいいお天気よ」

ソラが薄暗い荒ら屋の奥へと進むと、ベッドの上に座ったルチャばあさんがいた。

「朝から足が痛くてなあ」

「あらいけない。私、薬もらってこようか？」

「ああ、いらないよ。いつものことさ。年だからしょうがないよ」

「じゃあ、今日は勉強はお休みにしようかしら」

「なに、あたしのことは気にせずに端末を使ったらいい。あたしだって足が言うことを聞かないだけで、頭はピンシヤンしているんだ」

「それじゃあ」

ソラは慣れた手つきで部屋の隅に置かれたコンピュータ端末の電源を入れた。全世界的に見れば骨董品の類に入るネットワーク端末だったが、ここ場末の花街ではめずらしいものだった。

「ねえルチャばあさん、私たち花街の人間と、それ以外の人間の違いってなあに？」

「生物的な違いなんてありはしない。あるのは境遇の違いだ」

「例えばね、あたしが外の世界に出たら……、他の人は私が花街の人間だってわかるのかしら」

「今のままなら分かるだろうね」

「どうやったら分からなくなるの？」

「綺麗なべべを着て、髪をおろせばいい」

「それだけ？」

「それだけさ。逆もしかり。王様だって、みすばらしい格好をして遊女屋の中に座っていたら、単なる小間使いだ」

「王様？ 偉い人？」

「国を治める人のことだ」

「それ、私でもなれる？」

「なれるさ。ただ、並大抵のことじゃないよ。王様はみんなに敬われなければならない。みんなが幸せになるように国を治めなきゃならない」

「……今の世界に王様はいないの？」

「なぜだね？」

「だって、私の周りには幸せになれない人がいっぱいいる。みんなを幸せにするのが王様なんでしょ？ 王様がいるならみんなが幸せになれるでしょ？ そうしたら、ベル力姐さんだって……」

姉と慕ったベル力が死んだのは五年前のことだ。今15歳になったソラは、ベル力の歳をとうに超えてしまった。

「ソラ。ベル力のことは残念だったけれど、あれが王様のせいだなんて決めつけてはいけないよ」

「なぜ？」

「世の中は基本的に理不尽なものだからさ。だから、仮にすばらしい王様がいればこんなことにならなかったのに、というのは他力本願の浅はかな考えかただよ」

「たりきほんがん？」

「そう。誰かが何とかしてくれるのを指をくわえて待っているだけのことさ。何とかしたいなら、自分でなんとかしようとしなくちゃいけない」

「自分で……」

「そうさ。ベル力のような娘を増やしたくないと思ったら、自分でできることを考えるんだよ」

王様に頼らず、自分で考える――

「ああ、それからね、いまこの星に王様はいないよ」

「え？ いないの？」

「ああ。地球の国家制度は議会制民主主義といってね……まあ、難しいことは省くけど、大統領という人はいるけどね」

「ふーん」

「ほら、ネットで調べてごらん。出てくるから」

ベルカがこの世を去ってから五年。ソラはベルカに言われた通り、町外れのルチャばあさんのところへ通うようになっていた。

ルチャばあさんが教えてくれたのは、基本的な勉強、そして花街の外のこと。母親はいい顔をしなかったが、ルチャばあさんが花街でそれなりの発言力を持っていることもあって、12歳を過ぎて小間使いとして店に上がるようになって、ソラは町外れに通い続けていた。

そうして、ソラはもうすぐ16歳。

客を取る歳である。

『星をあげるよ』 足抜け 2

「破瓜^{はか}の儀式は行わない。小間使いのお前を見て気に入ってくれた御仁があつてな。処女なら是非にとおっしゃってくれた」

遊女屋の主人がしゃべるのを、ソラは他人事のように聞いていた。行わないと言われた破瓜の儀式とはいったい何をするはずだったのか――

「初日から客がつくなんざついているぞ、ソラ。衣装はこちらで用意したから安心していいぞ」

その衣装代がソラの借金になることは分かっている。ルチャばあさんに色々と教えて貰ったお陰で、花街の仕組みもだいぶん分かっていた。おそらく、母親はソラを担保にして店から多額の借金をしている。そのためにソラが遊女になるのは決まっていたのだ。一度借りた借金は、何をどうやっても雪だるま式に増える。唯一の救いはソラ自身にはまだ借金が無いことだが、これで衣装代の借金ができあがつてしまった。母親が遊女を引退すれば、その借金もソラの肩に掛かってくるのだろう。

「ソラ、聞いているのかい？」

背後から母親が強い口調で言う。

「聞いています。大丈夫」

「おまえは遊女の娘だし、なにをやるのかは分かっているな？」

「はい」

私に選択肢はないのだろうか――

「じゃあ、初仕事は今夜だ。湯に入って体を綺麗にしておきなさい」
「はい……」

遊女屋の一室、今夜客を接待する部屋に、ソラは母親と二人で残された。

「これで、お前と私はライバルだね」

「え？」

「だってそうだろ？ 同じ遊女屋で客をとるんだ。今日まで育ててやったんだから、もうけが出たらこちらにも回すんだよ。ま、私の娘なんだからすぐに上手くなるだろうよ」

「……」

それが母親の本音なのかどうなのか、ソラには判断がつかなかった。でも、それでも、それらの言葉はソラの胸に突き刺さった。

「湯に入ります」

「ああ。綺麗な体は今日までだからね。じっくり洗いな」

『星をあげるよ』 足抜け 3

その夜、ソラの待つ部屋に入ってきたのは脂ぎった壮年の男だった。小間使いをしていた3年の間に、なんども見かけた客だった。

「おお、ソラも16歳になったか」

「はい」

きらびやかな衣装に身を包んだソラは、しおらしくお辞儀をしてみせた。

「うむ。よし、まずは酒だ」

ソラがテーブルの呼び鈴を鳴らすと、小間使い達が食事と酒の膳を持って入ってきた。安楽椅子に腰掛けた男にそそと近づいたソラは、酒の瓶を掲げて酌をした。

「ソラ、お前も呑め」

「呑んだことはありません」

「そうかそうか」

どうやら、酒を呑んだことがないというソラの答えは、客をたいそう喜ばせたようだった。

「うひひひ、初めて尽くしはたまらんな。どれ、軽く呑んでみる」

男は上機嫌で瓶をソラに差し出し、ソラはおそろおそろそれを受けた。

ソラにとっては意外なことだったが、酒は意外に美味しく思えた。わずかに体温が上がった気がしたが、それ以上の変化は体におこらない。意外と酒には強いようだ。

一方で、男は早々に酒に酔い始めているようだった。

「おい、ソラ、そのきらきらした服は無粋じゃのう」

「そうでしょうか？」

「わしが普通の服を買ってきてやった。着替えよ」

男が足下に置いてあった箱を、足でソラに押しやった。

「ここで着替えろよ。ぐふふふ」

「……」

ソラは恥じらってみせつつ、男の目の前で服を脱ぐと、箱から出した服を着込んだ。シンプルなデザインのワンピースだった。

「髪も下ろせ」

ソラは髪を下ろし、酒瓶を掲げると、男にすり寄った。

「こうすると普通の娘に見えますか？」

「おうおう、どこぞの箱入り娘みたいじゃ」

「嬉しいですね。ささ、もっとお呑みになって。夜は長いですね」

「そうかそうか！」

そうして。

三十分の後には、男は完全に酔って眠りこけていた。

「ありがとう、母さん」

つぶやいたソラの手の中には、白い錠剤の入った瓶——母親が眠れないときに使っていた睡眠薬——が握られていた。

この御仁が、遊女に服を買ってやるのが好きなのは周知の事実だった。だから、ソラに対しても新しい服を買ってくるだろうことは想像がついたのだが——それでも、これは賭だった。

——綺麗なベベを着て、髪をおろせばいい

これで人混みに紛れる準備は整った。あとは——

ソラは、酒瓶に残った酒を蒲団にまいた。そして、煙草用に用意しておいたマツチを擦ると、蒲団の上に放つ。

そして、頃合いを見て窓から身を乗り出した。部屋は三階。飛び降りて怪我をするか、助かるか——

いや、いくら何でもこの高さは無理だ。

ソラは身を翻すと、部屋の入り口へと走った。

「おい、何事だ！」

「！」

部屋を飛び出そうとしたところで、店の用心棒の男と鉢合わせし

た。

「火事よ！ 消して！」

「何？」

用心棒の気をそらした隙を突いて、ソラは廊下を駆けた。

「火事、火事よ！」

ソラの声を聞いて、方々の部屋の扉が開く。しどけない姿の男女がわらわらと飛び出してくる。

「ソラ！」

「……母さん」

廊下の端にソラの母親がたたずんでいた。

「ソラ、お前……」

「さよなら、母さん」

ソラは立ち止まらず、走りながら言い捨てると、階段を駆け下りた。一気に玄関までたどり着くと、ソラは外に飛び出した。

遠くから消防車のサイレンが聞こえてくる。火事に気づいた人々の叫び声があたりに満ちている。そんな中を、ソラは町は外れまで走った。

「ルチャばあさん！」

「やっぱり、おまえか。ソラ」

「私、ベルカ姐さんみたいな娘がいない世界をつくってみたい」

「そうか。じゃあ、これを持っていきな」

ルチャばあさんは一枚のカードを差し出した。

「これは？」

「通貨カードさ。ある程度はこれでしのげるだろう。それ以降は自分でなんとかするんだ」

「ありがとう。ルチャばあさん」

ソラはルチャばあさんに抱きついた。

「そういう格好をしていると、普通の娘にしか見えないよ」

「だって、私まだ客をとってないよ」

「そうか。そうだったね。ベルカの分も生きるんだよ」

「うん」

ソラは零れた涙を拭くと、ひとつにつこりと笑って、ルチャばあさんの家を飛び出した。

花街は遊女が逃げることを警戒している。しかし、この町で生まれ育ったソラには、そんな警戒はザルもいいところだった。今までは外の世界で暮らすことなど考えてもみなかったから、町を抜けだそうなんて考えなかった。

しかし、今はそうではない。路地から路地を抜け、灯りもない道なき道を抜けると、町の正門から少しはずれた外壁の隙間に出た。外壁の先は荒れた草地だが、そこを抜けると大通りにでるはずだ。地図でしか見たことがないが、そこまで行けばもう人混みに紛れることは簡単はずだ。

ソラは後ろを振り向くことなく、背丈ほどある草むらに足を踏み入れた。

地球がいかにも廃れた星だろうと、現代社会はネットワーク社会だ。携帯通信端末を破棄してから気づいたのだが、あれがないと身分の証明もおぼつかない。

そして、借金取りは更に非情な手段にでてきた。いや、温情のある借金取りがいるのかどうかは知らないけれど。何かというと、僕の通貨カードを停止させたのだ。僕が使っていた通貨カードは、父がメインバンクにしていた銀行発行のモノだったから、停止させるのはさぞ簡単だったろう。

マラットの別荘を出たときには通貨カードはまだ使えた。だからある程度のところまでは移動することができていた。自宅からも相応な距離があるし、もう何も心配することはないと思っていたのだが――

僕はイルクーツクの町で一文無しの状態に陥った。めざすポストチヌイ宇宙港までは、まだ1000キロ以上の距離がある。

「……困った」

メインバンクの支店にはもちろん顔を出してみた。しかし、携帯通信端末で身分を証明できないことで、通貨カードを復活させることはできなかった。実家に身元確認がとればすぐにでも再発行します、とは言われたが、それはできない相談だった。

僕は、イルクーツクの町をしばらくさまよった。なにかアルバイトでもして金を稼ごうかとも思ったが、それはこの町に長期滞在をすることを意味している。借金取りのこともあるが、なんだか地球でくすぶっている場合ではないような気がして気が進まない。

惑星の権利書売るか？ たとえ身分の証明がはつきりしていなくても、人が住める惑星の権利書ならそれなりの額になる。なにしろ、開発しだいで将来が見込めるのだ。投資をする気になるヤツも結構いるだろう――

投資？

——そうか、そういう手があるか。

僕は近くの公園のベンチに腰を据えると、旅行鞆を開いた。父が送ってよこした着替えの中にスーツが一揃いあったのだ。僕は木陰に場所を移すと、手早くスーツに着替えた。そうして公衆トイレの鏡に向かい、髪をなでつけて格好をつけてみた。

「僕は貴族の末裔、末裔だ……」そう、自分に言い聞かせる。「さ、行ってみようか！」

『星をあげるよ』 東へ 2

「惑星開発ですか？」

「さよう。身ひとつでなんとかしてみようと思うのです」

僕は、地元銀行の融資窓口にいた。惑星M＝57892の権利書を提示して、かつての貴族の末裔ということを嫌みなほど誇示して融資を依頼していた。

「いや、しかしですね。ご実家に内緒で、というのはどうも」

「それがですね、父は僕に言うのですよ。お前はひとりでは何もできない馬鹿息子だ。役に立たない穀潰しだとね。僕そんな風にみえますか？」

「え、いや、その……」

「だから飛び出してきたのですよ。で、融資をお願いするにしても、いつものメインバンクじゃあ、父の後ろ盾を頼りにしているのと同じでしょう？　ですから、お宅にお願いしようと思うわけですよ」

「それはありがたいお話ですが……」

「この惑星はね、まだ未開発ですけど、いやだからこそ、いままでにはない惑星社会にしたいのですよ」

「それは……どんな？」

「今考えています」

「それはちよつと……」

「信じられないですか？　ちゃんと一緒にやってくれる人もいますんですよ」

「その方はどちらに？」

「ポストチヌイ宇宙港で落ち合うことになってます」

「……」

「この権利書になにか不備がありますか？」

「いえ、それはもう間違いありません」

「なら、先行投資だと思って融資をお願いします。事業がうまくい

った晩には、こちらの銀行をメインバンクにしてもいいと思ってるんですよ」

融資担当はあきらかに困っていた。貴族の末裔と名乗るボンボンがわがままで飛び出してきて金を貸せと言っているのだ。困らない方がどうかしている。

しかし、粘ればある程度の金額は引き出せるだろう。権利書は本物だし、権利書の履歴を見れば、父のところへもたどり着くことができる。僕が銀行を出てから父へ連絡をとればいい、そういう判断になるだろう。

「それで……いかほどご必要で」

僕は法外な金額を要求した。惑星開発に必要な金額など分からなかったので、適当にふっかけてみた。

「それはいくら何でも……せいぜいこの程度までです」

「それは……ならば、先にキャッシュでこれだけ用意してもらえますか」

「キャッシュですか？」

「父が私を捜していると思いますから、地球を出るまでは通貨カードを使いたくないのです。あとはお家で口座を作っただければ、通貨カードの発行は他の星の支店でもかまいませんよ」

いかにも詐欺師っぽい言いぐさだ。しかし、権利書の威力が効いている。この融資担当者にしても、これが本物の惑星開発への融資なら大仕事だろう。

「では、私の権限でこれだけキャッシュをご用意いたします。条件としましては、宇宙に上がってからいくつかの経過報告をいただくことになります」

「結構です。必要な報告事項をまとめてください」

「わかりました」

最後の関門は、担当者がキャッシュを用意する間に父に連絡を入れることだったが――それはなかった。もちろん、このあと、すぐにだか、明日になるかは分からないが、この銀行が父に確認を取る

のは間違いないだろう。そこで父の破産を知ったならば、その後の融資は凍結されるに違いない。

それでも、僕はここで手に入れたキャッシュを借り倒しにするつもりはない。惑星開発をやってみようというのも、さっき思いついたことだがいい考えだと思う。

「それではこちらでお願いします」

担当者がキャッシュの入った封筒と、必要な書類を持って現れた。「宇宙に上げられた最初の寄港地で、一緒に開発を担当されるという方をご紹介下さい。それから、開発計画をひと月以内にお送りいただきます。それが承認されれば新規口座を開設し、融資金の残をお振り込みいたします」

「わかった。君、名前は？」

「セルゲイです」

「ありがとう、セルゲイ君」

僕は立ち上がり、担当者に握手を求めた。セルゲイ君は少々微妙な顔で握手を受けると、お気をつけて、と僕に言った。

借金取りがこの銀行に押しかけることがないことを祈りつつ、僕は悠然と銀行を後にした。

『星をあげるよ』 北へ 1

ソラは生まれて初めて通貨カードを使った。実体のないお金で買
い物ができるのは不思議な気がした。

ルチャばあさんが用意してくれた金額は結構なモノだったが、そ
れでも外の世界の物価はとてつもなく高かった。ソラは最初、知識
でだけ知っていたホテルに宿泊したが、あまりの宿泊費の高さに目
を回した。それ以降、夜はできるだけ野宿で済ますようにして、北
へ向かって歩き続けた。

北。ずいぶんと遠いけれど、それでもここから一番近いところ
にある宇宙港。それはポストチヌイ宇宙港というところだった。

「宇宙に出る。宇宙に出て……王様になるんだ」

ソラの想いは漠然としたものだ。どうしたらそれが実現でき
るのかよく分からなかったが、とにかく宇宙へ上がるのが先決だ
と思った。

そうして花街を抜け出して十日目、名前も知らない町を歩いてい
るときだった。

「おっと、ごめんよ」

通りすがりの若い男とぶつかった。

「あ、こちらこそすいません」

「なんのなんの」

男は風のように離れていった。

「？」

妙な違和感。ソラは自分のポケットに手をやり、そして青ざめた。
「ど、どろぼう！」

ポケットに入っていたはずの通貨カードが消えていた。さっきの
男がすっていったに違いない。

ソラはあわてて男の後を追ったが、人混みに消えてしまった男を
見つけることはできなかった。

「あの、今ここで若い男の人を見かけませんでしたか？ 格好は……ええと……」

結局、スリを見つけることはできなかった。

すぎるような思いで近くの警察署にも行ってみた。しかし、身分証明書の提示を求められて、後ずさりするように逃げてきてしまった。

「ごめん……ルチャばあさん。貰ったお金、盗られちゃった」

どうして、ひとのお金を盗んだりするんだろう。盗まれた方はこんなに困るし悔しいのに。

ソラは悔しくて、道ばたでひとり泣いた。泣いている暇があるなら前に進め、そう頭では分かっているけど、体が動かなかった。

そうして日が暮れかけたとき、ソラにかけられる声があった。

「どうしたね、お嬢ちゃん」

「？」

「鞆でもおとしたか？」

ひげ面の大男は、ソラの肩に自分の上着を掛けると、こんな所にいたら風邪をひくからといってソラを促した。心のどこかが警戒音を発していたが、くじけかけた心に男の声は優しく染みて、ソラは促されるままに足を踏み出した。

『星をあげるよ』 北へ 2

「そうか、ポストチヌイまで行くのか」

「知り合いがいるの」

男は長距離トレーラーの運転手だと言った。ソラに声をかけたすぐ近くには大型のトレーラーが駐められていて、ソラはその助手席へと導かれた。

「安心するとええ。俺には女房も子供もいるからな」

夕暮れの街道を走り出したトラックの中で、男はそういった。

「旅は道連れじゃ、俺もポストチヌイまで行くから、連れていってやる」

「でも……」

「ああ、金のことは心配せんでええ。泣いてる女の子から取ったりせんよ」

空調の効いたトレーラーの助手席は暖かく、車の揺れに身を任せて、いつのまにかソラは眠ってしまった。

気がつくと、あたりはすっかり暗くなっていた。

「腹、減っただろ？」

「え？」

トレーラーが進む先に、煌々と灯りの点る大きな駐車場が見えてくる。

「あそこのドライブインで晩飯にしよう」

ドライブインの中は喧噪で満ちていた。

「よう、ニコラス、今日はまたべっぴんさんを連れてどうした？」

男はニコラスという名前らしかった。顔見知りなのか、次々とドライブインの中にいた男達が声をかけてきた。

「お、いいねいいね、お裾分け願いたいね」

そんなことをいう男達に、ニコラスはまじめな顔で答える。

「だめだ。これはそんなじゃねえ」

そんなんじゃない……？

「悪いなあ、ここいらはがさつな運転手ばかりでよう。さ、何を食いたい？」

「でも」

「だから、金の心配はいらねえって」

結局ニコラスに押し切られ、ソラはハンバーガーのセットを頼んだ。淹れたてのコーヒーが体に染みだ。

「ニコラスさん、ボストチヌイまではあとのくらい？」

「そうだな、あと300キロってところか。明日中には着くだろうよ」

「そう」

ボストチヌイに着いたあとのことなど考えていない。でも、ニコラスのような親切な人もいるのだ。きつとなんとかなる。

「そっぴゃ、お前さんの名前を聞いていなかったなあ」

「ソラ。私の名前はソラよ」

「ソラか。いい名前だな。ソラは今日は俺のトレーラーの助手席で寝な。意外と居心地がいいだよ。俺はこの椅子で寝るからよ」

「ありがとう」

世の中には悪い人がたくさんいる。幸せになれる人もたくさんいる。でも、こうやって手を差し伸べてくれる人もいるんだ。

花街を飛び出して初めて、ソラは少し幸せな気持ちで眠りについた。

『星をあげるよ』 北へ 3

言い争うような声で目が覚めたのは、夜もずいぶんとふけたころだった。トレーラーの脇でニコラスと他の男たちが言い争っているようだった。

「だから、ソラはそんな娘じゃねえ」

「馬鹿いうな。南の花街から逃げ出した遊女がソラって名前だ。ネットに出ている写真だってあの娘に違いねえよ。たいした金額じゃねえけど賞金首だ。それに、遊女だってんなら遊んじまってもいいんじゃないか？」

「だめだ」

「なに言っただニコラス、よい人ぶるんじゃないよ」

ネット？ 写真？ 賞金首？

何のことが分からず、ソラはついトレーラーの窓から顔を出してしまった。

「ソラ！ 逃げろ！」

ニコラスの声に我に返ったソラは、男達と反対側の扉をあけると外に飛び出した。

「待てこら！」

「やめろ！」

背後でニコラスと男達の怒鳴り声が響きあう。ソラは振り向きたいのを必死にこらえ、ただひたすらに夜の道を走った。そして、道沿いでは捕まるということに思い当たると、道をそれて草むらを走った。北へと向かう街道の両脇は深い草原で、草が体中に細かな傷をつけていったが、そんなことはかまわずに走った。

やがて、日が昇り、走ることができなくなると、草むらに倒れこんだ。

なんで、世界はこんなに私に冷たいんだろう。
涙があふれてきて、ソラは大声を上げて泣いた。ベルカ姐さん、

ルチャバあさん、世界を変えたいと思って飛び出てきたけれど、私はこんなにも世界に対して無力だ。

ソラの涙に呼応するように、空からしとと雨が落ちてきた。草むらの中で泣くソラは、もうこのまま消えてしまおうような気がした。結局、私はここまでなのか――

――おまえは本当に世界に立ち向かったの？

ふいに、心の中から声がした。

これは誰の声だろう。色々な人を思い浮かべ、そしてソラは気づいた。これは――私自身の声だ。そうだ。

私はすべてを外に求めてきた。ベルカ姐さんの死を理由にし、自分に客をとらせようとした母親を、遊女屋を理由にし、ルチャバあさんの言葉をたよりにして、私はここまでやってきた。でも、どこかに自分の言葉があっただろうか。常にだれかがどうにかしてくれと、そういう甘えがあったんじゃないのだろうか？

残り300キロ？ 上等じゃない。歩いてだってたどり着いて見せる。

宇宙への切符？ 奪ってでもいい、この体売ってでもいい、可能性のすべてを力に替えて私は生き抜いてみせる。

そして、私みたいな子でも、将来に夢が見られるような世界をつくろう。到達できなくても、それを目指して、自分の足で歩いてみよう。

通り雨だったのか、いつの間にか太陽が顔を出していた。立ち上がったソラの瞳に迷いはなかった。

『星をあげるよ』 交差

融資で得たキャッシュを大急ぎで飛行機とシャトルの切符に代えると、僕はイルクーツクを後にした。次に降りるのはポストチヌイ。ユーラシア大陸のはずれに位置する宇宙港だ。

宇宙に出るにはパスポートがいる。それは公然の事実だが、地球が経済圏として衰退して以降、それは大都市の大宇宙港でのみ適用される制度となった。パスポートは単なるセレブリティの証で、地方宇宙港では、シャトルに乗るのにそんなものを求められたりはない。そんなことで客をより分けていたら、地方の宙航会社はあがったりだからだ。

僕は、パスポートなしのシャトルのチケットを二枚買った。行き先は第五三宇宙ステーション ミヤコジマ。ここを経由して、我が名もなき惑星への旅路に入る予定だった。

ただ、その前に、ポストチヌイでパートナーをひとり見つける必要があった。

ナターシャが僕についてきてくれていれば、それが最高だったのだけれど、それはあっさり振られてしまった。今から電話をして宇宙の果てまで付いてきてくれるような友人にここらあたりはない。

「つくづく、今までの人生適当に生きてきたよな……僕」

人生の危急に際して相談できる友がいないとは。

惑星開発と一緒に手がけるパートナーがいる。それは銀行から融資を引き出すための方便だったわけで、これ以上の融資は凍結されるであろうことが決定的な現状では、無理に探す必要はないのだが——でも、地球からたったひとりで宇宙に飛び立つのは、なんだかとても寂しい。

できれば、この寂しさを分かち合える友が欲しい。

この期に及んで、僕はとんでもなく贅沢な望みを抱えて、ポストチヌイへと降り立った。

ボストチヌイ宇宙港は本当に小さな宇宙港だった。シャトルの発射は一日三便。行き先も、僕が行く ミヤコジマ か宇宙ステーション ペテルブルク かのどちらかしかない。今日中に発射するシャトルを選んだため、乗り換えの時間は三時間もなかった。

ひとの少ない宇宙港なかで、僕は途方に暮れていた。

こんなところでパートナーを見つけるって？ しかもビジネスのパートナーを？

さらに言えば、この宇宙港から出るシャトルは、ひとよりも物資を積んでいる量の方が多いのだ。

「ミヤコジマ が上がってから探すか……」

それでも僕はあきらめきれず、時間いっぱい宇宙港の中を歩き回ってみることにした。

一社分しかない受付カウンターを過ぎると、使われていないロビーの寒々とした風景が続く。シャッターの降りた受付カウンター、埃のかぶったベンチ、錆の浮いた謎のオブジェ。

そして、ロビーの突き当たりで、僕は彼女に出会った。

色あせて、クッションのスポンジが飛び出したベンチに、彼女は座っていた。

正直言って、酷い姿だった。

もとは真っ白だったはずの上品なブラウスは、裾がさけてぼろぼろになっていた。

長い漆黒の髪はほつれて、ぼさぼさになっていた。

頬はやつれ、唇は干からび、元は美人なのだろうけれど、それは見る影もなかった。

でも。

それでも、瞳は死んでいなかった。

今でも、僕はなぜ彼女に声をかけたのか、そのはっきりした理由を説明することはできない。

ただ、彼女だ、とそう思ったのだ。

僕のこれからの人生に光をくれる、いや、僕のこれからの人生は彼女に捧げるべきなのだと、直感的に僕はそう思ったのだ。

だから、われながら陳腐だとは思っけれど、僕は彼女に声をかけた。

「君に星をひとつあげるよ」

『星をあげるよ』 手

死ぬような思いをして、ようやくたどり着いたポストチヌイ宇宙港で、ソラは何かを待っていた。

いままでとは違う、だれかが助けてくれるのを待っているのではなく、獲物が掛かるのを待っていた。

だから、彼がソラに声をかけたとき、かつてニコラスに声をかけられたときのような感慨はなかった。

彼は、柔らかそうな金髪をした二十歳前後の若者だった。どんな理由でソラに声をかけたのか、単なるナンパか、哀れみか、そんなことはどうでも良かった。スキを見せるつもりはなかったし、求められて必要があれば、彼と寝ることだって厭わないつもりだった。

そう、これは第一歩。

私の人生はここから始まる。

だから、一瞬の躊躇もしなかった。

「貰うわ。見返りはなに？」

「僕はこれからその星へ旅立つ。なにもない、田舎の星さ。僕と一緒に旅をしてくれるのが条件だ」

「そんなこと、おやすいご用だわ」

ありがとう、とその青年は言い、すっと手を差し出した。

ソラはその手をしっかりと握った。

これはチャンス。

この手は決して離さない。

なぜなら、この手の向こうに、輝かしい未来が見えるから。

こうして、ソラの物語が、ようやくここに始まる。

《星をあげるよ
了》

『星の名前』

その惑星は、まっ暗な宇宙にポツンと浮いていた。
住む者もない、名前すらない惑星。

彼女のブラウンがかった瞳が、まるで吸い寄せさられてでもいる
かのように、惑星を見つめている。

「あれが君の星だよ」

「私の星……」

何の因果か、一緒になって宇宙に飛び出してきた行きずりのふた
り。

僕には僕の事情があり、彼女には彼女の理由があった。
そうして、辿り着いたのは宇宙の辺境。

「君が名前をつけるといいよ」

「名前……」

「そう。名前だ。これからこの星があり続ける限り、呼ばれ続ける
名前だ」

彼女は胸の前で小さく拳を握りしめた。

そして口を開く――

「星の名前は――」

『星の名前』 宇宙ステーション ミヤコジマ

「服を買いに行こう」

宇宙にあがってまず、僕は彼女にそう言った。

とある理由で地球から宇宙に逃げる必要ができた僕は、ポストチヌイ宇宙港からシャトルに乗り、ここ宇宙ステーション ミヤコジマへと辿り着いていた。とある理由というのは借金取り。親父の会社がつぶれて、僕まで借金取りに追われるハメになったのだ。僕は、手元に唯一残された田舎惑星の権利書を手に、宇宙へと飛び出して来たのだった。

で、目の前にいる彼女は誰なのかというところ——誰なのだろう。そう言えば名前を聞いていない。ありていに言ってしまうえば、ポストチヌイ宇宙港でナンパした行きずりの関係だ。

正直なはない、ひとりで宇宙に旅立つのは淋しかったのだ。両親はもちろん、大学の友人達にも付いてきてくれとは言えなかった。でも、ポストチヌイ宇宙港の片隅で、獲物を狙うような眼をして何かを待っていた彼女に、僕は魅せられた。捕食されたと言っても良い。いっしょに宇宙にいかないか、と声をかけ、そして契約は成立した。

時間もなく、ぼろぼろの服装のまま、僕の上着を羽織っただけの状態でシャトルに乗ってきた彼女だったが、さすがにちよつとまずいだろう。

「お金がないわ」

「ああ、もちろん買ってあげるよ」

「いくわ」

彼女が立ち上がる。それじゃあ、と僕は彼女の手を取ろうとして——顔を歪めた。

「いや、まずはホテルにチェックインしよう。で、シャワーだ」
「シャワー？」

「そう。女の子にこんな事を言うのは心苦しいけど、君、ちょっと臭いよ」

予算に余裕があるわけではないので、僕は彼女とツインの部屋をとった。次に乗る予定の宇宙船は明日出発する。

女の子とふたりでホテルに泊まる。本当ならもっとドキドキするはずなのだろうけど、彼女の汚れ具合に気が回ってしまった今、そんな気分にはさらさらなれない。

「あの」

バスルームに押し込んだはずの彼女が僕を呼ぶ。

「何？」

「使い方を教えてくれる？」

「何の？」

「この機械」

「機械って、バスルームのこと？」

「ええ」

—— いったい、どんな田舎で育ったのだろう。

はやまったか、と思いながらバスルームを覗いた僕は、一糸まとわぬ姿の彼女を見て慌てた。

「ちよっ、何か羽織ってくれ」

「……バスルームって裸で使うものでしょう？」

「……そうだね。悪かったよ」

彼女のあっけらかんとした振る舞いが逆に僕の羞恥心を駆逐する。僕はバスルームの操作パネルに近づくと、簡単に使い方を説明した。「いいかい、ここがシャワーの設定で、ここが湯張りの設定だ。これはボディースープとシャンプー。プログラムオートを使うと、立っただけでそれ相応に洗ってくれるけど、君は一度手でしっかり洗った方がいいね」

「分かったわ。ありがとう」

おずおずと操作パネルにタッチする彼女。一回の説明でちゃんと理解できているようだ。

僕はひとつため息をつく、バスルームを後にした。

それから、テレビを眺めながら一時間ほどが経過した。女の子は長風呂だな、などのんびり構えていたが、いくらなんでも長すぎるような気がしないでもない。それでも自信がもてず、さらに十分ほど時間を費やして、僕はなぜか忍び足でバスルームに近づいた。

「ちゃんと使えてる？」

「……」

返事がない。

「ちよつと、失礼するよ」

僕はゆっくりとバスルームに入る。微かなシャワーの音。ひとが動く気配はない。

あわててシャワーカーテンを開けると、湯船の中に彼女が倒れて———というか———寝ていた。

「ああ、このままじゃ風邪ひくよ」

僕はシャワーを止めると、彼女の肩を揺する。よほど疲れているのか、彼女が眼を覚ます気配はない。

しかたなく僕はバスタオルで彼女を包むと、なんとかかんとかベツドまで運んだ。眠っているひとひとり運ぶのは、それが小柄な女の子であっても難しい。

しかし、なんと痩せこけているのだろうか。

あばらの浮いた彼女の裸体は、なんだか見ていて切なかった。服の前に食事か、いや、服がなければ食事は無理か。などと、とりとめのない思考が頭の中をぐるぐる回る。

さらに一時間ほどして、彼女はゆっくりと目を覚ました。

「あ……私……眠って」

「疲れていたんだね。起きられる？」

彼女は頷いて上体を起こした。そして、裸の状態で寝ていたことに気付いてわずかに恥じらいをみせる。どうやら、寝ぼけている今の方が素のようだ。

「これから食事に行こう」

「服は……」

「ああ。とりあえず、女性ものの下着とワンピースをフロントに届けて貰った。気に入るかどうかはわからないけれど、ぼろぼろのあれよりはマシだろ？」

バスルームから持ち出してきた衣類籠には、彼女がさっきまで着ていた服が放り込まれている。

僕は彼女に真新しい衣服を渡すと、視線を窓の外へと逃がす。

「ありがとう」

彼女の言葉に振り向くと、そこには清楚なワンピースを着た彼女がいた。まだ痩せこけて痛々しくはあるけれど、それでも見違えてしまった。

「あの、このホテル代は……」

僕は手で彼女の言葉を制した。

「いちいち、お金のことを気にするのはなしだ。僕が君に出した案件は、僕と一緒にあの星まで旅をしてくれることだ。そこには、全ての代金は僕が出す、という条件も含まれているんだよ」

彼女の瞳が僕を見つめていた。

「それは、あなたの女になれということとは違うのね？」

「違う」

「そう」

「ああ、実際にはお願いしたい案件はいくつかあるんだけどさ」

「案件？」

「そう。ちょっとしたビジネスさ。そうだな、君は僕のビジネスパートナーだと思ってくれたらいい」

「ビジネスパートナー」

彼女の瞳が、なにがしかの力を得たように見えた。

「僕の名前はデニスだ。デニス・ローデンスキー」

「私はソラ」

「ソラ……」

「ええ。ただ、ソラ、とだけ」

ソラ。透き通った良い名前だと思った。

「なら、僕のこととはデニスと呼んでくれ」

「デニス」

わずかにソラが微笑んだ。出逢ってから、初めて見る笑顔だった。

「さて、食事に行こう。ここのホテルは海産物が美味しいらしいよ」

「宇宙なのに海産物なんておかしいわ」

「ちがいない」

『星の名前』 開発計画

宇宙に出るにあたって、僕はイルクーツクの銀行で金を借りた。僕はロシア貴族の末裔だ。それに惑星の権利書も持っている。惑星の権利書をちらかせて、銀行の担当者からシャトルの切符を買う予算を引き出したのだ。

ただ、それには条件があった。

ひとつは、僕のビジネスパートナーを紹介すること。もうひとつはビジネスプランを提示することだった。

銀行との約束は反故にしてもよかったのだが、融資に応じてくれた担当者セルゲイ君のためにも、最初の報告ぐらいはしておきたかった。

食事を終えた僕とソラは、宇宙ステーション ミヤコジマ のシヨッピングモールに繰り出し、ソラの普段着と、それからビジネススーツを買った。化粧品屋に入り、店の担当者に、ソラが健康的に見える化粧を施して貰った。

そうしてホテルに戻った僕らは、ホテルの通信ルームでモニターに対峙していた。

「セルゲイ君、約束通りビジネスパートナーを紹介する。ソラだ」
モニターの向こうで、イルクーツク銀行の融資担当者セルゲイ君が驚いていた。まさか本当に連絡がくとは思わなかったんだろう。
「これは、ローデンスキー様。早速のご連絡ありがとうございます」
「約束だからね」

「そちらは、ソラ様とおっしゃる。姓は……」

「同じだよ。従姉妹なんだ」もちろん嘘である。

「……そうですか。よろしく願います。ソラ様」
ソラが小さく会釈をする。ソラには何もしゃべらなくて良いと言っ
てあった。

「では、惑星M1157892の開発計画についての概要を……」

「セルゲイ君。開発計画の提出はひと月ほどの余裕があるのではなかったかな。ソラともじっくりと話し合って決めたい」

「書面はそれで結構ですが、とりあえず方向性だけでも示していただけですか？　そうでないと、正式な融資口座の開設はできません」

「そうは言われても、まだハッキリとは……」

セルゲイ君が微妙な表情をしている。

「幸せな星にします」

「？」

一瞬、誰がしゃべったのか分からなかった。もちろん、ここには僕とソラしかないのだから、それはソラの言葉でしかありえないのだが。

「その星は、誰もが幸せに暮らせる星にします」

「なるほど、具体的にはどのように。惑星M「57892」は、地球型惑星改造もまだ開始されていないと伺っております」

セルゲイ君、調べたらしい。

ソラが僕を見る。僕は、いずれ行つよ、と小声で言った。

「いずれ行います」とソラ。

「ですが、土壌改造、大気の組成改造などを行いますと、何十年もかかりますが……」

「それまでは勉強をします」

「勉強ですか？」

僕は、ソラとセルゲイ君のやりとりをはらはらと見守るしかなかった。正式な融資口座の開設はもともと期待していなかった。しかし、こうなるとソラの返答如何では違う結果もあるのかもしれないと思えてくる。

「まず、会社を興します。惑星の開発を行う会社です。そうして、色々な国や惑星の開発のお手伝いをします。それを将来、私の星の参考したいと思います」

「まず開発会社を……なるほど。しかし、そちらの惑星にひとが住むのはずいぶんと先のことになりますね」

「ひとは先に集めます」

「先に？」

「きつと、私だけでは幸せな星は作れません。ですから、惑星改造を始める段階から、幸せな星をつくる同土を集めます」

「ははあ、面白い発想ですね。それはつまりファンドということですか？」

「ファンド？」とソラが訊いてくる。

「利益が出たら分配することを前提に、投資を集める方法だよ」

「違います。集めるのは国民です」

「国民？」

僕はセルゲイ君と同時に驚きの声をあげた。

「あの……ソラ様は、失礼ですが国には何が必要なのかご存じですか？」

「……」

「土地が必要なのは勿論ですが、税金とか、戸籍とか、行政サービスとか……」

「全部やります」

「は？」

「住む土地は少し先になるかも知れませんが、行政サービスですか？ それは全てやります。そうして、星が完成するまで、どうしたら幸せな国にできるかを考えます」

正直、僕は開いた口がふさがらなかった。住む場所もないのに国民だけ集めるって？ 集めた国民は何処に住まわせるんだ？ 税金を集める？ 行政サービスを？ いったいどうやって？

しかし、それでもソラの言葉にどきどきと胸が高鳴っている自分がいた。

それは、モニター越しのセルゲイ君も同じようだった。

「……まあ、細かな話はおいおいつめれば良いのでしょう。ときにソラ様、その国には私も移住することができるのですか？」

「もちろんです。歓迎します」

ソラの笑顔はひとを惹き付ける。一方で、その瞳は獲物を捕食せんとする肉食獣の輝きをはなつこともある。

僕は、たった一日で、このソラという少女に完全に魅せられていた。

「ローデンスキー様、ローデンスキー様！」

「は、はい。なんでしょう？」

「結構でございます。融資口座を開きますので、そちらの支店に顔をお出してください」

「あ、ありがとうございます」

「それから」

「はい」

「お父様へはご連絡いたしております。その点をご安心ください」
「ははははは、そうですか。ありがとうございます」

なんとということだろう。

たった一日前、自分の味方はどこにもいないと思っていたのが嘘のようだ。

通信ルームを出た僕は、ソラに向かって手を伸ばした。

「ありがとう。君のお陰で助かった」

ソラは手を握り返してきたが、その眼は笑っていなかった。

「私は自分のための計画を話したわ。これは冗談なんかじゃない。本当に実行してみせる。だから、あなたも約束を守ってちょうだい」

「……約束？」

「星をひとつ、くれるんでしょう？」

「ああ、もちろんだとも」

『星の名前』 星明りの中で

それからのソラは凄まじかった。

惑星MⅡ57892に到着するまでの約半年、彼女はありとあらゆる勉強をした。

そして、イルクーツク銀行のセルゲイ君に約束した計画も本気のようだった。

ソラが語る理想の国は、夢見がちな少女のそれではなく、現実在即した実際のなものだった。

もちろん、それは簡単なことではない。

しかし、まるで宇宙の星々をエネルギー源にしているかのように、ソラは全身全霊をかけて勉強をしていた。

おそらくそれは、ほとんど語ったことのないソラの子供時代に根があるのだろうと思う。

ボストチヌイ宇宙港に辿り着くまでの16年間をどのように過ごしていたのか。

借金取りに追われることになったとき、僕はなんて厳しい人生を生きることになったのだろうと思ったものだけけど、ソラを見ると、そんなことは甘えでしかなかったことに気付かされる。

ソラはいつか、僕に子供の頃のことを話してくれるだろうか？

僕はいつか、ソラに追いつくことができるのだろうか。そうして。

惑星MⅡ57892への到着を翌日に控えたその日。

ソラが僕に言った。

「デニス。抱いてちょうだい」

宇宙船の船室は星明かりで満ちていた。

僕は自分の耳を疑い、思わず問い返してしまった。

「なんだって？」

「抱いてと言ったの」

「……なんでもた」

なんと僕は間抜け野郎なのだろう。

女の子が抱いてくれと迫ってきているというのに、なんでもくそもないもんだ。

しかし。

僕が知っているソラは、僕に惚れるような女ではない。

「これから先、色々なことが待っていると思う。私は、この身体全てを使って世界に対峙することを決めたの」

星明かりに佇むソラは恐いくらい綺麗だった。

あの、がりがりにやつれていた少女はもういない。

「話したことなかったけど、私娼婦の娘なの。16才になって初めて客を床に上げた日、蒲団に火をはなつて飛び出して来たわ……」

それは、ソラが初めてした昔語り。

二度としない昔語り。

「娼婦として母のように一生過ごすのは耐えられなかった。デニス、ポストチヌイ宇宙港で、私に人生の扉を運んでくれたのはあなたなの」

「……僕は運んだだけか」

「そうね。後は自分次第だった。私があそこであなたの手をとらなければおしまい。ここから先も、私は自分でひとつひとつ人生を切り開いていく」

「僕を好きでもないのに抱かれるの？」

「何を言っているの？　好きよ、デニス。あなた、もっと自信を持った方がいいわ」

ああそうか、と僕は分かってしまった。

ソラは僕に自信をつけさせようとしてくれている。

そしてソラは、僕を一生絡め取ろうとしている。

たとえば意識していなくても、それが最善だとソラは本能で理解し

ているのだ。

——なんというか、敵わないよな、実際。

でも、これはきつと幸運なことなんだろうと思う。

それに、据え膳喰わぬはなんとやらだ。

「なら、お言葉に甘えて」

「デニス、ちつともムードがないわ」

ソラ。

君の口からムードなんて言葉が出てくるとは思わなかったよ。

銀河の星々が嫉妬するほど、その日のソラは美しかった。

『星の名前』 星の名前

船窓から見た惑星M「57892は何ともさえない星だった。

僕は惑星を指さしてソラに言う。

「あれが君の星だよ」

「私の星」

「君が名前をつけるといいよ」

「名前……」

「そう。名前だ。これからこの星があり続ける限り、呼ばれ続ける名前だ」

彼女は胸の前で小さく拳を握りしめた。

そして彼女は言葉を紡ぐ。

「星の名前は——ベルカルチャ」

とても大切そうに。

とても愛おしそうに。

彼女はその名前を口にした。

「ベルカルチャ？ それはどついう意味？」

「お姉さんのように、先生のように……そついう意味」
「？」

なにか僕の知らない言語だろうか。

こうして惑星M「57892は命名された。

——惑星ベルカルチャ

後に奇蹟の星と呼ばれる名前である。

《星の面前》了

『星の名前』 星の名前（後書き）

ここまでお付き合いいただいたみなさま、ありがとうございます。
書き溜めたネタがひとまず尽きました。今後も続ける予定ですが、
しばし更新ストップということで、よろしく願います。（夏乃
市）

『星の子供たち』

この世界は広い。

宇宙はどこまでも果てしなく続いていて、その中に、数え切れないほどの星々が散らばっている。

星々の上には、様々な環境があつて、生命を育はぐくんできるところも多いだろう。

その生命——？命？は、すべてが平等で尊いものだという人たちがいる。人も虫も鳥も植物も、すべての命はかけがえのないものだ、と。

かけがえのない、という点については同意する。でも、平等に尊いってというのはどうなんだろう。

人とそれ以外に分けられる、なんていう意味ではもちろんない。

すべての命は——この広い世界の中では平等ではいられない。尊くて、かけがえのないものであつても、平等ではない。

運の良い命があつて、運の悪い命がある。

それは命の、生命というものの本質で、だからこそ、この広い世界に命は広がり続けているのだらうと思う。

生まれた時点では、どの命にも同様のチャンスがあるって？

そんな綺麗事は聴きたくもない。

世界による淘汰というふるいの網の目が同じでも、最初の立ち位置の如何で、ひっかかるかすり抜けるかは概ね決まってしまうものなのだ。

自分が網の目をすり抜けてしまった運の悪い命であることを、私は7歳で悟った。

宇宙船寄生児（パラシティック チルドレン オン スペース シップ）という言葉を知っているだろうか？ 略してPCSと呼ばれ

ることも多いが、それが社会問題になることはほとんどない。なぜかって？ だって、どこの星の政府も、それを自国の問題だと認識していないからだ。宇宙を行き交う宇宙船の中でなにが起きていようと、自国の不利益にならない限りは気にもとめない。

P C Sになるのは、ほぼ百パーセント宇宙港に捨てられた子供たちだ。

人の生活圏が宇宙に拡大した現在は、宇宙港に置き去りにされた子供たちが親に再会できる確率はゼロに近い。まず間違いなく、親はその宇宙港からどこかへ飛び立ってしまっているからだ。

宇宙港で見えられた捨て子は、本来ならその港が所属する国の施設へと送られるべきものだ。しかし、衛星軌道上に位置することの多い宇宙港からでは、地上の施設に子供を送るだけでも金と燃料と空気がかかる。だから、よほど身元がはっきりするものを持っていない場合を除いて（そんな子供は捨て子とはいわないが）、その子供たちは秘密裡に処理される。

命まではとられない。しかし、とられないというだけ。子供たちは格安で、非合法に、宇終船に売られる。それがP C S。宇宙船寄生児だ。

P C Sになった子供たちのあつかいはひどい。正式な船員として登録される訳ではないから、給料などもろろんない。かろうじて生きていくだけの食料が与えられるだけだ。どこの星の国籍もないから、人権なんてありようがない。

そして、子供の使い道はいくらでもある。

宇宙船の基本をたたき込んで育てれば、格安の船員の出来上がり。見目がよければ、客室コンパニオンをやられさせてもいい。なにしろ物心ついたときには宇宙船に乗っていることになるのだから、現状に対する疑問をいだかない従順さがP C Sの売りだ。

まれに、乗客に酔狂な御仁がいて、気に入ったP C Sを買っていただくこともある。そんなときは、船側はせいぜいふっかけて大金をせしめれば良いという寸法だ。

そうして。

かくいうわたしもPCSだった。

はつきりはしないのだけれど、物心ついたら宇宙船に乗っていた。最初の記憶は、船窓から眺める宇宙の星々だったように思う。そのあとが、同じベッドに横たわった脂ぎった豚やロウ。

わたしのどこが人に氣に入られるのか、それこそ貴金属をやりとりするように、わたしは頻繁にとりひきされた。

成金の豚の愛玩動物になり、病んだ貴婦人の人形になり、どこぞのドラ息子玩具になり――そうしてわたしは、これがわたしという命なんだな、という悟りの境地に7歳で到達した。

何番目の宇宙船の時だったか、船員のひとりがわたしに言ったことがあった。

「この宇宙は平等で、命はかけがえのないものだ。おまえの命も、俺の命もな。だからつらくてもしっかり生きる」

なんというか、クソくらえだ！

あとで知ったことだけど、PCSとしてのわたしの来歴はもちろん酷いものだけど、でもひとつだけついていたことがあったのだ。それは、かなり早い段階で教育を受けていたことだった。

後々、他のPCS出身者の話を聞いたところ、ろくな教育を受けさせてもらえず、ただただ小間使いとして働かされた子供たちのなると多いことか。

わたしが幸運（この言葉を使いたくはないけれど）だったのは、最初にわたしを買った船が、富裕層向けの娯船で、学のある子供好きの客が多かったことだった。

物心ついてしばらくして、強制学習機にたびたび放り込まれたわたしは、主に文学や芸術をたたき込まれた。ある程度の歳になると、

お抱えメイドとしての素養と言うことで、宇宙船の操縦から情報処理技術、はては料理まで、ありとあらゆるものを機械的に詰め込んでいった。

正直、勉強は苦痛以外の何者でもなかったけれど、ベッドの上で披露する知識の断片が金持ちの豚どもを満足させていたことだけは確かだった。

今でも思う。人形に知識を与えることにメリットはなかっただろうに、と。知識があれば余計なことを考え始める。PCSとして従順である必要があるのに、知識がそれを邪魔するようになる。なぜ、わたしの持ち主たちは、それでもわたしを強制学習機に放り込んだのだろう、と。

なにも考えていなかった、というのがたぶん正解。自分の趣味をわかってくれる人形がほしい、という顧客の要望に、わたしの持ち主が対応した結果。

その果て。

13歳になったわたしは、人生最悪の出会いを迎えた。

その男の最初の印象は、ずいぶん野暮ったいな、というものだった。今まで相手にしてきた金持ちとは違う、うだつのあがない風貌だった。

当時乗っていた宇宙船の一等船室で、男は部屋の鍵を入念に確かめた後、小声でわたしに質した。

「いままでに使った強制学習機の科目を教えてくれ」

時々聞かれることだから、わたしはすらすらと答えた。

「……そうか。君に、仕事を頼みたい」

「はい。衣装はどうします？」

「え？……ああ、違う。そうじゃない」

男は真っ赤になって即座に否定した。

「そういう仕事じゃないんだ」

「？」

「この船に、60歳くらいの白髪の男が乗っているだろう？ あの男の部屋からあるものを持ち出してほしいんだ」

その男が指摘した白髪の男は、時々見かける客だった。しかし、わたしは相手をしたことはなかった。

「いいかい。あの男がいつも持っている携帯端末の中にあるファイルをコピーしてきて欲しい」

「携帯端末？」

「方法は任せる。君の教養なら男が気に入るのは目に見えている。加えて、情報処理技術もある。もし成功したら……君をこの船から自由にしてあげよう」

今まで、そう言ってわたしを買ったあげく、結局他の宇宙船に売ってしまった野郎どもがどれほどいたことか。

「自由ってなんですか？」

「好きなところで好きに暮らせることさ。それだけの成功報酬を出す」

「あなたと一緒に暮らすの？」

「まさか。君は本当に自由になるんだ」

結局のところ、わたしはまだ小娘だったってことだ。世界の仕組みに諦観の念を抱いて、わかったような気になっていたのに、この男の甘い言葉に乗ってしまった。

わたしは白髪の男にモーションをかけ、まんまと部屋に入ること成功。存分に男を満足させた後、男の携帯端末から指定された情報を抜き取った。なんとも、あっけないほど簡単な仕事だった。

あの男は、わたしから受け取ったデータを早速にどこかへと送信した。そうして、にやりといやな感じに笑うと、アタッシュケースに詰め込まれた現金を差し出した。

「報酬だ」

「……」

「じゃあ、わたしは行く。船長には話をつけておくから。次の寄港

地で降りたらいい」

アタツシケースの前で呆然とするわたしに言いおいて、男はふらふらと一等船室を出ていった。しばらくするとかすかな振動が部屋を揺らし、船窓の外を緊急脱出用の救命ボートが流れていくのを見た。

マネーカード全盛のこの時代に現金の束――

わたしはなにか大変なことをしでかしたのでは？　と思った時には既に遅かった。

突然、船内に銃声が響き、かけつけてみると例の白髪の男が自分の眉間を打ち抜いていた。

呆然としている間に宇宙船はこの所属とも知れない武装した船に包囲され、むりやり係留された宇宙港で、わたしは黒服の厳つい男たちに組み敷かれることとなった。

どうやら、白髪の男は政治家だったらしい。わたしが盗ったデータは、彼が長年あためていたクーデターに関する、同調者たちのリストだった。逃げた男は、おそらく政敵の工作員だったのだろう。クーデターの発覚は余りにも迅速で、仲間から連絡を受けた白髪の政治家は自ら命を絶った。遊行中の彼を陰ながら守るはずだった黒服の男たちは泣くに泣けず、わたしが乗っていた娼船を拿捕して遺体を回収し、怒りの矛先をわたしに向けるしかなかった。データの流出に関する罪を正式に問うなどということはもちろんなく、国籍もないPCSに対して、奴らが容赦なんかするはずもなかった。私が乗っていた娼船がどうなったのかはわからない。でも、わたしを人身御供にすることで、なんとか言い訳をたてたのではないかと思う。

さんざんぼろぼろにされたわたしは、身ひとつでどこだかも知らない宇宙港に放り出された。正直、なんで命が助かったのが今もってわからない。わからないけれど、でも、わたしは初めて、金銭での売買以外の方法で船を下りることになった。

あいつが言った自由ってやつが、さんざん痛めつけれるという代

償とともにやってきた格好だ。

しかし、なんのことはない。結局、こんどは自分で、寄生する船を探すしかなかった。何故って、それ以外の生き方なんて知らないのだから。

なんなんだろう、いったい。

わたしの命はかけがえがないって——この運命からは抜けられないって、そういう意味なのだろうか。

わたしは16歳になっていた。宇宙船の下働きをして、船員に隠れてこっそり客をとる。そんな生活をしていた。

「あなた、名前は？」

あるとき、わたしは、20歳そこそこの女性に船内で声をかけられた。漆黒の黒髪に妙に鋭い眼光の持ち主だった。目を付けた男に誘いを断られて、今日は客はとれないかな、などと思っていたときだった。

「デューアよ」

まず名前を聞いてくるのは珍しかった。そもそも、わたしたちは個人として認識されることが少ないのだ。彼女は自身も名乗ると、わたしに何が得意かと訊ねた。

「なんでも。大概の性癖には対応できるわ。女同士もOKよ」

「……他には？」

「ほか？ そうね。ハッキングを少々かな……」

数年前の苦い事件が頭をよぎる。正直、体以外のものを要求してくる相手は信用できない。

彼女はわたしを上から下までなめるように見ていた。

「あの、用事がないならよろしいですか？」

「これ、あなたの意見が訊きたいの」

彼女が差し出したのは、小さなデータチップだった。

「意見、ですか？」

「ええ。意見をちょうだい。期限は三日。この船が目的地に着くまでに。お礼はするわ」

それだけ言うと、彼女はきびすを返した。正直、狐につままれた気分だった。手の中の小さなデータチップ。わたしはそれをもてあそびながら、自分の小さな個人スペースへと引っ込んだ。

データチップの中身は、わたしが想像もしていなかったものだった。

「宇宙横断住民管理システム？」

そこにあつたのは、とある新興惑星の住民管理システムの基本骨子だった。

「これをわたしにどうしろと……」

何かの間違いか、それとも人違いか——でも、彼女はわたしの名前を聞いた。人違いはありえない。

そして、データを読み進めたわたしは、さらに困惑を深くする。

いまだ地球型改造の終わらない惑星^{テラフォーミング}。住むところがないのに国民だけを集めようとしている——？

これは——その国民のための基幹システム——

しかし、問題点は明らかだった。既存のネットシステムを使って宇宙規模でこれを運用すれば、運用費だけで国がかたむく。

「そうか。これはフィクションか……」

わたしはベッドに身を放り出した。きっと、彼女は作家なのだろう。それならば納得もいく。面白い設定を思いつきはしたものの、その解決策がみつからなくて他人の意見を聞きたいのだろう。わたしはちよつと面白くなってきた。

お話ならば、真剣に考えてみてもいいのではないだろうか。

どんなに荒唐無稽でも、実際にやるわけではないのだし。

それから三日、わたしはいつもの客をとることもせず、このお話づくりに夢中になった。

「さて、どうだったかしら？」

黒髪の彼女が再びわたしに声をかけてきたのは、宇宙船が目的地につく3時間ほど前だった。

待ってましたとばかり、わたしは彼女にきいづく。

「考えましたよ」

「あら、それは楽しみ。食堂でお茶でもしながら聴きたいわ」

「望むところです」

食堂のテーブルの上で、わたしは自分の携帯端末からデータを広げた。なけなしのお金で手に入れた、型の古い端末だ。

「宇宙横断住民管理システム……これの最大の問題はインフラのラニンングコストです。こんなものをまともに運用したら、いくらお金があっても足りません」

彼女が小さく頷く。

現在のネットワークシステムは大きくふたつに分かれる。

個々の惑星上にある小規模ネットワークと、大規模星間ネットワークだ。星間ネットワークの運用には大出力のハブシステムが不可欠で、接続には相応の費用がかかってしまう。

「なので、この場合は、専用の回線網を新たに作ってしまうことを考えた方がよいと思います」

「専用の？ でもそれこそ莫大なお金がかかるでしょう？」

ちつつちつつ、とわたしは顔の前で指をふった。

「そこは、既存の設備を使うんです」

「でも、既存のネット回線はコストがかかると……」

「ですから、既存のネット回線とは別の、既存の設備ですよ」

「？」

わたしはちよつともったい付けてみた。彼女の眼がわたしにひたと据えられている。

くいついてる、くいついてる！

「それは、宇宙船の緊急用通信回線です」

彼女の雰囲気が変わった。瞳が肉食獣のような輝きを宿す。

その反応に勢いを得て、わたしはまくし立てた。

「宇宙船の緊急用回線は通常あいています。でも、実はあまりに使われなさすぎて、緊急の時にまともに繋がらないの知ってます？

なので、まずは緊急用回線のメンテナンスと言う名目で、常に回線状況を確認する会社を立ち上げるんですよ。そうしたら、こちらが使用料を払う必要もなく、むしろお金がもらえてしまうかもしれません。そして、肝心の住民管理システムですけど、これは回線チェックのデータに上乗せしてこっそり運営するんです。ここに、ほら国民がまだ数百人とあります。この程度なら、しっかりセキュリティかければ、なんの問題ありませんし、いざってときに緊急通信の邪魔にもならないでしょう。窓口だけを通常の回線に繋ぐようにすれば、運用上の使い勝手もいいでしょう」

彼女は黙っていた。

「さらにいえばですね、この惑星は根無し草の宇宙船乗りに訴求力が強いと思うんですよ」

まだ人の住めない惑星。

国民は、それぞれ飯の地に住まざるを得ない。

それでも、システムを運用して、それらの人々を国としてまとめあげる。

もしかしたら、緊急回線に滑り込ませなくても、宇宙船乗りたちは、率先してシステム回線の構築を手伝ってくれるかもしれない。

作り話であっても、それはすてきなお話だ。

「どうです？ 面白い小説書けそうですか？」

「え？」

わたしの言葉に、黒髪の彼女はちょっと虚をつかれたような顔をした。それから、ふっと柔らかく笑う。

「これは作り話ではないわ」

「え？」

「わたしが本当にやろうとしていることなのよ」

ざわざわ、と血の気が引くような音が耳の奥で聞こえた。背筋を電流のようなものが走り抜ける。

突然色を変えた世界の中で、黒髪の彼女が立ち上がり、わたしに近づいてくる。

「わたしはね、誰もが幸せになれる国が作りたいの」
「すべての命は平等ではない——」

「現実がそんなに甘くないことはわかってるつもりよ。でも、だからってあきらめるつもりもない」

そんな綺麗ごと——恵まれた人間の言いぐさだ——

「ねえ、ディーア。わたしに力を貸してくれない？」

「でも……PCSのわたしなんか……」

彼女は腰を屈めると、わたしと眼を合わせた。

「そうやって、無理に括るのはやめましょう」

「……」

「どう生きて、何をなすかは、生まれや育ちになんて左右されない。わたしは今、国を作ろうとしているけれど、生まれをいっただら、地球の、娼婦の娘よ」

命は——

「みんなが幸せな世界。それはね、誰もが自覚的にそうあるとする世界なのだと思うのよ」

「ひとつ訊いていいですか？」

もちろん、と彼女は頷いた。

「なぜ、わたしにあのデータを渡したのですか？」

「ああ。ごめんね、特別あなただけに渡したわけではないのよ」

——なるほど。手当たり次第というわけか。

「でも、あなたの案は抜群だったわ。だから、このお願いをするのは、あなたがディーアだから。わたしの手伝いをしてくれない？」

わたしの荒唐無稽な案を、本当に実現しようというひとが目の前にいる。

彼女は初めて、わたしをひとりの人として、デীアという個人としてみとめてくれている。

おそらく彼女はとてつもない夢想家で、理想主義者なのだろう。でも、それを現実にしようとする行動力がある。

「わたしは……命は平等ではないんだって、7歳のときに悟ったんです」

「そうね。スタートは決して平等ではない。だからこそ、誰もが目指せる平等なゴールを作りたいの」

これが、わたしとあの人との出会い。

さすがに、13歳のときのわたしのように、諸手を挙げて話に乗ったつもりはない。

でも、わたしは夢を見てしまった。

彼女がめざす新しい国が、わたしのようなPCSすべての受け皿になってくれるのではないかという夢を。

そして、わたしが彼女を手伝うことで、それを実現できるではないか、という夢を。

だから、わたしは彼女の申し出を受けることにした。

世界と対峙し、夢を語り、全てに臆することのない人――

のちに、星の女王 と呼ばれることになる人についていくことにしたのだ。

人として生まれたにもかかわらず、人として扱ってもらえない運の悪い命たち――

星の子供たちのために。

《星の子供たち 了》

『星の涙』 #1

——はい、みなさんお元気ですか？ いつも元気いっぱい、銀河ミュージックチャンネル3、DJのイオナ・アーナスです。

ねえ、みなさん聞いてくれます？ 昨日の晩、今日に備えて早々にベッドに入ったところで、親友から通信が入ったの。いやな予感のはしたのよね。でもほら、無視するわけにいかないじゃない？ で、いかにも寝てました風の声を出して通信にでただけ……案の定、彼女は彼氏にふられたって泣きついてきたの。彼女のグチは2時間ぐらい続いて、今日のわたしはとっても寝不足。わたしの声、今日はちよつと張りがないかもしれないけど、親友の失恋に免じて許してくださいね。

さてさて、ここから三時間、惑星ネオ・ニューヨークのスタジオからイオナが素敵な音楽と楽しいおしゃべりを銀河の隅々までお届けします。あなたとイオナと音楽はいつも一緒よ。

では、今日の一曲め。いま人気急上昇中のナンバー。彗星のごとく現れた歌姫シエラ・ストームの「星の涙」をお届けします。

あなたの想いは、届いていますか？

♪宇宙のしじまにひとりたゆたい

永遠にも似た時の波間で

なにを想って

なにを求めて

あなたはまわり続けるの？

公転軌道は未練の軌跡

思うにまかせぬ無限の軌道

ねえ、教えてよ 誰か、教えて
伸ばしたこの手が 溢れる想いが

愛しいあのひとに はるかなあの世界に
届く日がくるのでしょうか？

悠久のこの宇宙^{そら}で
星たちは今日も手を伸ばし
そして切なく あふれる輝きが
星の——星の涙

時間^{とき}のまにまに身をまかせて
尽きぬ想いを胸にかかえて
誰を想って

誰を求めて

あなたはまわり続けるの？

自転速度はついえぬ葛藤

止まることない夢幻の奇跡

ねえ、教えてよ 誰か、教えて
紡いだこの歌が 溢れる言葉が
まだ見ぬあの人に 夢見たあの世界に
届く日がくるのでしょうか？

那由多^{なゆた}の星たちが
今日も彼方を見つめてる
そして哀しく こぼれる燦めきが
星の——星の涙

『星の涙』 調査

小型の惑星調査船の中で、ベルカルチャ惑星開発会社のステイーとデイーアは資料にくぎ付けになっていた。

「ずいぶん長い間手つかずだったようですが、ここにきて急ぎの地球型惑星改造を行うことになったのはなぜですか？」

水色のスーツをそつなく着こなした、いかにも優男な風体のステイーが言った。明るいブラウンの髪をさりげなくかきあげる仕草も堂に入っているが、向かいに座っているのが六十がらみのさえない男とあつては、なんとも滑稽だ。

「まあ、正直な話、当方の会長の気まぐれってやつです」

「気まぐれですか？」

「ええ。ずいぶん昔に惑星の権利を購入したときだつてそうです。

今回は、ご自分が引退する前に開発に着手したいのでしょう」

「失礼ですけど……ご自分の会社の会長さんをそんな風に言っているのですかあ？」と、今度はデイーアが口をはさむ。

「はあ……」と、男はピンクのレディスーツに身を包んだデイーアに眼を移した。「こんな場所では誰も聞いていませんからね」

「……とすると、別に惑星そのものに問題があつて放置してあつたわけではないんですね。あくまでも御社内の方針の問題だった」とステイー。

「もちろんです。私は専門家ではありませんが、地球型惑星改造を行うのに特段の問題はないと聞いています」

「見えてきたわ」

デイーアが船窓に眼を向ける。調査船は、星々の海の中をひとつの惑星に近づきつつあつた。ベルカルチャ惑星開発会社が開発の見積りを依頼された星、その名は惑星ペルキスといった。

惑星ペルキスは、デトナ星系第二太陽系の第五惑星である。デトナ星系には四つの太陽系が存在し、六つの有人惑星が存在している。

最も栄えているのは、第一太陽系の第四惑星デトナ？。星系内では一番早い時期に入植が開始され、精密工業と宇宙船のハブ基地としてその地位を確立した。それを率いたのが、現在星系内の五つの有人惑星の地権を所有している、デトナ精密工業社を筆頭としたデトナグループである。そのデトナグループが、星系内で七番目の有人惑星に仕立てあげようとしているのが、惑星ペルキスである。

ベルカルチャ宇宙開発会社にデトナグループの惑星開発担当課長と名乗る人物から連絡が入ったのは、遡ること十日ほど前のことだった。曰く、開発は非常に急を要している。ついては、可能な限り早く現地に赴き、開発にかかる費用の見積りと、開発計画の立案をお願いしたいとのことだった。

ベルカルチャ宇宙開発会社は、銀河辺境の惑星ベルカルチャを拠点としている。社長はベルカルチャの女王籍を持つソラ・ベルカルチャ。副社長は惑星の地権者たるデニス・ローデンスキー。スタッフはステイーとディーアを筆頭に、約十名ほど。会社の実績は名実ともに十分あるのだが、いかんせん小規模だ。通常の業務は、地元業者の協力を得てなんとかこなしているのような状況だ。そんなベルカルチャ惑星開発会社が地元業者を探す間もなく、とにかく見に来てくれとデトナグループはせっついてきた。ベルカルチャ側としてはその性急さに多少の疑念を抱かないでもなかったが、結局、資料も船もこちらで用意するからというデトナグループに押し切られてしまったのだった。

ベルカルチャ惑星開発会社としては別の問題もあった。社長と副社長が、惑星代表としての公務のために不在にしているのだ。ふたりがいなければ仕事ができないほどヤワなスタッフたちではないが、案件が大きいだけに、最終決済権をもつふたりがいけないのは問題だった。しかし――

「ステイーとディーアで見てください」と、社長のソラが通信機越しに気軽に言ってきたものだった。「最終的な判断は私がデニスがするにしても、見積りならあなた達で十分でしょう？」

「はい！」とディアーアがうれしそうに答え、「はあ」とステイーが頼りなさげにつぶやいた。

その結果、二人はいま惑星調査船に乗っているのだった。

「ここから一番近い有人惑星はどこですか？」

ステイーの問いに、男――デトナグループ惑星開発担当課長たるレゼット・モンスが一瞬考え込んだ。

「ええと……第一太陽系のデトナ？ですかね」

「頼りない答えですが大丈夫ですか？」

「年をとるとね……頭の回転が遅くなっていません」

ステイーは、デトナグループから提供された資料に目をおとした。「ではベース基地をデトナ？に設置して、最前線基地をペルキスの衛星軌道上に設置することになります。実際に投入する大気組成改良剤や土壌改良剤については、惑星の組成を確認して……」

「ああ、それならここに調査資料があります」

レゼットが端末上に資料を示す。

「……」

ステイーとディアーアが顔を見合わせた。

「あの、何か？」

「あのですねえ、デトナさん」ディアーアがあえて社名でレゼットに詰め寄る。「資料は最初にすべて出して下さい。これだけ揃っているなら、わざわざ私たちがここまで来る必要なんてなかったんですけどぉ？」

「え？ そうなんですか？」

「そうですよ。見積りだけなら資料からだけでも十分くれるんです。お急ぎだったんでしょ？ なら、この移動時間だってもったいなかったんじゃないですかぁ？」

「……」

レゼットが情けなさそうな顔をした。「で、では……」

「はいはい、すぐに見積り作業にはいります。ただ、この仕事を弊社で受けるかどうかはこの場ではお答えしかねますが、それでいい

ですね？ 加えて、お受けしない場合でも、調査料と見積り料は発生しますがご了承いただけますね？」

ディーアが勢い込んでまくし立てる。

「も、もちろんです。はい」

ステイーとディーアは顔を見合わせて肩をすくめた。

この顛末、どうやって社長たちに報告したものだろう。

『星の涙』 #2

——さて、今日は素敵なゲストをお迎えしています。「星の涙」が大ヒット中のシエラ・ストームさんです。わー、ぱちぱちぱち。

——はじめまして、シエラです。

——イオナです。今日はよろしくお願いします。

——わたし、イオナさんの放送ずっと聴いてました。お会いできるのをすごく楽しみにしてました。

——本当ですか？ 嬉しいです。ええと、まずはシエラさんの経歴を簡単にご紹介しましょう。ご出身はデトナ星系の惑星ポルキア。小さい頃から歌が上手で、六歳のときにデトナ音楽祭ジュニア部門で最優秀賞を受賞。その後、地元でライブ活動などをつづけていらつやって、十六歳のとき——これは昨年ですねえ——「コリーズ宇宙放送主催の新人発掘キャラバンの最優秀賞を「星の涙」で受賞。その後発売された同曲の大ヒットはいまさら説明するまでもありませんね。

——ありがとうございます。なんだか自分のことじゃないみたい。

——つぶふ。受賞についてはあちらこちらでさんざん訊かれましたので……どんなお子さんだったのか、なんてところからお伺いしたいと思います。

——引っ込み思案の泣き虫でした。

——あら、意外。

——いまもあんまり変わりません。惑星ポルキアはデトナ星系でも田舎なんです。引っ込み思案でも、人口密度が低いので、草原とかで誰はばかりことなく歌ってました。

——そんな素朴な女の子が、いまや歌姫ですよ！ 今日はこのあと、大変なお仕事があるんですよね？

——そうなんです。実は……

『星の涙』 星系代表者会議

惑星ネオ・ニューヨーク。

首都セカンド・ワシントンの中心にそびえ立つ国際宇宙会議センター。その大会議場入り口脇の大型表示板には「ようこそ星系代表者会議へ」の文字が躍っている。しかし、大会議場の中を覗くと人影はまばらだ。

「いいかげんにして欲しいわね……」

大会議場に隣接する控え室棟の一室で、惑星ベルカルチャ女王のソラが言い捨てた。ここはベルカルチャ代表団に割り当てられた部屋だ。ソファが四人分とテーブルがひとつ。いまはふたりしかひとがいないにもかかわらず、息苦しさを感じるほど部屋は狭い。

「こちらがしびれを切らすのを待っているんだよ」

部屋の隅に申し訳程度に設置されたシンクに立ったデニスが、グラスに氷を入れながら言った。「星系連合軍　なんて……地球勢力に対抗したいのかね」

「いまさら、そんな時代遅れのSFみたいなことは考えないでしょう。地球が単なる一辺境惑星だってことは、私たちが一番よく知っているじゃない」

「そりゃそうだ」

デニスはグラスをソラの前に置くと、自分もソファへと体を埋めた。

「仮想敵はこれから出てくる新興国家つてところでしょうね。現状の利権を遅れてきたひとたちには与えたくないんでしょ。……ちよつとデニス、これ濃すぎない？」

ソラがグラスを目の前でくゆらす。

「その程度の水割りでどうにかなる君じゃないだろう？」

「それはそうだけど、会議がいつまで続くかわからないんだから……ゲランが戻って来たら大目玉だわ」

ふたりとともに会議に参加しているゲラン宰相は、他星系との調整のために事務官を連れて飛びまわっている。

「会議の再開までにはあと45分ほどある。それを飲んだらひと眠りした方がいいよ。宰相だつてきつと同じことを言うさ」

「そうかしら。……アルコールで入る眠りはあまり体に良くないのよ」

「でも、何もしないには休めないだろ？」

「……」

ソラの返事はなかった。ソファの上で目をつぶってぐったりしている。

「……君に睡眠薬を盛れるのは俺くらいだろうな」

デニス自嘲気味に苦笑すると、眠るソラの手からそつとグラスを取った。

「でも、起こした後が怖いな……」

惑星ベルカルチャ代表としてベルカルチャ王国女王ソラ・ベルカルチャと地権者デニス・ローデンスキーたちが参加している 星系代表者会議 の歴史は、人類の宇宙進出の時分にまで遡る。

当初の目的は星間通商に関する話し合いだった。国という概念が地球上の区分けされた地域から、惑星そのものに移った時代、交易の慣行も一から決め直さなければならなくなったのだ。

長い年月をかけて、惑星国家間の交易は慣習がかたまっていた。それに併せるように、人類共通の星歴換算で毎年行われている 星系代表者会議 は政治的色合いを濃くしていく。銀河を股にかけて人類同士が化かし合う場所、それが会議に対する現状の正しい認識となっている。

そして今回、惑星ネオ・ニューヨークを首惑星とする拡大星系アメリカ（エクспанテッド スター システム アメリカ：通称ESA）の提案が、会議を紛糾させていた。

星系連合軍——それがESAの提案だった。星系代表者会議に参加している国々で連合軍を組織しようという提案である。

紛糾の最大の理由は、何に対して軍隊が必要なのか、という問題だった。星系代表者会議は、基本的に人類が住んでいる全ての星系の代表者が集まっていることになっている。強制力はないものの、会議に参加しなければ交易上不利になる可能性が高いため、参加を拒む理由はこの星系にもない。つまり、全てがここで一堂に会していて敵対勢力などいないはずなのにもかかわらず、軍隊などを設けなければいけない理由がわからない、というのだ。

ESA側は、軍隊組織は平和利用のためにこそ必要だと言い張った。ESA代表は会議の質疑で、遅すぎたくらいだ、とまで言ったものだった。

対して、強行に反対意見を表明したのは惑星ベルカルチャ代表のソラだった。新興星系の代表格という自覚の強いソラは、星系連合軍は利権の温床にしかならず、人類の発展を阻害するものにならなないと主張した。ソラの主張は、地球上の国家を祖にもたない比較的新しい星系代表達に支持された。

ESAとしても、会議参加星系の半分程度での連合軍結成は本意ではないらしく、会議は平行線のまま、堂々巡りの様相を呈し始めていた。

「睡眠薬を飲ませたことは謝るよ」

「……私もそれに気がつかないなんて、よっぽど頭に血が上っていたのね」

短い休憩を挟んで会議は再開されていた。

反対派の急先鋒たるソラだったが、いまは各星系の主張に耳を傾ける余裕を取り戻している。

「ねえデニス、私が眠っている間に判ったことってある？」

「参加星系がどちらの主張に賛同しているかの大まかな調べがついたよ」

デニスの柔らかそうな金髪が、ソラの黒髪に近づく。携帯端末の表示を、ふたりは頭で隠すようにして覗き込む。

「ふーん。微妙な割合ね。でも、多数決でどうこうするものでもないわよね」

「まあね。ESAはこの休憩時間にも精力的にロビー活動をしていたみたいだよ」

「ESAのロビー担当者は、陛下が出てこないことに随分驚いていました」と、宰相の格蘭・ジタールが口を挟んだ。

「……それは、デニスのせいよ。私は精力的に動くつもりだったんだから」

「いえ、デニス殿下の判断は適切だったと考えます」

「どういうこと？」

ソラが格蘭の目を覗き込んだ。格蘭は顔色を変えずに答える。

「星系連合軍 賛成派は、手っ取り早く悪役を作ろうとしている節があります」

「私がその標的にされると？」

「可能性の話です。でも、ゼロではありません」

「……」

「通常の星間ネットワーク外の独自回線を銀河に張り巡らせている我が国を、ESAをはじめとする大国は快く思っていないのでしょう」

惑星ベルカルチャは、いまだに地球型惑星改造が道半ばである。

それは、降り立つ母なる大地を持たないということを意味している。それでも、王制を敷くベルカルチャ王国の登録人口は増え続けている。王国は独自の住民管理システムを擁しており、どんな場所に居る国民にも、独自のネットワークを介してサービスを提供しているからだ。その「宇宙横断住民管理システム」は、銀河に数多散らばる宇宙船の非常用回線を繋ぎ合わせることでなりたっている。つまり、宇宙に広がる人類の血液たる宇宙船が、そのままベルカルチャの血液でもあるのだった。それは、逆に見れば、人類の隅々までべ

ルカルチャの血が浸透していることも意味する。いま、根無し草を自認し、ひとつの星に居を定めない宇宙船乗りたちが、こぞってベルカルチャ王国にその身元を登録している。

大地すら満足にないのに――それでも拡大する「奇跡の星」――

――惑星ベルカルチャ。

ベルカルチャ側としては、予算の問題などを検討した上での苦肉の策としてネットワークを構築したもののだが――大国がそれを快く思わないのは当然と言えば当然だった。

大会議場内では会議が続いている。

話し合わなければいけない議題は山のようにあるはずなのに、星系連合軍の話だけが延々と続いている。

ソラはひとつ大きいため息をついた。

「ああ、そういえば……」

「なに？」とデニス。

「あの子たちは、上手くやっているかしら」

『星の涙』 #3

——実は、国際宇宙会議センターで開催中の 星系代表者会議で歌わせていただくんです。

——そうなんですよね。 とうですか？ 緊張してますか？

——もちろんですよ。 だって、偉い人たちばかりなんですよ？ 私の歌なんか知らないんじゃないかって……

——いまや「星の涙」を知らないひとは銀河中探してもいないでしょう。 泣けますよねえ、この歌。

——ありがとうございます。

——「星の涙」誕生のエピソードとかあったら教えていただきたいんですけど。

——わたしの故郷惑星ポルキアは双子の惑星なんです。

——へえ、めずらしいですね。 自転軸を中心にして並んでいるんですか？

——いえ、軸は公転軸です。 太陽をはさんで真反対、同一公転軌道にもうひとつ惑星があるんです。 双子なのにお互いの姿が見えないんです。 ……で、ひどい失恋をしたときに、夜空を見上げていて、ふと反対側にある惑星のことを思ったんです。 もしかしたら、彼らは双子じゃなくて、離ればなれになった恋人同士なんじゃないかって……そこに自分の状況が重なって……

——そちらの星にひとは？

——その星、惑星ペルキスはまだひとは住めません。

——そうですね。淋しい想いをしているのは惑星ペルキスのほう
かもしれませんねえ。

『星の涙』 見積り

「これが基本的なタイムスケジュール。こっちが必要な機材、資材の一覧です。一通り地球型惑星改造が終了して入植が可能になるまでには、最低でも十五年程度みていただく必要があります」

ステイーの説明に、レゼットがぼんやりと頷く。

「意外に時間がかかるものですね」

「あのですねえ……惑星ペルキスの場合は大陸改造をほとんど行う必要がないのでこの程度で済むんです。地殻を刺激しての大陸改造が必要な場合、下手をすると百年単位になる可能性もありますよっ、ディーアがまくし立てる。

「そうですか。わかりました。では、これで行きましょう」

「は？」

「ですから、作っていただいたタイムスケジュールで実施しようと思います」

「ちょ、ちょっと待ってください。弊社はまだお受けするとは言っていない。社内決済が……」

ステイーの言葉をレゼットが遮る。

「御社にお願いするわけではありません」

「はい？」

「実際の施工は我が社でやります。デトナグループは大グループですから。惑星土木技術も持っています」

ステイーがあっけにとられて口をぱくぱくしている。ディーアが顔をまっかにしてつぶやいた。

「じゃあ、なんで私たちに頼んだのよっ……」

「いや、御社は無理が利くと聞いていましたからね。まさかこんな短時間でスケジュールを組んでいただけるとは」

「だったら、最初からそう言いなさいよ！」

ついに爆発したディーアを、我に返ったステイーが必死に押しと

どめる。

「やめろディアー。暴力はだめだ！ 暴力は！」

「とめないでステイー先輩。社長なら絶対に殴ってるわ。まちがいなくそうしている」

「しないだろ。社長はそんなに短気じゃないよ」

「知った風な口きかないで！」

「あのー……」

おそろおそろ声をかけるレゼットに、ディアーが噛みつくように答える。

「何？」

「申し訳ないので、一部資材は御社経由で買いたいと思うのですが、それも社長さんの決済が必要なんでしょうか？」

「……どうかな。どう思いますか？ 先輩」

「確認はしたほうが良いだろうけど、ダメって言われることはないだろうね」

結局のところ、ベルカルチャ惑星開発会社は大口の惑星開発受注には失敗、資材の買い付け先として商社機能を負担するにすぎないビジネスの規模としては格段に小さくなる上に、追うべきリスクも小さくなるのだ。

「こちらとこちらを御社にお願いしたいのですが」

「大気組成改良剤と土壌改良剤の一部ね。土壌改良の地域を限定すれば入植を急ぐことができるけどお」

ディアーが落ち着きを取り戻して資料を眺める。しかし、口調がいぶぞんざいになってしまっている。

「社長さんの決済はいつ頃いただけそうですか？」

ステイーが端末で時刻を確認する。

「…… 星系代表者会議 がどうなっているかがわかりませんが、十二時間以内には確認できると思います」

「そうですね、助かります。ええと……せっかくここまできたので惑星ペルキスにもっと接近いたしましょうか？」

「いいえ、結構ですつ。こちらも色々と立て込んでますので、早々に引き返していただけますう？」

そそくさと椅子から立ち上がったディアーアとスティーをみて、レゼットは小さくうなずいた。

『星の涙』 #4

——今回の 星系代表者会議 でのシエラさんのステージは、銀河全体に向けて生中継されるんですね。銀河中のみなさんが楽しみにしていると思うんですけど、意気込みを聞かせてもらえますか？

——こんなチャンスはめったにないと思うので。銀河中のひとに私の声が届くってことをちゃんと自覚して、心を込めて歌いたいと思います。

——先ほど恋の歌だっておっしゃってましたけど、歌詞を読めば読むほど、 星系代表者会議 にぴったりだなあって思うんですね。

——そうですか？

——そうです。ぶっちゃけてしまいますと、 星系代表者会議 って星系同士の利権のぶつかりあいじゃないですか？ 互いに伸ばした手は届かないし、みんながひとつになれる日は永遠にこないような感じが…… なんか、歌詞と重なりませんか？

——そんな難しいことは考えていませんけど……でも、聴いてくれるひとが、それぞれの解釈で「星の涙」を理解してくれればそれでいいと思います。

——聴くひとの数だけ「星の涙」があるってことですね。おっと、ここでお時間となつてしまいました。シエラさんはこれから国際宇宙会議センターに向かわれます。それではシエラさん、がんばってください。

——はい。ありがとうございました。

——シエラさんの歌、楽しみですねえ。
銀河ミュージックチャ
ネル3 では……

『星の涙』 余興

星系代表者会議 初日は、どこの星系にとっても実りのないものだった。星系連合軍の話はいつたん棚上げとなった。会議の日程は五日間で、こなさなければならぬ議題は山積みなのだ。最終日の共同声明までになんらかの結論を出す、ということで議長が議長権限で議題を次に移したのだった。これから四日間、星系連合軍をめぐるロビー活動の応酬が繰り広げられることになるだろう。初日最後のプログラムを前に、ソラは小さくため息をついた。

「この状況でも、人気歌手のコンサートは実施するんだね」とデニス。

「世間一般の目をそらすための余興だからね。会議が紛糾しているからこそ、大々的にやりたいつてところですよ」

国際宇宙会議センターの大会議場は、演壇を中心に逆円錐状に席が設置されている。席数は二千席を越え、着席者すべての視線が中央の演壇に否応なく集まる設計となっている。演壇上空の高い天井からは、大きなモニタが全方位に向かって吊り下げられていた。

「しかし、さっきまでとは雰囲気がるで違うわね」

ミネラルウォーターのグラスを傾けながら、ソラが大会議場を見渡した。

つい数十分前までは殺伐とした雰囲気で満ちていた大会議場が、なにやらふわふわと浮ついていて。本会議中に入ることを許されなかった各種メディアの中継カメラがあちらこちらに陣取っている。各星系に割り当てられている席数は概ね五席。会議中は星系同士の席間には十分な空席が挟まっていて、会場に圧迫感はほとんどなかったのだが——いまや、空席を探すほうが難しくなっている。

「今日の会議には出席していなかった閣僚とか、事務官とかも詰めかけているようだね」

デニスも周囲を見回しながら言う。

「あの……、こちらの席空いているようでしたら……」

ソラが振り向くと、イブニングドレスの女性が立っていた。この星系の関係者だろうか。

「空いてますよ。どうぞお使いください」

その席には、ついさっきまでゲラン宰相と事務官が座っていたのだが、本会議の終了とともに出て行ってしまっていた。

「ありがとうございます」

五十代半ばと思われる上品なその女性は、背の高い女性をひとり付き人として伴っていた。

付き人は女性の後ろで直立不動の姿勢を取る。

「あなたも座ったらいかがですか？　うちのふたりは戻ってこないでしょうから」というソラの言葉にも、付き人はぴくりとも動かない。

「失礼ですが、どちらの星系のかたですか？」

ソラが女性に声をかけた。付き人が睨みつけるが、そんなものに怯えるソラではない。

「デトナ星系、と言ってわかるかしら」

「名前だけは存じ上げてます。残念ながらお伺いしたことはありませんが。私は……」

「ソラ・ベルカルチャ女王陛下」

「……ええ」

「申し遅れました。私はデトナ星系首相の連れです。ロゼ・ファルデイ。お見知り置きを……陛下」

ロゼは優雅に頭を下げた。

「デトナは有人惑星が六つもありましてね……主人も大勢を連れて来ているもので、席が空いていなくて。でもほら、せっかくの機会ですから」

「そうですね。しかし……」それまで黙って聴いていたデニスが口を開きかけたとき、大会議場の照明が消えた。続いてスポットライ

トが中央の演壇に注ぐ。

「各星系代表のみなさん大変お待たせいたしました」

政治的な会議にはそぐわない派手なスーツを身につけた男が、マイクを片手にスポットライトの中央に現れた。

「これからのひととき、会議の疲れをすばらしい歌声で癒していただきたいと思います——……」

男のマイクパフォーマンスが続く中、デニスがソラの耳元に口を寄せた。

「登録された代表と関係者以外は会議場に入るとは許されていないはずだ。登録の上限は五人……もつとも、この状況でそれが守られているのかどうかは怪しいけど」

「……様子を見るわ」

演壇上では男が大げさな仕草で何かを叫んでいた。続いてスネアドラムのロールが鳴り響き、さんざんもったいつけて、男が右手をあげる。

「それではご登場願いましょう。歌姫シエラ・スト——ム！」

司会者の絶叫の余韻が消え、スネアドラムの音も消え、国際宇宙会議センターの大会議場はぼっかりと静寂に包まれた。その静寂の中、銀色のスパンコールを全面に散らしたイブニングドレスを着てシエラ・ストームは静かに演壇の中央に歩みでた。

真上から最大照度で照らしつけるスポットライト。それは、会場中の視線にシエラを晒すのと同時に、シエラからは完全に視界を奪ってしまふ。まぶしい舞台の上からは、灯りの落ちた客席は暗すぎて見えないのだ。

会場内からはしわぶきひとつ聞こえない。小さなライブハウスなどとは客層がまるつきり違う。興味はもってくれていても、熱狂に身を任せることのない自制心を持った人たち。星系の代表として、そこに住むひとたちの利益を最大にせんとして集まっているひとた

ち。このひとたちに私の歌は届くのだろうか。

カッ、カッ、カッ、とドラムスティックが打ちならされる音がして曲の前奏が始まった。

普段なら、それは見知ったドラマーが背後を守ってくれる頼もしい合図なのだが、今日に限っては違う。いま流れているのは録音だ。星系代表が集まる会議の場に、楽器などの機材を持ち込むことは許されなかった。衣装だってそうだ。普段はこんなに体にぴったりしたイブニングドレスなどは着ない。しかし、何かが隠せるような服装はダメだと言われたのだ。

それでも――

シエラは目を閉じて、大きく深呼吸をする。

ここでの歌声は全銀河にとどく――

♪ 宇宙^{ひそ}のしじまにひとりたゆたい

永遠^{とわ}にも似た時の波間で

なにを想って

なにを求めて

あなたはまわり続けるの？

公転軌道は未練の軌跡

思うにまかせぬ無限の軌道

ねえ、教えてよ 誰か、教えて

伸ばしたこの手が 溢れる想いが

愛しいあのひとに はるかなあの世界に

届く日がくるのでしょうか？

悠久のこの宇宙で

星たちは今日も手を伸ばし

そして切なく あふれる輝きが

星の――星の涙

『星の涙』 警報

部屋の放送端末から、透明な歌声が流れていた。シエラ・ストームの「星の涙」だ。

「いいよなあ、この歌」

うつとりとステイーがつぶやく。

「そんなことより、社長に連絡はついたんですかあ？ ステイー先輩」

歌にはまるつきり興味を示さずに、ディーマがつつこみをいれた。

「概要はメールで送った。でも返事はまだだ」

「社長にしては遅い。まさか副社長となにかいけないことでも……」

「あのなら、ディーマ。この放送はいま惑星ネオ・ニューヨークの国際宇宙会議センターから生中継なんだぜ？」

「それがなにか？」

「つまり、社長たちもこの会場で、この歌を聴いているってことだよ」

「うそ？ それ音声放送？ 映像はないの？ 社長が写ってるかも！」

「こんなオンボロ惑星調査船じゃあライブ映像の放送波は受信できないんじゃないか？ それより、資材の確保はすんだのか？」

お返しとばかりステイーが言う。

「済みました。あとはデトナに請求するだけですう」

「決済おりてないのに発注確定しちゃったのか？」

「だってえ、二度手間なんですよ。発送も手配しましたよ。ダメならすぐに止められます。そのほうが仕事としてはスピーディーですよ？」

「……」

ステイーはふっとため息をつく、放送に意識を移した。

♪そして切なく あふれる輝きが
星の——星の涙

「ほし〜の、ほしのな〜み〜だ〜」

「下手くそですね」

「……」

歌は間奏に入った。

ステイーは、端末に向かってなにやら作業中の後輩に目を向ける。いつもピンクのレディスーツに身をつつんだディーア。明るく、元気で、毒舌で、ソラに心酔している。年齢と外見からは考えられないほどの知識を誇り、運動神経も抜群。しかし——実際、彼女がどんな人間なのかはほとんど知らない。

「ん？ なんですか？ 先輩」

「いや……俺、ディーアのことほとんど知らないなあって思ってたさ」
「なにを言って……」

——ザッ……

唐突に、部屋に流れていた音声放送が途切れた。

「？」

ステイーは何となく気恥ずかしくなって立ち上がると、放送の受信状態をチェックする。

「あれ、受信状態に問題はないな……」

「放送そのものに問題があるってことですか？ これ 星系代表者会議 でしょ？」

「……」

ステイーとディーアが顔を見合わせた瞬間——

ピ——ッ

ふたりそれぞれの携帯端末が鋭い音を立てた。

この音が意味するところは——

『星の涙』 #5

——放送の途中ですが緊急速報です。たったいま入った情報によりますと 星系代表者会議 が開催されている国際宇宙会議センターで、現地時間20時37分、大きな爆発音が確認されました。現場からの中継が入ります。

——こちら、国際宇宙会議センターの正面玄関前です。この喧噪がお聞きいただけますでしょうか。いまセンターの周りは、警備隊とメディアの車でごったがえしています。ここから煙などは見ることはできません。複数の情報を統合いたしますと、どうやら爆発は大会議場内で起こったと思われます。この時間、大会議場ではシエラ・ストームさんのコンサートが行われていましたが、現在中がどうなっているのかはまだわかっていません。いったんスタジオにお返しいたします。

——はい、ありがとうございました。スタジオには、政治部のコルデイ記者に来ていただいています。コルデイさん、会議は万全の警備体制をしいていたはずですよ？

——その通りです。ただ、今回の爆発が、本会議中ではなく、関連イベントであるコンサート中に起こったことがポイントだと思います。

——と、言いますと？

——本会議と比べて警備のレベルが落ちていた可能性があるということです。現状ではまだ、事故なのかテロなのかはわかりませんが、いずれにしろ、会議の警備体制が問題になることは間違いあり

ません。ホスト国であるESAも何らかの責任を取らざるを得なくなるでしょう。

——けが人の状況などもまだ不明なわけですが……

——そうですね。状況がはっきりしない段階ではなんとももうしあげられませんが、死者やけが人が出ていないことを祈るばかりです。

『星の涙』 大会議場

わずかに時は遡る。

国際宇宙会議センターの大会議場。

司会者の紹介を受けて、銀色のスパンコールを全面に散らしたイブニングドレスを着て、シエラ・ストームが演壇中央に進み出た。年の頃は十七、八だろうか。小さな体、小さな手、小さな顔。歌姫と称するにはいささか貧弱な感は否めない。

しかし――

♪宇宙のしじまにひとりたゆたい
永遠にも似た時の波間で

彼女の口が歌を紡ぎはじめると世界が変わった。

その小さな体のどこからこれだけの音量が出てくるのか、凜として切々と響くその歌声は、大会議場に集まった星系代表たちを魅了した。

♪なにを想って

なにを求めて

あなたはまわり続けるの？

「似ているね」とデニスがつぶやいた。

「誰に？」とソラ。

♪公転軌道は未練の軌跡

思うにまかせぬ無限の軌道

「君にだよ、ソラ。初めて出会った頃の君の瞳によく似ている」

「……」

ソラは無言で演壇上のシエラを見つめた。

♪ねえ、教えてよ 誰か、教えて

伸ばしたこの手が 溢れる想いが

愛しいあのひとに はるかなあの世界に
届く日がくるのでしょうか？

シエラの瞳は乾きをもっていた。何かを渴望する若者の瞳だった。
星系代表者会議 で歌うという名誉を得てもなお、それに満足する
ことのないどん欲な瞳だった。

♪悠久のこの宇宙そらで

星たちは今日も手を伸ばし

そして切なく あふれる輝きが

星の——星の涙

「わたし、あんなに青臭い目をしていたかしら？」

「していたよ」

「ふふふ。そう。嫌いじゃないわ」

ソラとデニスの視線が絡み、ふたりはふつと微笑みを交わす。ふ
たりとも、一日の疲れが幾ばくか癒された気がした。

その時——

たたきつけるような衝撃とともに、轟音が会議場を満たした。

轟音で耳がいかれたらしい。世界が音をなくしている。

しかし、デニスはかろうじて意識を保っていた。

ただでさえ照明が落とされて暗くなっていた大会議場内は、いま
や中央のスポットライトも消え、非常灯以外の灯りが無い。その上、

煙も充満し始めている。デニスはソラの姿を探した。

（ソラ！）

声を出したつもりだが、それが自分の耳に届かない。

ソラがいたはずの席に目をこらす。作り付けの椅子の上にソラの姿がない。

デニスは席を飛び出して、煙でかすむ周囲を必死で伺った。

轟音はおそらく爆発だろうと思われた。一瞬演壇から視線を切ったときだったが、爆心地はおそらくシエラが歌っていた演壇付近だろう。

爆発物がしかけられていたのか、それとも爆発物が投げ込まれたのか――

デニスは演壇へ向かってかけ降りる。

この爆発がシエラ本人をねらったものか、それとも会議そのものを混乱させることをねらったものかはわからないが、シエラが被害にあったのなら、ソラはきっとそこに駆けつけるだろう。

デニスはなによりまずソラを気にかけた。

しかし、ソラはそれより早くシエラを気にかけたに違いない。

デニスはそんなことに不満をもったりはしない。それが、お互いのスタンスであるというだけだった。

演壇にたどり着くと、中央にシエラが倒れていた。その体が原形をとどめていることにわずかに安堵する。

ソラは――

「デニ――ス！」

ソラは声を限りに叫んだ。しかし、演壇に駆け寄るデニスは聴こえていないようだった。

あの轟音の直後、ソラはまずロゼ・ファルディとその付き人へと振り向いていた。それはもう野生の勘とでも言うべきものだった。付き人の手の中になにかが握られていた。リモコンのようなもの。

そして、あわてもせずに現場を立ち去ろうとしているロゼ。

「待ちなさい！」

鋭い気合いを発して席から飛び出したソラは、ロゼの右出に硬質な光を認識してかろうじて身をかわす。セラミック製の小さなナイフだった。

会議場への武器の持ち込みなど許されているはずもなく、わざわざ金属探知機を避けるように用意されたそのナイフは、彼女がこの事件の関係者であることを雄弁に物語っていた。

ソラは拳を握って腰を落とすと、ロゼを睨みつける。

「さすがは 銀河の雌豹 ね……とても女王だなんて思えないわ」

ロゼの挑発にはまるで乗らず、ソラは鋭くロゼの懐へと飛び込む。左肘を喉元に打ちつけると同時に強烈な足払いをかける。そして、体勢を崩したロゼにおおいかぶさるようにして鳩尾への一撃。

「がっ……」といういやな音とともに、ロゼが白目をむいて床に落ちる。

ロゼが完全に床に落ちる前にソラは体勢を立て直し、付き人の襲撃に備えた。しかし、襲ってくる様子がない。

ソラは周囲を伺いつつロゼのナイフを足で遠くへと蹴りとばした。そして、演壇上にいるデニスを見つけた。それに向かい合っている付き人の女も――

「デニス！」

デニスが気づかない。もしかして耳をやられたのか。

ソラは演壇に向かって駆けだそうとした。

その時――

今度は大会議場の天井付近で、二度目の爆発が起こった。

『星の涙』 安否

「まだ安否はわからないの？」

ディーアが通信端末に噛みつくように怒鳴っていた。

「こちらに連絡は入っていません」と通信機越しに答えたのは、惑星ベルカルチャに残っている惑星開発会社のスタッフだ。「あのロスト警報はデニス副社長のものです。陛下のGPS端末は捕捉して……ザッ……から、おそらくご無事だろう……ザッ……ます」

約一時間ほど前、ステイーとディーアの携帯端末が鋭いアラーム音を発した。それは、惑星ベルカルチャの王室・政府関係者全員の端末で鳴り響いた。

ロスト警報——惑星ベルカルチャの女王ソラと、地権者であるデニス、ふたりの腕に埋め込まれたGPS端末の位置を補足できなくなったという警報である。ロスト警報にはいくつかの段階がある。バッテリー切れによるロスト（レベル1）、GPS衛星などの補足圏外へ出たことによるロスト（レベル2）、端末の破損によるロスト（レベル3）、そして生体反応消失によるロスト（レベル4）。前者ふたつのロストについては、事前に端末側からの情報補足も行われるので、警報としてはそれほど重大なものとはされていない。特にソラはGPS圏外へひとり出てしまうことも多いので、レベル2警報の発生は日常茶飯事だ。

しかし、今回の警報はレベル3。デニスの皮下にあるGPS端末が物理的に破損したことを意味していた。それも、星系代表者会議のさなかにだ。即座に死亡を意味するレベル4でないことだけが救いだ。

「副社長……」ディーアが涙声でつぶやく。皮下の端末の破損は尋常ではない。一緒に居るソラの身も案じられる。

「おちつけ、ディーア。宰相たちも同行しているんだ。社長も副社長も大丈夫だよ」

ステイーがディアーをなだめにかかる。

「いまここであわててもどうしようもないだろう」

「こちら……ザツ……情報収集に全力をあげて……」と、通信機越しにスタッフが言う。「何か判りましたらすぐに連絡を入れま……」
突如、雑音がひどくなったかと思うと通信が途切れた。

「……」

ステイーとディアーはしばし呆然と通信機を見つめていた。再度通信を試みる気が起きてこない。

「らしくないな、ディアー」

「はあ？」

「社長と副社長には絶対の信頼をおいているんだろ？ いままでも連絡がとれなくなったことなんていくらでもあったじゃないか。今回に限ってのその取り乱しようなんだよ」

「……なんていうかあ、女の勘？」

「なんだって？」

「今回は違うって……なんか、そんな感じがして……」

「気のせいだよ。仕事で振り回されて、ちょっとナーバスになってんだろ」

「ステイー先輩のくせに、生意気なこと言わないでください」

「あのなあ……俺はだね、」

ディアーは手のひら掲げてステイーを遮った。

「わかりました。とりあえず、可能な限りここから情報収集をします。ちょっとひとりにしてください」

そう言つと、ディアーは惑星調査船の貧弱な情報通信端末に向かった。さっきの通信の途切れ具合を考えると、どれだけのことができるのかはあやしいものだった。

ステイーは小さくため息をつく、通信室をあとにした。

『星の涙』 混乱

「瓦礫が動かせないってどういうこと？」

ソラの怒鳴り声が国際宇宙会議センター大会議場前のロビーに響いた。ソラの肉食獣のような視線の先にはESAマークを背負った会場警備隊の列がある。二度目の爆発の後、なだれ込んできた会場警備隊があつというまに大会議場を封鎖してしまった。ロゼを警備隊に引き渡すどさくさで、ソラも現場から連れ出されてしまった。

いま、ゲラン宰相と事務官が会議本部に救援要請に向かっている。

「現場の安全が確認できておりません」

答えたのは小隊長と思われる男だ。

「瓦礫の下にはシエラ嬢と、うちの副代表がいるのよ」

「現在確認中です」

「瓦礫を撤去せずに確認するっていうの？」

「二次災害を防ぐためです。それに、星系代表の方々がこれだけ集まっているところに、おいそれと重機などいれられません」

「なら、私が直接救助に向かうわ」

ソラが、警備隊の封鎖を押し分けて大会議場へと入ろうとする。

警備隊は色めき立ち、なんとかソラを押し戻そうとする。しびれを切らしたソラが拳を握りしめた、その時――

「いいかげんにしてもらいたいものですな」

「？」

ソラが拳を握りしめたまま振り向く。

「他人の心配をしている場合ですか？ ソラ・ベルカルチャ女王

陛下」

「何を言っているの？ 大統領」

鷹揚な物腰で近づいてきたのは、ESA大統領ジョージ・マテイトスだった。星系連合軍の提案を行って会議を大混乱に陥れた

張本人だ。

「女王陛下、あなたには色々とお伺いせねばならないことがあります」

「ロゼのことなら引き渡したでしょ。立ち会いなんて望まないから、好きに尋問するといいわ」

「そうはいきません。陛下、あなたはベルカルチャ王国の置かれている立場をわかっていらつしやらない」

「……なんですか？」

ソラがマテイトスを睨みつけた。しかし、人類最大の星系を率いる男は、そんなことではこれっぽっちも揺るがない。

「惑星ベルカルチャに割り当てられた席にテロリストと疑われる人物がいた。しかも陛下、あなたと親しげに話をしていたとの目撃情報もある」

「……一応釈明をするわ。彼女はロゼ・ファルディと名乗った。デトナ星系代表夫人で、席がないから座って良いか、と言ったわ」

「事前申請のない人間が会場に入れるはずがありません。事件後、警備隊が会場内の人数を確認しました。申請通りの人数しか大会議場にはいなかった。そもそも、デトナ星系代表夫人のロゼ・ファルディはネオ・ニューヨークには来ていないはずです。とすれば、あなたが捕まえたと称するあの女は何者ですか？」

「こつちが訊きたいわ。だいたい、あの状況で会場の人数を正確に把握できているとでも言うの？」

「もちろんです」

一瞬の沈黙。そして、ソラが口を開く。

「ジョージ・マテイトス拡大星系アメリカ大統領、惑星ベルカルチャ代表としてお願いがあります」

「ふむ？ 何ですか？」

「ベルカルチャの副代表が瓦礫に閉じこめられています。可及的速やかに救助活動を要請します」

「おっしゃっている意味が分かりませんな。先ほど申し上げました

通り、こちらでは申請通りの人数を確認している。爆発時に大会議場内にいて、現在所在が確認されていないのは歌姫シエラ・ストームひとりだけです」

「頭数だけの問題じゃあないでしょ！」

マテイトスが大袈裟に肩をすくめてみせる。

なんてこと——ソラは天を仰ぎたい気分だった。マテイトスES A大統領のしたり顔がこの上なく憎たらしい。可能ならば、その髭面に拳をたたき込んでやりたいところだ——この男は、惑星ベルカルチャはコンサートの際に大会議場にふたりの人間が入っていたことになっていて、それはソラとロゼで満たされるのだから、それ以上の人間が会議場に残されているはずはない——と屁理屈を捏ねているのだ。個人識別はしていないのか？ と問い詰めたところで、これまたしらばっくれるに違いない。

そういえば、ロゼの付き人はどうなったのだろうか。犠牲になったのか、それとも逃げたか——はたまた、別のところで誰かの頭数とすり替えられているのか——もともと居なかったことになっているのか——

しかし——

「あの歌手は最初から犠牲にするつもりだったのね？」

「人間が悪いですな、陛下。今回のことは憎むべきテロ行為の結果です。世間は悲しむでしょうな。二度とこのようなことを起こさないためにも 星系連合軍 の結成をいそがねば。そして、連合軍によるテロ撲滅作戦を実行に移す必要がある」

「大統領……」

すべてあなたが仕組んだことなのか——

「作戦名は……そうだ、「星の涙」がいい。「星の涙作戦」。これは民衆に支持される」

「……」

マテイトスはゆっくりときびすを返しながら、吐き捨てるようにつぶやいた。

「他国の女王とて、わが星系内ではその法で裁かせていただく。どこの馬の骨ともしれない小娘が、女王などと笑わせる」
しんと静まり返ったロビーに、マテイトスの乾いた笑い声だけが響きわたった。

『星の涙』 暗闇

シエラは暗闇の中で目を覚ました。

しばらく呆然と闇を眺め、何が起きたのかを思い出そうとする。

国際宇宙会議センターの大会議場でスポットライトを浴びた。そして、「星の涙」の一番を歌って――

歌って――記憶はそこで途切れていた。

突然、何かの衝撃に襲われたような気がするが――何か事故でも起こったのだろうか。

あたりは相変わらず闇だった。いくら待っても目が慣れてくることがない。これは――本当の闇だ。

シエラは少し懐かしさを感じていた。子供の頃、いたずらをして家の納屋に閉じこめられたときの事を思い出す。あの納屋も、こんな、粘り付くような暗闇を持っていたつけ。

身を起こして、あたりを伺う。床の様子が大会議場の演壇とは違うようだ。

視覚がまるつきり利かないので、まずは触覚で体の無事をたしかめる。ペタペタと自分の体を隅々まで触る。

けがはなさそうだった。髪がひどくボサボサのようだがどうにもできない。イブニングドレスの裾が大きく割れていた事に気づいて、暗闇でひとり赤面する。

触覚の次は聴覚の番だ。シエラは暗闇で耳を澄ませた。

「――」

かすかに、ひとの呼吸音が聞こえた。意外と――近い。

シエラは膝立ちになると、ゆっくりと音のする方へと体をずらす。と――イブニングドレスの裾につまずいた。

「きゃっ！」

「ぐふっ！」

あわてて体を支えようと伸ばした手が、そこにいた誰かのおなか

に直撃してしまったようだ。」

「あ、あの、あの……ごめんなさい！」

シエラは体勢を立て直そうとするが、手を突こうとしたところに今度はその人の足があり、思わずひっこめた手の肘が、今度は顔に入ってしまったようだ。」

「ちょ、ちょっと動かないでくれるか？」

「は、はい……」

シエラの下にいるのは男のひとだった。声から察するに三十代のように。いま、したたかシエラが叩いてしまった鼻の痛みに耐えている。

「よし、ゆっくりと体をずらしてくれ」

「はい……ひゃっ！」

ずらしたお尻が男の手の上に乗ってしまった。シエラは赤面していやな汗をかきつつ、ようやく男から離れることに成功した。

「あ、あの……」

「ちょっと待てくれ。ええと……五体は一応満足のようだ。耳は……いまはなんとか聴こえるか。目が見えないのは……これは暗闇のせいかな……」

少し前にシエラも繰り返した作業を男がしていた。シエラは黙ってそれが終わるのを待った。

「お待たせ。なんとか自分の無事を確認したよ。その声……君はシエラ・ストームだね？」

「はい。あなたは？」

「俺はデニス・ローデンスキー。惑星ベルカルチャの副代表だ」

「ベルカルチャ……奇跡の星。ソラ女王陛下のいる？」

「知っているのかい？」

当代、惑星ベルカルチャを知らないひとはいないだろう。名もなき未開の惑星を、ものの十年で「奇跡」とまで呼ばれる王国にしたてあげた女王ソラ・ベルカルチャ。

「女王さまは、全ての女性のあこがれの的ですから」

「それで……ここはどこだか、君はわかる？」

「いえ。私もさつき気が付いたばかりで。ええと……何があったんですか？」

「おそらく、テロだ」

「テロ？」

「ああ。爆発が二回あった。何も覚えていないのか？」

「そんな……」

シエラは絶句した。何も覚えていなかった。

デニスにはデニスで、なにやらゴソゴソとあたりを探っているようだった。

「シエラ・ストームさん、君の携帯端末は？」

「シエラで結構です。端末は楽屋に置きっぱなしです。持って入るなっというわれて」

「そうか。俺のは何処かで落としたかな。……さて、困ったな」

「あの……ローデンスキーさん？」

「デニスでいいよ」

「……デニスさん。なんでそんなに落ち着いているんですか？」

「落ちついているように見え……いや、聞こえるかい？」

「はい」

「うーん……そうだね、ソラがきつとうまくやるだろうと思ってるから、かな」

「女王さまが？ 助けにきてくれるってことですか？」

「本人が来るかどうかはともかく、何とかなるだろうよ」

「？」

「彼女は事態を最善に導こうとするんだよ。俺たちに助かる可能性が僅かでもあるなら、きつと助かるよ」

「……よくわかりません」

デニスの言っていることが、本当にシエラにはわからなかった。それでも、わずかに心が軽くなるのを感じた。

『星の涙』 星系連合軍

テロと目される二度の爆発を受けて、 星系代表者会議 のホスト国であるESAのジョージ・マテイトス大統領は会見を開いた。会見には参加星系のうちの三分の一程度の代表が同席した。全ての代表が同席できない理由を、マテイトス大統領は会見場の広さの問題と、いくつかの星系は同席を辞退したからだと発表したものだが、それが露骨な政治的策略によるものであることは火を見るよりも明らかだった。同席した星系はすべて 星系連合軍 への参加を表明していた大国だった。加えて、これは後になってわかったことだが、それ以外の星系代表たちは会見の時間を意図的に誤って伝えられていた。

会見の席上、マテイトスは「今回のテロは人類への宣戦布告といつていい重大な行為だ」と避難した上で、「この難局に立ち向かうために、我々は 星系連合軍 を結成することをここに宣言する」とした。

「今回、我々は目の前でシエラ・ストーム嬢を失った。彼女の歌声は平和の象徴であり、それを蔑ろにしたテロリストを許すことは到底できない。我々は、速やかに連合軍の組織を作り上げ、テロリストに鉄槌を下す用意をすすめなければならない。いま、多くの人々がシエラ嬢の訃報に涙をながしていると思う。はからずも彼女が歌った「星の涙」。我々はここに、その名を冠した「星の涙作戦」の発動を宣言する。テロリストの目星はついている。作戦上この場でそれを明かすことはできないが、「星の涙作戦」を成就させることが、犠牲になったシエラ嬢の魂に報いることになるのはまちがいないのだ！」

「よく言うわね。……ベルカルチャのテロリスト認定は確定かしら」

「そのようすな。しかし、世間を納得させるには、いささか根拠が弱いと言えます。まだ、逆転の目はあるのではないかと」

控え室のモニターでマテイトスの会見を見ながら、ソラとゲランが額を寄せあっていた。

「デニスのほうはどう？」

「誰かの遺体が回収された形跡はありません。デニス殿下はもとより例の歌手もです」

ソラを筆頭に、ゲランも事務官も走りまわって情報を集めていた。ロゼの付き人の足取りもようとして知れなかった。各星系代表団にはデニス以外の行方不明者はいない様子だ。

「ESAも探しているようです。彼らにも何らかの不測の事態があったのではないだろうか」

「でも、マテイトスはシエラ嬢が死んだと言いつた。つまり……」

「はい、最初から殺すつもりだったのでしょうか。それをベルカルチャのせいにする腹積もりなのだろうと思います」

「ん——……」

そうであっても、やはり何か決め手に欠く。決定的なテロの証拠がなければ、たとえESAといえども、惑星ベルカルチャ相手にそうそう戦端はひらけまい。なにより、ベルカルチャは民衆に受けがよい新興王国だ。いかなシエラ・ストームの死をもつてしても、そう簡単に一国をまるまるテロリスト扱いできるとは思えない。何か奥の手を隠していると考えた方が自然だ。

「とりあえず情報収集を続けてちょうだい。ロゼがベルカルチャの人間で、だからベルカルチャがテロリストだっていうマテイトスの言い分は、デニスが出てくればとりあえず成立しなくなるわ。ゲランの言う通り、彼が予想外の事態をうまく言い繕おうとしているだけなら……まだこちらにも分はあるし、何としても先を越さないといけないわ」

「はい」

ソラはソファに身を預けて天井を仰いだ。

デニスの身が心配だ。しかし、ESAもデニスとシエラを見つけれないということは、まだ生きてどこかに閉じ込められている可能性があるということだ。ESAの手の内にあるという可能性も捨てきれないが、それならば、マテイトスは堂々とそのカードを切ってくるはずだ。

「星系連合軍……ESA……シエラ・ストーム……星の涙……ロゼ・ファルデイ……デトナ星系……デニス……マテイトス……ベルカルチャ……」

気が付くと、モニターにはシエラ・ストームのPVが流れていた。マテイトスの会見に続く、民意高揚のためのあざとい演出だ。

「ねえ、教えてよ 誰か、教えて
伸ばしたこの手が 溢れる想いが
愛しいあのひとに はるかなあの世界に
届く日がくるのでしょうか？」

歌姫シエラ・ストーム。そういえば、会議の資料に彼女のプロフィールが添付されていたっけ——
なんだろう？

なにかがひつかかっている。
しかし、それが何なのかわからない。
まとまらない思考が、眠気の波にさらわれていく。

「悠久のこの宇宙で
星たちは今日も手を伸ばし

そういえば、ステイーとディーアはちゃんと仕事をしているだろうか。

こんなとき、
あの子たちがいてくれたら……

♪そして切なく
あふれる輝きが
星の——星の涙

『星の涙』 暗闇2

「不思議な空間だが……倉庫かなにかかなあ」

暗闇の中、手探りで室内を伺っていたデニスがそう結論づけた。

「なにかありましたか？」とシエラ。

「瓦礫以外何もない。あまり動き回らない方がいいな。さっきみたいな事故が起きる」

デニスに顔面を強打したことを思い出し、シエラは冷や汗をかいた。

「……脱出するための材料はない、か」

「わたしたち、どうなるんでしょうか？」

「どうになりたい？」

「生きたいです。わたし、まだまだ歌い足りない……」

「即答か。いいね。でも80点だ。満点の答えは「生きます！」だな」

「……」

ガチャガチャとドアを動かすような音がした。

「なんですか？」

「ドアみたいだ。鍵がかかっているようだ……電子ロックではないらしいな。昔ながらの鍵穴……らしきものがある。……針金でもあれば、もしかしたら……」

シエラは肩を落とす。針金に心当たりなどない。しかし、何かないものかと恐る恐る周囲を探ってみる。時々壁や瓦礫に突きあたるが、それ以外にはたしかに何もないようだ。

そうこうしているうちに、カチカチと金属同士がぶつかり合う音がし始めた。

「あの……何か見つけたんですか？」

「うん。俺のベルトはね、いくつかの金属片に分解できるようになっているんだ。ナイフってほどではないけど……しかし、ちょっと

短いな……俺は皮下に爆弾なんて埋め込んでいないしなあ」

「爆弾？ そんな人いないでしょ？」

「……」

デニスの微妙な沈黙が、それが冗談ではないことを告げている。まさか、今回のテロリストのことだろうか。

「シエラ」

「はい」

「君、いまブラジャーしているか？」

「な……」

シエラは暗闇の中で真っ赤になって、胸を押さえて後ずさった。

「な、な、なんですかいきなり。当たり前じゃないですか……」

「ワイヤー入ってるやつか？」

「……ワイヤー？」混乱していた頭がすつと冷える。つまり「ブラのワイヤーで鍵を開けようと？」

「できるかどうかはわからないけどな。でも、可能性があるならやってみたい」

「……」

言わんとすることはわかった。でも、じゃあどうするのかということを考えて、シエラの顔はまたもや上気する。

「えっと、そ、それはつまり、わ、わたしのブラを、デ、デニスさんに、その……」

「いや、金属片を渡すから、君がワイヤーを抜いてくれ」

「ああ……そ、そうですね」

さんざん逡巡したあげく、シエラはデニスから小さな金属片を受け取った。

「あっち向いててください」

「それはいいが……意味あるかね？」

「あります！」

シエラは小さな金属片をつかんだまま、イブニングドレスをはだけた。手探りでブラジャーをはずし、そして、ワイヤーを探る。ワ

ワイヤーは左右のカップに一本づつ。

「一本でいいですか？」

「できれば二本あると助かる」

あれやこれやと試行錯誤をして、ようやく一本ワイヤーを取り出す。そして、問題に気づいた。これを持ったままでは次の作業がやりづらい。取り落としてしまったら見つけるのは至難の業だ。

「あの、一本とれました。で、まずこれをお渡ししたいんですけど……あんまり近寄らないでください」

「無茶を言うね」

シエラは精一杯手を伸ばした。しばらくデニスが辺りを探っている気配がした後、突然シエラの手は、デニスの大きな手に掴まれた。「ひゃっ！」

落とさないためにワイヤーをデニスに渡すつもりだったにも関わらず、結局シエラはそれを取り落としてしまった。

「あ、ご、ごめんなさい」

思わずかがみこんだシエラのむき出しの胸が、同じようにかがんできたデニスの手に触れる。

「！」

心臓がドキドキと高鳴っている。顔が上気して、頭が真っ白になって、体の動きがとまってしまふ。どうしよう、どうしよう、どうしよう――

でも。

「ああ、あった。すぐ見つかってよかった。ほら、もう一本も急いでくれ」

「……」

デニスのあまりに冷静な声が、シエラの頭を冷やす。なんだから、一人で舞い上がっていたことが逆にはずかしくなる。

シエラはだまってもう一本のワイヤーを取り出すと、今度は危なげなくデニスに渡した。

「何とかかなりそうですか？」

「がんばってみるよ」

安堵感とそこはかとないうるささ、シエラは自分の胸に去来する感情が理解できずに、暗闇の中で首をひねった。

『星の涙』 乗り継ぎ

惑星ペルキスから折り返すこと約十六時間。ベルカルチャ惑星開発会社のステイーとディーアは、ようやく近隣の大型宇宙港へとたどり着いた。レゼットとはここで別れることとなる。

「私の手際の悪さのために余計な手間をかせさせてしまつて……」

恐縮しきりのデトナグループ惑星開発担当課長レゼット・モンズに対して、ステイーが如才なく答えを返す。

「こちらも、ちよつと社内でもトラブルがあつて決済が遅れて申し訳ありません。とりあえず資材の発送手配はすんでいますので、その点でご迷惑をおかけすることはないとおもいます」

「助かります。あの、送り先と発送方法に間違いありませんよね？」

「大丈夫です。そちらの書類通り」とディーア。「最速でつてことで、マストドライバーでの無人打ち出してことになってますけど、回収は大丈夫なんですかあ？」

「それはもう。周囲にひと宇宙船もないところですから。すでに弊社の回収船がスタンバイしています」

「ならいいですけどお」

「じゃあ、僕はこれで」

「はい。ありがとうございました。お氣をつけて」

レゼットの大げさなお辞儀を背に受けて、ステイーとディーアはきびすを返した。レゼットが見えなくなるまで、ふたりはひたすら無言で歩く。そして、角をひとつ曲がつたところで走り出した。

「どうしますかあ？ ステイー先輩」

「管制室だな。ここは独立宇宙港だから管制室も融通が利くだろう」「了解です」

身分を明かして管制室の警備室に飛び込んだステイーとディーア

は、応接室へと通された。

「当、チボール宇宙港の副題表、アルコー・パイルです。ベルカルチャ籍ですよ」

「ベルカルチャ王国情報局のステイー・ブランクスです。こちらは同じくデイーア・スピリトース」

ステイーとデイーアは、ベルカルチャ惑星開発会社社員であると同時に、ベルカルチャ王国情報局の技官でもあった。

三人はせわしなく握手を交わした。

「前置きはなしでいきましょう。ネオ・ニューヨークへの最速便は二時間後に出発する高速シャトルです。所要時間は約三十時間。一般席は満席ですが、ゲストルームの都合がつけられます」

「助かります」とステイー。

「しかし……正直、面倒なことになりましたな」アルコーが渋面を作る。「まさか、ソラ陛下にテロリストの汚名を着せるとは……」

「なんですつてえ？」

デイーアの大声に、アルコーは驚いたように目を見開いた。

「おや、ご存じない？ 公式発表はありませんが、もっぱらの噂です」

「……ついさつきまで乗っていた惑星調査船がこの上ないオンボロで、かろうじて音声放送を拾える以外、まともに外部ネットにも繋がらなくて」

ステイーの言葉にデイーアが頬をふくらませる。ハッカーとしてそれなりの腕を持っているデイーアだが、物理的にあれほどオンボロだと手の施しようがなかった。しかも、なぜか個人所有の携帯端末も途中から接続障害が起きて使えなくなってしまった。

「あれ、わざと通信を遮断してたんじゃないかって思うんですけど
お」

「なぜそんなことするんだよ？」

「……」

「その船がどれほどのものだったかはわかりませんが、この宇宙港

は通信状態万全です。通信室へご案内しましょう」

「社長！」

勢い込んで通信モニタに話しかけたディーアの出鼻は、落ちついた声にくじかれた。

「陛下は現在会議に出席中だ」

「……なんだ。パルモか……」

ようやく繋がったソラの携帯端末だったが、端末の向こうに顔を出したのは、星系代表者会議に同行している事務官のパルモ・メサダだった。ゲラン宰相の有能な右腕だが、有能すぎてディーアは苦手だった。

「社長たちは無事なのよね？」

「陛下と宰相はご無事だ。デニス殿下は、現在行方不明」

「行方不明？ どういうことよ、それ！」

パルモは爆発当時の様子をスティーとディーアに手短に語った。大会議場が封鎖されていて、いまだにデニスの搜索を行えないことにより、そのデニス自体が、コンサートの時は会場にいなかったことにされてしまっていること。そして、ベルカルチャ王国が現在窮地に追い込まれていること――

「ちよつと、社長は副社長をほつたらかして会議をやってるの？」

「言葉をつつしめ」とパルモ。「搜索は可能な限り行っている。いま、駐ネオ・ニューヨーク大使にも協力を仰いでいるところだ。ただ、国際宇宙会議センターの警備が強化されていて、おいそれと下手な動きができない。更に言えば、何かを探るような動きがテロ疑惑を強める悪循環もある」

「事故から十七時間くらいですよね」とスティー。

「ああ。救出の目安は七十二時間と言われているがな。会期はあと四日。その間はいまの警備態勢が続く」

「シエラ嬢だって遺体が出たわけじゃないんですよね？」

「ああ」

「……」

しばらくステイーとパルモの会話を聞いていたディーアだったが、唐突にふたりの話を遮った。

「ねえ、おかしくないですかあ？」

「おかしいって何が？」とステイー。

「だって、遺体も確認せずにシエラ・ストームほどの人気歌手を死んだことにしちゃったんですかあ？　社長がつかまえたっていうその女テロリストはどうなったんです？」

「E S Aの警備隊が取調中だ。私が立合いを求めても、けんもほろろの対応だった」

「ほら、どう考えたって、E S Aの陰謀としか思えないじゃないですか！」

パルモが渋い顔をした。

「そんな事は判っているんだよ」

「え？」

「陛下だってそれは判っている。だからこそ、陛下は会議で頑張っているんだ。本物のテロリストが存在しないのなら、次のテロは起こらない。E S Aに尻をまくらせないための対応が重要なんだ。殿下とシエラ嬢を見つけられないのはE S Aにとっても不測の事態だと推測できる。それでも、E S Aが、事態は自分達の手の内にあると思っている限りは無茶はしないだろう」

「その間に、なんとかして副社長を先に見つけると？」

「そうだ。だが、我々にとってもわずかな猶予になっているこの会期は、E S Aの連中にとっても同様だ。この期間で、ベルカルチャをテロリストに確定する何かの仕掛けを考えているはずなんだ」

「仕掛け？」

「そうだ。言い訳のできない決定的な何かだ。そっちは、何か変わったことはないか？」

ステイーが惑星ペルキスの資材発注の件を簡単に報告する。ディ

「アがいかに惑星調査船がオンボロだったかを力説しようとしたが、それはパルモに簡単に遮られた。

「私は会議にもどる。ふたりとも、こちらに向かってくれるのはありがたいが、連中の企みを探るほうに注力してもらえると助かる」
「はい」

『星の涙』 暗闇3

どれほどの時間がたっただろうか。

シエラ感覚では丸三日くらいのような気がするが、実際はもっと短いかもしれない。

結局、さんざん嫌な汗をかいて用意したワイヤーも、ドアを開けるには至らなかった。期待感が大きかっただけに、シエラの落胆は大きかった。そして、いまや万策つきてしまっている。

「なあ、何かおもしろい話でもないか？」

「もう……すべて話しました……」

この主観時間三日のうち、眠っている以外の時間は、デニスといっしょに話をして過ごした。だれかと一緒にいる、それが実感できるからこそ暗闇に耐えられているという実感がシエラにはある。

環境は悪化の一途をたどっている。水も食料もない。当然トイレもない。しかし、ひとが生きていれば排泄行為は必要なのだ。臭気はかなりこもってしまっているが——人間、たいていのことには慣れるものだ。極限状態では、きれいごとは言っていられない。

「ねえ、デニスさん？」

「ん？」

「どうせ誰も見てないし、いけないことでしょうか？」

「どうした？ 最初はあれだけ恥ずかしがっていたのに」

「……こんなところでトイレもなくて、いま更はずかしいことなんてないわ」

「……」

シエラはデニスの声に近寄っていく。

「水も食料もないんじゃない？……どっちにしろ、もう長くはないですよ？」

「生きたいんだろ？」

「一番の生きている証でしょ？」

シエラの手がデニスの体を捕らえた。勢いに任せて体をあずける。
「ねえ？」

「……いまも、見られているのかなあ」

「え？」

「ソラがよく言うんだよ。俺たちがどこにいても、星の女王は見えているって。見てくれているってさ」

「星の女王ってソラさまのこと？」

「彼女自身が口にするときのそれは違う。宇宙の高見から包み込んでくれる……神様みたいな存在のことだ」

「それで……見られているから何なんですか？」

「あきらめちゃダメだ」

「え？」

「君はいま、自暴自棄になっているだろ？」

そつと、デニスの手がシエラの肩に乗せられる。そして、小さく、しかし確固たる力で引き離される。

「ずるいです……」

「？」

シエラの声が滲む。

「神様なんか出さなくても、いやならいやって言うてくれればいいじゃないですか」

「……ごめん」

「謝らないで！」

シエラはしばらくグズグズと涙をすすっていたが、やがてポツリとつぶやいた。

「えへへ……振られちゃった」

自然と、歌が口をついて出た。

♪悠久のこの宇宙で

星たちは今日も手を伸ばし

そして切なく あふれる輝きが

星の――星の涙

さすがにそろそろやばいな、とデニスは実感していた。

閉じ込められてからおそらく五十時間程度が経過している。シエラが限界に近づいているは見ていればわかる。

いま、外の世界はどうなっているのだろう。デニスは、もう何度も繰り返した自問自答を再び開始した。

まず、ソラは無事だろうか？

――もちろん無事だろう。これは俺にとっての大前提だ。

では、今回のテロの目的はなんだ？

――政局の混乱？ 何かの報復？――いや、どれもピンとこない。一番考えられるのは、星系連合軍 設立の為のパフォーマン
ス。そうだ。そう考えるのが一番しっくりくる。

とすると、首謀者は誰だ？

――もちろんESA。もしくは、その意思を汲み取った何者か。

おそらく、いま世間では歌姫シエラ・ストームは死んだことにされてしまっているだろう。人気歌手がテロの犠牲になる。その義憤を糧にして 星系連合軍 を設立する。安直だがわかりやすい、よく出来たシナリオだ。

じゃあ、俺のしたことはなんだ？

——E S Aの策略に一石を投じることではきたはずだ。しかし、外では俺はテロリストにされてしまっているかもしれない。

ソラは 金剛の薔薇 銀河の雌豹 などのふたつ名を持つ女王だ。当然、デニスのことを切り捨てる選択肢だつてあることはわかつているだろう。でも——それが最善と考えるようなソラではない。それを一番よく知っているのはデニス自身だ。

いま、惑星ベルカルチャは、ベルカルチャ王国は無事だろうか？

——俺をシエラ・ストーム殺しのテロリストに仕立て上げたくらいでは、王国はびくともしないだろう。あのマティウス大統領が提案したのは 星系連合軍 なのだ。個人レベルのテロを餌に釣れるような物ではないし——それに、俺は代役だ。本来のテロリスト役はあの付き人の女だったはずなのだ——

それならば、星系連合軍賛成派の次の一手はなんだ？

——惑星単位のテロ行為？ そんなに都合良く起きるものか？

「……」

暗闇の中で、デニスは嫌な予感に身を震わせた。

今回の偽装テロ——そう呼んでさしつかえないだろう——は、おそらく周到に用意されていたはずだ。デニスとシエラ・ストームの失踪——たぶん、E S Aもソラも必死で探しているだろう——が不測の事態であっても、それが誤差で済むような次の一手を連中が用意していないはずはない。

ロゼがベルカルチャの席へ寄ってきたのはおそらく偶然ではない。なら、他の手だつてベルカルチャに向けて講じられていると考えてしかるべきだ。

ここしばらくで変わったことはなかったか――

デニスは、必死で記憶をさぐった。なにか――きっと何かあるはずだ。

ヒントは――

「シエラ」

「……はい？」

「君、出身はどこだって言ってたっけ？」

「……デトナ星系の惑星ポルキアです」

「デトナ星系……」

ここしばらくデトナ星系の名をよく聞く。たしか、ディーアとステイーが向かったのも――

『星の涙』 タイムリミット

目覚めは最悪だった。

国際宇宙会議センターの控え室のソファで、ソラは重い頭を押さえながら体を起こした。今日は 星系代表者会議 の四日目だ。

ソラはふらつく足取りで洗面所へと入った。鏡の前で自分の顔をのぞき込む。

「ひどい顔ね……」

ここ二日間、ソラはほとんど不眠不休で事態への対応に追われた。会議の流れは完全に 星系連合軍 結成に傾き、反対を主張するソラに同調する星系も目を追うことに減ってきている。

一昨日の会見でマティトスが 星系連合軍 の結成を宣言したが、実際には会期最終日の共同声明での発表で正規の発足となる見通しなのだ。

色々なことのタイムリミットが迫っていた。

ソラは洗面所を出ると、汗にそぼつた衣類をソファに脱ぎ捨てる。着替えは全てここに持ってきている。予約している高級ホテルには初日以来戻っていない。

「おはようございまっ……と、と、先輩は入っちゃダメ！」

「なんだよ、わああ、失礼しました」

「ああ、ようやく来たわね」

ここしばらくなかった騒々しさに、ソラの顔がわずかにほころんだ。ステイーとディーアが、昨晚ようやくネオ・ニューヨークに到着したのだ。ソラの事を慮って、顔を出すのを朝まで待ってくれていたのだろう。

「なにしているの、早く入ってドアを閉めて」

「ちよ、社長。そんなあられもない格好で。先輩が見えますから服を着て下さい」

「別に、いまさらあんた達に見られてもねえ」

「……先輩、男扱いされてませんよ？」

「……」

しばらくのどたばたの後、小さな部屋の中で三人はソファに収まって額をつき合わせた。

「副社長の消息は？」と、ディーア。

ソラは首をふった。

「警備の目をかいくぐって大会議場を調べてはみたけれど、まだ見つかっていない。ESAも同様のようだけど、連中は大分余裕が出てきているわ」

「……時間が経つほど生存率が下がるからですか？」

「残念ながら正解。爆発による破壊は……良く計算されているわ。二回も爆発があったというのに、星系代表たちの席にはほとんど瓦礫が落ちていないのよ。あれじゃあ爆発がやらせたことがバレバレだわ」

「瓦礫の陰や隙間にいるってことはないんですか？」と、今度はスティーダ。

「私たちも警備隊も、探し尽くしたはずなのよ。瓦礫の上も下も、それからこの国際宇宙会議センター内もね」

ソラが小さくため息をついた。

「おそらくデニスのことだから、シエラ嬢をかばって何処かに隠れて出てこれなくなっただんじゃないかと思うのよね」

「昨日、着いてから色々と情報を収集してみました」

ディーアは、携帯端末からテーブルの上の空間に地図を投影した。「これが最新の国際宇宙会議センターの見取り図です。スティ先輩と可能性をしらみつぶしに見当してみました」

地図の上に詳細なデータの層が重なる。現在の利用登録者、センサー警備室モニター映像などなど。もちろん、ディーアが違法にハッキングしたものだ。

「……結論からいうとですね、シエラ・ストームが大会議場から出た形跡はないんです」

「どういうこと？」

「ほら、ここを見てください。警備室で監視しているサーモセンサーと加重センサーです。いま現在この部屋に三人の人間がいることがわかります。各部屋リアルタイムでわかるようになっていんです。で、当然過去のデータも残っていて、タイムラインでこれを過去三日分検証しました。注目すべきはここです」

デューアが指さしたのは、大会議場の演壇裏の空間。

「おそらく、楽屋です。三日前の20時頃ふたりの人間がいます。シエラ・ストームとマネージャーが関係者ですね。で、20時半にシエラ・ストームが楽屋を出ます」

センサー画像がコマ送りで切り替わっていく。シエラと思われる人間が大会議場の演壇に登った。そして、20時37分――

「大会議場のセンサーはここで消えます」

「爆発でいかれたってことね？」

「おそらく。でも見てください、大会議場の外のロビーや、演壇裏の楽屋なんかのセンサーは生きています。で、もっと遡ったデータと照合して、入った人数と出た人数を数えてみました」

「で？」

「コンサート前に会場に入った人数は2187人。爆発後に突入した警備隊と思われる人数が62人。で、大会議場が封鎖されるまでに出入人数2246人……」

「三人足りない……」

「先に言っておきますと、仮に死体が運び出されても、体温があるならサーモセンサーが感知しますし、加重センサーだって反応します」

それはつまり、いまでもデニスたちは大会議場のなかにいるということだ。

「データが改竄されているって事は？」

「あるかもしれませんが……私達がこれを覗けるっていう前提はないはずですよね？ それに、改竄するなら不足人数は一にしないと

おかしいですよね？」

ディアーの言う通りだ。

「じゃあ、デニスたちは未だに大会議場のどこかにいると仮定しましょう。ホスト国のESAですら気づかない場所は？」

「見取り図を見る限りでは……センサが死んでいるのは大会議場内だけで、演壇裏に入ればもうセンサーが生きてますし……」

「もともとセンサーの設置されていない空間はないのか」とスティ

「ないことはないでしょうけど、それはひとが入らない空間ですから」

「爆発の瓦礫で塞がれてしまった場所はないのか？」

「簡単にいいですけど、瓦礫のデータをここに重ねるのは至難の業なんですよお……」

なんのかんの言いつつも、ディアーの指はなめらかに端末を操作している。見取り図の映像に、ワイヤーフレームの瓦礫が上書きされる。

「警備室のサーバにあった現場写真からの類推ですからおおざっぱですけど……」

瓦礫の地面や壁との接触面が赤く点滅する。

「もともと、会議場内に隠れる部屋なんてないと思うんですけどお」「そうだよな。だから搜索範囲は国際宇宙会議センター内に広がったわけなんだろう？」

いまや詳細に拡大表示された大会議場の見取り図を、ソラがじつと凝視する。爆発のあった大会議場は、逆円錐形のすり鉢状になっていて、出入り口は幾つもある。正面出入り口前は広いロビーとなっていて、ソラとマティスの言い争いがあつた場所だ。出入り口はどこも二重扉になっていて、扉と扉の間の空間は部屋と言っても差し支えないが、そこは既に調べ尽くされている。

「ねえ、この点滅はなに？」とソラ。

瓦礫が演壇の床に接している部分が青で点滅していた。

「青は隣の空間との接触面……ですけど、たんなる床ですね。あれく？ パラメーターの設定間違えたかな。床下にひとの入れる空間なんて……」

三人が顔を見合わせた。

「まさか……」

夜になるまで待った方がよいのではないか、という意見もあったが、爆発からすでに六十時間近くが経過していて、状況は待ったなしになっていた。

「灯台もと暗しっていうけどさ……ことわざってのはいつの時代も偉大だな」

「なにぶつぶつ言ってるんですかあ？ 気持ち悪いですよ、先輩」

大会議場前のロビーにやってきたのはステイーとデイーアのふたりだった。ソラやゲランでは顔が売れすぎていて目立つ。ステイーとデイーアも、身分はベルカルチャ王国情報局技官ということで会場入りしているが、そこは小者のふたり、周りから気にもされていない。若干、デイーアのピンクのレディススーツが浮いているが――それはご愛敬である。

大会議場は未だ封鎖されていた。数人の警備隊員が、出入り口の扉前、それから他の出入り口へと続くスロープの入り口に立っている。

デイーアが突然正面入り口に向かって駆けだした。警備隊に緊張が走る。

「……シエラさま――!!」

呆氣にとられる警備隊員を後目に、デイーアは正面入り口の前でひざまずくと、辺りはばからず泣き叫んだ。

「なんで？ なんで死んでしまったの？ ねえ、どうしてよ。シエラ――」

「なんだお前は。ここは立ち入り禁止だ」

「ここなんでしょ？ シエラさまがテロにあったのって」

「あ……ああ」

「シエラさまは私の命なの。私も後を追わなくちゃ」

ディーアは警備隊員のひとりにとりつく、腰に差さった拳銃を指さした。

「ねえ、それで私を殺して頂戴」

「おいおい、落ち着けよ……気持ちわかるが」

「シエラ――」

「困ったなあ」

ロビーにいた警備隊員が全員ディーアの周りに集まってきた。ディーアの狂乱ぶりは、レディススーツのスカートがめくれあがっても気づかないような徹底ぶりで、警備隊員たちは、困った風を装いつつ鼻の下をのばしている。

そして、その様子を後目に、スティーが人のいなくなったロビー左側の出入り口へと近づいた。一気に扉を引いて中に入ろうとするが――

「鍵か。でもこの程度なら」

鍵は電子ロックではなく簡単なシリンダー錠だった。

ディーアの騒ぎはますます大げさになっている。

スティーは素早くピッキング道具を取り出すと、ものの数秒で鍵をあけ、滑るように扉の内側に滑り込んだ。

扉は二重になっていた。しかし、一枚閉めただけでもロビーの喧噪は完全に遮断される。小さな足下灯がついているだけで、内部はかなり暗い。二枚目の扉に鍵はかかっていなかった。

スティーは慎重に大会議場のなかへと進んだ。

そこは、予想していたほどの酷さではなかった。たしかに、演壇の上には天井から吊ってあったであろう大型モニタが落ちてひどいことになっているが、そこをぐるりと囲むようになって座席は細かな埃が積もっている程度だった。本気で爆破テロが実施されれば、こんな規模ではすまないはずだ。

ステイーは会議場を横切って、演壇の瓦礫に近づいた。そして、慎重な足取りでその床を調べ始める。フルオーケストラのコンサートも開催できるだけの広さをもった演壇。上質のオーク材で作られたその床が、落ちてきた天井の部材で無惨な姿になっている。それでも床が抜けていないのは、そのオーク材が金属で裏打ちされているからだ。そして、その下には――

「あつた！」

ステイーは、演壇の床に小さな切り込みを見つけた。それは、奈落と言われる舞台装置。床下からひとがせり上がってきたり、逆に床下に引っ込んだりするための装置だ。このひと一人ぶんほどの板が機械仕掛けで床に潜っていくようになっていたのだ。

警備隊がここに気がついた様子はない。およそ舞台装置になど興味のなさそうな連中では、思い至らなかったというか――それとも、ここはもう使っていないという事なのか。

とにかく、どうやって入ったのかは判らないが、デニスとシエラ・ストームが隠れているのはこの下以外になさそうだった。

『星の涙』 救出

シエラは、目を閉じているのか開いているのか、それすらわからなくなっていた。いったいどのくらいの時間が経過したのだろうか。デニスと会話を交わすことも減ってしまった。話題が尽きたという以上に、体力が尽きてしまっている。

こうしていると、昔のことをよく思い出す。これが走馬燈ってやつなんだろうか。

シエラは惑星ポルキアの農家の三女に生まれた。姉がふたり、兄がふたり。可愛がってもらったが、家はまずしかった。羊飼いのアルバイトをして家計を助けたものだった。羊たちを引き連れて草原で歌った歌、それがシエラの歌の原点だ。

六歳のとき、デトナ音楽祭のジュニア部門で最優秀賞を受賞した。これで自分は歌手になれるんだと思った。農家の三女は、いずれ家を出なければならぬ。ポルキアの一般的な感覚でいうなら嫁に行くのが普通だった。でも、歌手になれば、もともと世界が開ける。シエラの夢は大きく広がった。

しかし、ありふれた話だが、世の中はそんなにうまくはできていなかった。歌唱力抜群のシエラだったが、作る歌はありきたりだった。結局、学校を卒業する十四歳までは自由にやらせてくれた両親も、それ以降、歌を続けることを許してはくれなかった。

そんなときに出会ったのが、十歳年上の作曲家を自称する男だった。男はシエラに、歌を提供するから一緒にバンドをやらないかと言った。その男のつくる曲は、凡庸から抜け出せないシエラの曲とは違って、とても魅力的だった。シエラは夢中になった。そして、男の仲間たちとともに作ったバンドは一躍、惑星ポルキアのアマチュアバンドの頂点に立った。

これで、やっと歌手への道がひらける——そう、シエラは有頂天になっていた。

そして、音楽以上に、男にものめり込んでいった。

しかし——破局は突然に訪れる。

「デビューできないってどういうこと？」

つめよるシエラに、男は視線をそらしながら答えた。

「俺たちがやっているのはすべてコピーだからだよ」

「な……」

田舎娘のシエラは知らなかったのだ。広い宇宙には、訊いたことのない音楽がたくさんある。地元のライブハウスで演奏している分にはそれでもいい。いや、むしろ下手なオリジナル曲よりその方がよるこばれる場合すらある。

でも——

「あなたが作曲してるっていったじゃない！」

「ほんの冗談だったのさ。有名な曲だったし、すぐに気付くと思っただんだよ。結局言い出せなくなっちまってさ」

シエラは男のもとを飛び出した。惑星ポルキアは、町中からちよつと行けばすぐに草原地帯に出る。満点の星空の中を息が上がるまで走ったシエラは、草地の真ん中に身を投げ出した。

降るような星の光——そのすべてが泣いているように思えた。

こんなに密集しているように見える星たちなのに、お互いに手が届かないほど離れているなんて——どれほど、寂しいことだろう——

そうして、惑星ポルキアと対になる惑星ペルキスのことを思う。

太陽を挟んだ向こう側にいるポルキアの双子星。

永遠に交わることはない——哀しい宿命の兄弟——いや、恋人か

♪悠久の星空で 星たちは今日も手を伸ばし

そして、切なく あふれる輝きが

星の——星の涙

結局——わたしの手は、どこにも届かなかったのかな。

シエラの意識が、深い暗闇に落ちかけたその時――
鈍い衝撃とともに、暗闇が避けた。

実に六十時間ぶりに光は、たいした光量でなかったにもかかわらずデニスの瞳にきりきりと染みた。

「副社長！」

上から降り注ぐ声はディアーアのものだ。

「なんとか無事だよ。ずいぶんと遅かったな」

「すいません。色々手間取っちゃって」

天井に大きな穴が空いていた。天井――それは、大会議場の演壇の床だ。軽い音を立ててロープが上から振ってくる。すぐにステイ―とディアーアが下りてくるだろう。

「ディアーア。目が明りにまだ慣れないんだ。ライトをこちらに向けないでくれ」

「はい」

ディアーアの声があつという間に目の前までやってくる。

「副社ちょ……」

デニスは人差し指を口に当てると、黙っているというジエスチャ―をした。ディアーアが無言を答えとして返してくる。

「そっちがシエラ・ストームだ」

「うわっ、なんてエロティックな格好。ちょっと副社長。手えつけてないでしょうね？」

「……」

「なんで無言なんですかあ？」

「疲れてるからだよ」

シエラは無言だった。天井から入ってくる光におびえている。

「もう大丈夫ですよ。シエラさん」

ディアーアは、シエラの背後にある壁に手をついた。そして、壁に

携帯端末をかざす。小さな電子音がして、ゆっくりとその壁が横に動いた。ドアだった。

「裏の搬入口に通じた通路です」

「自動開閉装置が生きてたのか？」

「いえ……来る前にハッキングして復活させておきましたあ」

デューアが得意そうに指でVサインをつくる。

「行く先の算段はあるのか？」

「搬入口にベルカルチャ王国駐ネオ・ニューヨーク大使館の車がくる手はずになってます。今回の爆破用の火薬とか、全部大使館にお世話になりました」

「そうか……シエラを連れてちよつと先に行け」

「はい。待ってますよう」

「ああ」

デューアがシエラを抱え上げると通路の中に消えた。

ふうつ、とデニスが大きなため息をついたところに、ロープを伝ってステューが下りてきた。手にしたライトをデニスに向けて、そして絶句する。

「副社長……それは……」

「ん？ ああ、シエラを襲って殺そうとしていた奴だ」

デニスの後ろには、ロゼ・ファルディの付き人だった女の死体が横たわっていた。

『星の涙』 暗闇の真実

一回目の爆発の直後。

ソラを探して演壇中央に駆け込んだデニスは、そこに倒れるシエラ・ストームを見つけた。爆発で耳をやられていて、周囲の状況がいまいち現実味をかいていたが、デニスはシエラに駆け寄り、その体を抱き起こそうとした。と、背後に殺気を感じた。

「！」

必死でかわした視線の先に、大型のナイフを手にしたロゼの付き人の女がいた。女はデニスにはかまわず、一直線にナイフをシエラへと振り下ろした――が、間一髪、デニスの蹴りがそのナイフを蹴り飛ばした。

一瞬の躊躇も見せず、女は左手に持っていたリモコンのようなものを押す。と、天井付近で二度目の爆発が起こった。

デニスは音が聞こえていなかったことが幸いした。轟音に驚くことなく、冷静に女の動きを目で追うことが出来た。女は、演壇の中央に唐突に開いた穴に飛び込んでいった。考える暇もなく、シエラを抱え上げたデニスは、女の後を追って穴に飛び込む。

穴から二メートルくらいのところまで、下降から上昇に転じてせり上がってくる床板にぶつかり、その勢いで穴の底に放り出される。そこには丁度女がいて、シエラを含めた三人がもんどり打つ格好となってしまった。

せり上がっていく床板が、穴からの光を少しずつ塞いでいく。と、大きな衝撃とともに床全体が揺れた。爆発により壊れた天井が落ちてきたのだらう。塞ぎきる前の穴から瓦礫が幾つも飛び込んで来て、そのひとつが女の頭に直撃した。

そして、せり上がった床板は完全に三人が通ってきた穴を塞ぎ、床下の空間は、わずかな非常灯の灯りのみとなった。

瓦礫の直撃をくらった女は、しばらく痙攣していたが、まもなく

事切れた。おそらく殺し屋だっただろう女の、なんともあつけない最後だった。すぐ脇に倒れたシエラ・ストームは気を失っているだけのようだった。

デニスは女の脇に転がるリモコンのようなものを拾い上げた。明らかに手製の装置。手のひらに収まる程度の塩化ビニールの長方形の箱に、無機質なボタンが三つ並んでいる。爆発の一回目と二回目、そしてこの奈落の昇降装置の起動ボタン——と考えればつじつまが合う。デニスは慎重に一番下のボタンを押してみた。それから他のふたつも押してみた。しかし、昇降装置はピクリとも反応しない。落ちたときに壊れたか、それともこの装置を使えるのは一回だけなのか——

デニスは女の死体をみた。鍛え上げられた筋肉と獣のような目——シエラを仕留め損ねたときの躊躇のない動きを思うと、女はプロに違いない。とするならば、この昇降装置が一回しか使えないことは充分にあり得る。プロは依頼主すら信用しない。逃走経路は自分で用意し、それを誰にも伝えないのは当然の対応だ。事前に装置に細工をして、自分が使う一回に限って機能するようにしていたのだろう。

女がここを脱出ルートに選んだと言う事は、よほど普段使われていないのだろうか。

デニスはわずかな灯りで空間を検分する。大会議場の演壇は非常に大きかったが、ここはそれほどでもない。空間の半分は昇降装置が収まっていて、ひとはせいぜい数人しか入れないだろう。もっとも、昇降装置自体が一人乗りサイズなのだから、それは当然と言えた。装置の反対側の壁には扉があるが、自動開閉装置は機能していなかった。使っていないから切つてあるのか、専用のカードキーでも必要なのか——例のリモコンをかざしてみたがダメだった。女の体を検分してみたが、キーのような物は見つけられなかった。

「ふーっ」

デニスはひとつ大きくため息をついた。

まさに、進退窮まっちゃった。

狭い空間に、死体と歌手――

女は明らかにシエラ・ストームを狙っていた。刺殺が失敗してすぐに逃げたのは、どっちにしろシエラ・ストームは瓦礫に潰されると知っていたからだ。念には念を入れたシエラ・ストームの殺害計画――このテロを画策した人間にとって、シエラ・ストームはもう生きていてはいけないのだ。ならば――

「なんとしても、生きて連れ出さなけりやな」

彼女の存在は、このテロに対する切り札となりえる。

デニスは、女の死体を昇降機の脇までひっぱると、そこから一番距離のある所にシエラを横たえた。

そして、瓦礫のひとつを掴み、それを自分の右の二の腕に叩きつける。二度、三度――そして五度目で、皮下でパチッという破裂音がした。

つづいて、同じ瓦礫を非常灯に叩きつける――一瞬で、空間が暗闇に沈む。

それから、死体とシエラの中間に自分の位置を定めると、ゆっくりと腰を降ろした。

シエラ・ストームに、死体といっしょにいることを気づかせてはならない。

そして、助けが来るまで、何としてもシエラ・ストームの正気を保たねばならない。

デニスは左手で二の腕をさする――ここに入っているGPS端末は脱出のための心強い装置

だが――その信号をテロリストに察知される恐れもある。テロリストはおそらくESAに絡んでいるだろう。

最善と思われることはやった。

あとはソラを待つばかりだ。

「たのむぞ、ソラ」

そして、デニスの長い戦いが始まった。

目を覚ましたシエラは、状況におびえ、女の死体には気づかなかった。

デニスは、あくまでもここが倉庫か何かだと思い込ませることに注力した。

ベルトのバックルが分解できるのは本当だが、扉の鍵穴の話はうそだった。ブラジャーのワイヤーなど、結局そのへんに放り出している。シエラ・ストームの気を状況から逸らし、自分の方に、死体の方に近づいてこないようにするための方便だった。

暗闇で六十時間、シエラの精神はだいぶ弱ってしまったが、それでも、良く持ったと思う。

これが死体と一緒にだとなっていたら、どれだけでもっていたか――

『星の涙』 脱出

ステイーの肩を借りて、デニスはかろうじて部屋の外に出た。狭い埃っぽい通路を進むと、突き当たりの扉の前でディーアが待っていた。

「あの昇降装置は落成依頼一度も使われていません」

「なぜだ？」

「答えはこれです」

ディーアが扉の電子ロックに暗証番号を打ち込んだ。軽い電子音がしてロックが解除される。音もなく扉が横に開いた。

「なんだこりゃ？」

デニスが声をあげ、ステイーは呆気にとられていた。

目の前にあったのは壁。扉の向こうが壁でふさがれていた。

「この向こうは、会議棟と管理棟を結ぶ通路です。国際宇宙会議センターを作るとき、会議棟と管理棟を別の業者が施工したようなんです。突貫工事だったらしく……出来上がってみたらこんなことに」

「……」

「直そうって話はあったらしいですけど、予算とか、申請とか、責任問題とか……結局そのまま。奈落は使わないというか、使えないって事に」

「あの女は、ここからどうやって出るつもりだったんだ？」

「たいした壁じゃありませんから、ちよつと時間をかければナイフでも崩せるかも知れませんが、誰か仲間が外に来る手はずになっていたのかもしれませんが。でも、いまはそんな暇はありませんので……うふふふ」

ディーアがこういう風に笑うときはろくな事を考えていない。

「先輩、副社長を負ぶってください。一気に行きますよ」

デニスは、不本意ながらもステイーに負ぶわれた。体力が激減している現状ではいたしかたなかった。

「それからこの覆面で顔を……いいですか？　危ないから離れてください！」

どこに隠していたのか、ディーアは指向性爆弾を壁に貼り付けた。そして、ケーブルをひいて距離を取ると、一気に爆破ボタンを押す。轟音とともに壁が外に吹き飛び、白いライトに照らされた通路があらわれた。

「そりゃあああああああ！」

ディーアがシエラを負ったまま通路に飛び出す。それにステイたちが続く。一団は、通路の先にある裏口と思われる扉を一気にぬけた。

暗闇に慣れたデニスの目には、屋外の光は強烈すぎた。思わず目をつむる。

「うりゃあああああああ！」というディーアの叫びに続いて、周囲で怒号が渦巻く。

鋭いタイヤの音が響いたかと思うと、金属がぶつかり合う嫌な音がひびく。耳元でひゅんひゅん聞こえる風切り音は銃弾か。

「早く乗って！」

どこかで聴いたことのあるような声がして、デニスを負ったステイが方向転換するのを感じる。そして、デニスの体は革製の椅子らしきものの上に放り出された。なんとか車まで辿り着いたようだった。

「出して！」とディーア。

ぐん、とからだに重力がかかり、車が発進した。そこでデニスはようやく目をあける。大型ワゴン車の後部座席だった。席が向かい合わせになっていて、後部座席だけで六人は乗れるサイズだ。

「これでも喰らえー！」

覆面をつけたままのディーアが窓から乗り出すと、車を追ってくる会場警備隊に向けて催涙弾を三つほど投げ込んだ。

警備隊の怒号が遠ざかっていく。

しばらくタイヤを軋ませて右に左に走っていたワゴン車だったが、

大通りに出るとようやく落ちついて走り出した。

「もう大丈夫。覆面もとって大丈夫ですよ」

運転席の男が大きな声でいった。

「お久しぶりです、デニス殿下」

「君か。手間かけるな、ロツサ大使」

「いえ、お役に立てて光栄です」

豪快に笑ったのは、ベルカルチャ王国の駐ネオ・ニューヨーク大使マエナ・ロツサだった。

* * *

「次の荷物、打ち出しちゃっていいですか？」

小惑星リュエスに設置された大型マストライバーの制御室で、オペレーターのエリルは上司に訊ねた。

「受け取り側からの連絡はきているか？ 良く確認しろ」

「はい」

既に勤務終了時間はまわっている。緊急だとかで突然飛び込んで来たこの荷物のお陰で、エリルは不本意な残業を強いられていた。

「ねえ課長？ 今日って残業代つきますよね？」

「残業代は一時間単位だ。三十分ではつかん」

「ええ？ なんですかそれ、信じらんない」

「何が信じられないんだ。就業規則にそう書いてあるだろ？」

「だって、あの荷物、超特急便じゃないですか。特急料金に私の残業代も入っているってことでしょう？」

「いやなら、さっと仕事終わらせる。座標の確認はおわったのか？」

「ちえーっ」

マストライバーとは、大型の投擲機である。資材やコンテナそのものを大型のレールで打ち出してしまふ装置で、仕組みはかなり荒

っぽいものだが、移動物そのものにエンジンや燃料を搭載する必要がないことが費用の圧縮につながっている。安いことが最大のメリットなのだ。

惑星開発の現場などに資材を送る場合、輸送船を使うより手つとり早い。

いま、小惑星リュエスのマスドライバーが打ちだそうとしているのは大型のコンテナだ。依頼元はベルカルチャ惑星開発会社。届け先はデトナ星系の惑星ペルキス衛星軌道。受け取りはデトナグループとなっている。中身は大気組成改良剤と土壌改良剤だ。

「毎回毎回座標の確認って……なんかあったことなんてないじゃない」

マスドライバーは荷物を投げるだけなので、一度放り出したら軌道修正がきかない。当然の事ながら、打ち出し前の確認には万全を期す必要がある。

「はい、座標確認完了。惑星ペルキス……？ どこだそれ？ ……」
確認しました。打ち出し準備完了。いいですか？」

「うむ」

「発射！」

エリルの操作にあわせて、涙滴型のマスドライバー用コンテナがゆっくりと加速を開始する。まるでミサイルのような形だが、これは大気のある場所からマスドライバーを使用するときのことを考えてつくられたデザインだ。真空から打ち出すリュエスのマスドライバーの場合、荷物の形は問わないのだが――規格の統一が経費を抑えてくれるのは世の常だ。

そうこうしているうちにコンテナは加速し、小惑星の重力を引きちぎって星空に飛び出していった。

「さーで、終わった。課長、私のタイムカード、一時間残業したことにしておいてください」

「おいおい。勝手なこと、」

エリルが右手を上げて上司の言葉を遮る。

「秘書課のラータとのこと、言いふらしちゃおっかなあ……」

「な……あれはっ……」

「あれは？」

「……わかった。気をつけて帰りなさい」

「はい。お疲れ様です」

ここでもし、エリルが課長かのどちらかがもう少し仕事熱心だったなら——事態は違っていたかもしれないのだが、そんなことは誰も知るよしもなかった。

* * *

E S A所属の広域宇宙観測所。

三六〇度全方向へ向けて用意されたアンテナで、宇宙のあらゆる現象を観測している。学術目的がほとんどだが、E S Aに益する情報を収集する場所でもある。

壁面をモニターが埋め尽くしたメイン観測室で、観測員がひとり立ち上がった。部屋を出ると、観測室の隣に並ぶ一人用の通信ボックスへ入った。ときばきと何処かへ通信を繋ぐ。繋がった先からは映像は来ず、低い男の声のみが応答した。観測員は声を潜める。

「……たったいま、小惑星リュエスからの打ち出しが確認されました」

「到達にはどのくらいかかる？」

「途中問題がなければ約二十一時間です」

「ちょうど声明発表のころか……」

「なんです？」

「いや……ところで、打ち出した荷物が途中で宇宙船にぶつかったりしないものなのか？」

「マストライバーで打ち出す荷物にはビーコンが仕込んであります」

すからね、船のほうで避けます。それに、宇宙って以外と粗ですから。確率としては低いですよ」

「ひとが乗ることもあるのか？」

「エンジンを積んだ宇宙船を打ち出すなら乗れますよ。でもコンテナにひとは乗りません」

「わかった。ご苦労だった」

「でも、あんなコンテナひとつをこんなに大げさに観測するなんていったい何なんです？ 命令コードがこんなに高いなんて」

ある日、観測員宛に送られてきた観測指示の命令書は、署名がなかったにもかかわらず、ほぼ最高ランクの命令コードだった。

「好奇心は猫をも殺すぞ。他言は無用。今後の観測もやめておけ」
低い男の声がわずかに笑った気がした。観測員が絶句しているうちに、通信は切れてしまった。

『星の涙』 最終日

ベッドの上でデニスが目覚めた。傍らにマエナ・ロッサ大使がいた。

「お目覚めですか？ 殿下」

「会議のほうはどうなっている？ 俺はどのくらい気を失っていた」

「十二時間くらいでしょうか。今日は会期の最終日です。星系連合軍の結成をとめることができるかの瀬戸際です。陛下とマテイトス大統領の一騎打ち状態で、関心のすべてはそこに集まっています」

「ここは国際宇宙会議センターから三十分ほど離れたところにあるベルカルチャ大使館の一室だ。ワゴン車でここに辿り着き、門をくぐったところでデニスの記憶は途切れていた。」

「シエラ嬢は死んだことにされて、E S Aはそれを餌に 星系連合軍 の結成を押し進めているってところか」

「ご明察です」

デニスはベッドの上に体を起こした。

「ご無理をなさらずに」

「いや大丈夫だ。シエラはどうしている？」

「別の部屋にいます」

「案内してくれ」

デニスはベッドから下りると、揺れる体を何とか支えて歩き出した。

気がついたら、シエラは柔らかなベッドに寝ていた。

着ている物は清潔なパジャマで、体も誰かが拭いてくれたようだった。

「まさか……デニスさん？」

まだ半分寝ぼけた状態で、シエラはまだ見たことのないデニスの

ことを考えた。

「あらあ、起きたの？」

「？」

ベッド脇からシエラを覗き込んだのは、ピンクのレディススーツに身を包んだボーイッシュな女性だった。くるくると瞳がよく動く。

「あの、ここは？」

「ここはベルカルチャ大使館」

「ベルカルチャ？」

「そう。もう大丈夫ですよ」

大丈夫——その言葉が少しずつ心に染みていく。もうだめだと思つたのに——

「それでえ、シエラさん。あなたに質問があります！」

「？」

「副社長と、どんなことがあつたんですかあ？」

「副社長？」

「そう。デニス・ローデンスキー、ベルカルチャ惑星開発会社副社長」

「デニスさんは……」

「エッチなことされなかった？」

「あ、あの……」

「やめろ！ ディーア！」

シエラがしどろもどろになっているところに、ここ数日慣れ親しんだ声が割って入った。

「まったく、お前はいつもそんなことばっかり言ってるな」

「だってえ、副社長が何も話してくれないんですもの」

「何もなかったって言っただろ」

「本当ですかあ？ シエラさんの反応を見ているとそうとは思えないんですけど」

シエラはぎくつと肩が上下するのを自覚した。ディーアと呼ばれた女性がこちらをじっと見つめている。

「あ、あの……デニスさん？」

「おはよう。シエラ」

「おはよう……ございます」

初めてその姿を見るデニスは、想像していたよりずっと優しそうな風貌だった。ふわふわとした金髪と碧い瞳。自分とは不釣り合いだ、という想いがすぐに頭をもたげてきて、シエラは慌てて頭を振った。

「体はどうだい？」

「だ、大丈夫……」といったところで、シエラの腹がぐうと鳴った。シエラは真っ赤になってうつむいた。

「はははは。うん、元気そうだね。ディアー、オートミールでも用意してくれ。胃に優しいものな」

「はい」

ディアーが出て行くのを目で追って、それからデニスはベッド脇に腰を下ろした。

「シエラ。君はいま、死んだことになっている」

「え？」

デニスは、現在の 星系代表者会議 のことを語った。シエラ・ストームの死をきっかけに 星系連合軍 結成の機運が高まっていること。テロはベルカルチャが仕掛けた事になっていること。しかし、その黒幕はおそらくESAであること。

「君は犠牲者だ。 星系連合軍 という城を築くための生け贄にされたんだ」

「それはベルカルチャも同じなんじゃ……」

「俺たちは覚悟を持って政治をやっている。どちらかといえば、俺たちは君よりESAに近い人種だ」

「……」

「だから、君にひとつお願いがある。君を政治的に利用するお願いだ」

「ずるいです」

「え？」

「やっぱりデニスさんはずるいです。そんな風に言われたら、断れないじゃないですか」

「……」

「わたし、わかつちやいました。デニスさん、自分が悪者みたいに言ってるけど、でもそれって、ソラ陛下のためなんですよ？」

シエラはベッドの上に上体を起こした。そしてデニスの瞳を覗き込む。

「星の女王ソラ・ベルカルチャ陛下のためなら、デニスさんはどんな悪者にもなれるんですよ？」

「ソラは周りのひとを惹き付けてやまない何かがある。俺はもう随分前に、彼女に絡め取られてしまったんだよ」

シエラはしばらく下を向いていた。小さな手で毛布をギュッと握りしめて。

「……わかりました。デニスさんの願いを聞きます」

「そうか、」

「でも！ でも、ひとつだけわたしからもお願いがあります」

「できることならなんでもするよ」

「歌を……歌をつくってもいいですか？」

「歌？」

「デニスさんとソラ陛下の歌です。それを作ってもいいですか？」

デニスは小さく頷いた。それから、シエラにお願いの内容を説明する。

「わかりました」

「じゃあ、頼むよ」

デニスがベッドの前から離れる。その背中が、シエラにはとても遠く見えた。

「あの！」

「ん？」

また会えますか？ 連絡先を教えてください？ こんど一緒に――

「……歌のタイトルは決まっているんです」

「ほう。どんなタイトル？」

「……「星の絆」です」

「お前たち、デトナ星系での仕事はどうなった？」

ベルカルチャ大使館の応接室で、デニスがスティーとディーマに質した。

「え？ 結局受注はできませんでした、けど……」

怪訝そうなスティーにディーマが続ける。

「一応、資材の発注はいくつか受けました。大気組成改良剤と土壌改良剤」

「受注書類を見せろ」

「いまはそれどころでは……」

「いいから見せろ」

なにがなにやらわからないふたりを後目に、デニスはスティーが差し出した携帯端末に目を凝らす。

「マストライバーで緊急発送？ ディーマ。この打ち出し座標を確認しろ」

「え？ 惑星ペルキスですよ」

「いいから、到着時間の宙域座標を確認しろ。至急だ」

「？ ええと……あれ、これは……惑星ポルキア？ ……あれ？」
ディーマが困惑顔をあげた。

「この到着座標は、惑星ポルキアになってます。え？ あれ？ どういうことですか？」

デニスは苦虫をかみつぶしたような顔をした。

「これがESAの奥の手だ。惑星ポルキアとペルキスは双子惑星だ。太陽を中心に交転軌道の両端に位置するという非常に珍しいケースなんだ。お前たち、この座標をよく確認しなかっただろ？」

「……」

もし、ステイーとディーアが自分たちで惑星ペルキスのことをちゃんと調べていたなら、こんな簡単なデータの改竄にひっかかったりはしなかっただろう。観測データはすべて事前に用意されていて、ふたりはそれを鵜呑みにしてしまった。

「相手が一枚上だったんだな。公転軌道は間違いなく惑星ペルキスのものだが、同一軌道上には有人惑星ポルキアも回っている。そして、ほんの一部の数値をかえただけで、その目標はペルキスからポルキアへと差し変わる。マストライバーで打ち出したコンテナが、誰にも受け取られずにポルキアに到達したらどうなる？」

ステイーとディーアが蒼くなった。

「有人惑星に大気組成改良剤がばらまかれれば……」

「立派なテロだな。発注はベルカルチャ。デトナはしらばっくれるって寸法だ」

レゼットのひとを食った態度とオンボロ惑星調査船。すべては仕事をおざなりにさせ、このことをお膳立てしていたということか。直後のテロ騒ぎで、荷物の発送にストップがかからなかった。既にマストライバーから荷物が打ちだされてしまっている。

「コンテナが到達するまでの残り時間は？」

「……八時間です」とディーア。

「なんとしても止めるぞ」

『星の涙』 対決

国際宇宙会議センターの第一中会議場。場所を変えた 星系代表者会議 は最終日を迎えていた。

星系連合軍 の結成は決定的だった。焦点は各星系がそれに参加するか否か、という点に移っている。会議の段取りとしては、参加の意思を確認して、参加星系のみで詳細を検討する——ということになるのだが、その一歩手前でソラが粘っていた。

「そもそも、なぜ軍隊なのか？ 単なる 星系連合 を飛ばしていきなり軍隊をつくろうという考えが理解できません。その点をもう一度、ここにいる全員にわかるようにご説明願えますか？」

ソラの質問に、提案者たるジョージ・マテイトスESA大統領が立ち上がる。

「何度でも説明させて頂きます」

マテイトスは、手を変え品を変え議事の進行を抑えようとしてくるソラに、嫌な顔をひとつ見せない。内心がどうであろうと、その粘り強さは驚嘆に値する。

「まず、 星系連合 を飛ばすとおっしゃるが、その認識がおかしい。いまこの 星系代表者会議 に参集している私達は 星系連合 と呼んで差し支えない集まりではないのか？ そこに新たに「連合」という枠を設けよ、とおっしゃるなら、それこそ利権のための組織だという謗りを免れないでしょう」

会場内から拍手が起こる。

「そもそも、ベルカルチャの女王陛下は軍隊というものを色眼鏡で見えておられる。訓練された組織だった行動力と、常に動かすことのできる計算されたパワー。哀しいかな、この広い宇宙では、大きな事故が後を絶ちません。そういう事態に対処する力は、常日頃から用意しておかなければならない。これは一国の、一星系の枠を越えた、人類全体の問題なのです。なるほど、もし連合軍という言葉が

生理的にいやだとおっしゃるのなら、人類軍という名称に変更するのもやぶさかではありません」

マテイトスがほくそ笑みながら席に着く。

「……人類軍で、相手は宇宙人か！」ソラが小さく呟く。

「よろしいですか？ ベルカルチャ代表？」

こちらはいらだちを隠せていない議長が、ソラに質した。

「まだ質問があります」とソラ。

「……どうぞ」

「ESA代表、マテイトス大統領にお伺いします。シエラ・ストーム嬢の搜索はどうなっていますか？」

マテイトスが立ち上がる。

「それはいまの議題に関係があるのですかな？」

「もちろんです。大統領はおっしゃいましたよね。我々は目の前でシエラ・ストーム嬢を失った、と」

「言いましたよ」

「その根拠はなんですか？」

「陛下もその目でごらんになったでしょう？ 二度目の爆発でモニターが落下した。彼女はあそこにいたんです。希望にすぎりたい気持ちは分かりますが、現実を直視せねばなりません」

「遺体も出ていないのに亡くなった確信があるのですか？」

「ふむ。そのおっしゃりようでは、まるでシエラ嬢の消息を知っていらっしゃるようだ」

「話をすり替えられては困ります。大統領、あなたを見ていると、シエラ嬢の搜索に本腰が入っているとは思えない。 星系連合軍でシエラ嬢の敵を討つというのなら、何よりもまずシエラ嬢を探すことに全力をあげるのが普通です。その様子が見受けられないということは、シエラ嬢のことは単なる方便に過ぎないではありませんか？」

「おっしゃる意味が分かりかねます。まるで、我々がシエラ嬢を手掛けたように聞こえてしまう」

「そうですか」

「……否定しないのですかな？」

「何をですか？」

「面白い……」

マテイトスの目がわずかに座ったように見えた。

「議長。私からも発言がある」

議長はうんざりした様子でマテイトスの発言を許可した。

「テロの後の会見で、テロリストの目星がついているということを私は申し上げた。それをこの場で公にしようと思います。テロリストの疑いがあるのは……そこにいるベルカルチャ王国！」

会場内にどよめきが走った。会場中の視線がソラに集まる。その視線を受けながらソラが口を開く。

「国際舞台でそれを口にしたからには、相応の根拠があるのでしょうか？　大統領。これは最大級の侮辱ですよ」

「理由は、陛下が捕まえたと称する女テロリストだ。彼女はベルカルチャ王国の依頼でテロを行ったと証言した」

「彼女の証言に証拠があるのですか？」

「証拠？　我々の取り調べが信じられないというのですか？」

「そもそも、それならば私が彼女を捕まえたりしないでしょう。しかも、取り調べには誰も立ち会っていない。証言の信憑性は確認のしようがありません」

「それに加えて、状況がすべてを物語っている。あの時、ベルカルチャ代表团は二名が大会議場にいた。その後、大会議場封鎖時に出て来たのも二名……」

「そのチマチマした話はもういいです」

「なんですと？」

「私が副代表の代わりにテロリストを招き入れたって話ですよ？　それについては、大会議場の監視カメラの映像で確認ができるはずです。もっとも、映像をおさえているのもそちらですから、これだって改竄の可能性は捨てきれませんけれど。とにかく、大統領、

あなたの言い分は言い掛かりの域を出ません。そんな薄弱な理由で一國をテロリスト呼ばわりしたら、民衆の支持は得られない」

「勘違いされては困るのだが、今回のテロに対するために 星系連合軍 を作るのではない。 星系連合軍 まずありきなのです」

「あら、そうでしたか。では、民衆の支持は得られなくてもそれは必要だと？」

「理由は先ほど申し上げた」

会場はざわざわと落ち着かなかった。ソラとマタイトスの議論は堂々巡りで、どうあがいても出口が見えそうにない。

「先ほどのテロリスト発言を撤回してください」

「あくまでも疑いがあると言っただけだ。撤回することなど何もない」

「……そうですか。では、ここでひとつ資料を提出させて頂きます」とソラ。「現在の宇宙重工業のシェアです」

ソラの隣に座るگران宰相が端末を操作すると、会場のメインモニターに円グラフが大写しになった。

「宇宙重工業……つまり、宇宙船、宇宙ステーション、惑星開発用重機などの生産についての星系別シェアです。ごらんの通り、ESAのシェアが68%と圧倒的です。続いて、軍需産業シェアです。銃火器は、通常星系に括られないいわゆる単一企業星系のシェアが圧倒的で、ESAは22%。そして今回、 星系連合軍 なるものを作るとなると、このふたつを統合して考える必要があるわけです。宇宙軍需産業とでも命名しましょうか。すると……」

会場がどよめく。

「宇宙軍需産業の64%をESA籍の企業が占めることになります。軍の設立には途方もない新規の投資が必要になります。みなさん、いいですか？ 星系連合軍 に参加するという事は、設立資金を拠出するということです。それが最終的にどこに行くのか、それをよく考えてください。テロリストを無理矢理に作り出してでも大統領が 星系連合軍 にこだわる理由をよく考えて見てください」

会場のざわめきが一段落するのを待つてマテイトスが立ち上がる。
「ふむ。……おっしゃりたい事はわかった。まず申し上げたいのは、テロリストが誰か、という問題は脇に置いたとしても、実際にテロが起きてしまった事実を忘れてはならない、ということだ。そして、宇宙重工業は多くの星系に企業がある。製品の質を見極めて品質優先で発注を行うのが第一だ。ものによっては入札を行うのは当然の事。市場原理に従うならば、買入れの割合はシェア通りになるかもしれないが、設立当初には買い付け先を参加星系に平等に割り振ることも考えている」

と、そこでマテイトスが何かに気がついたようなふりをした。

「ああ、そういうことですか、陛下。たしかベルカルチャ王国も重工業を抱えていましたなあ。チヨルココ星系あたりの国と共同で設立した……ルテボ宇宙重工業でしたかな？」

「……よくご存じで」

「もちろん存じ上げています。なにしろ、謎の宇宙海賊船を製造していた疑惑のあるところですからね」

「……」

「陛下、あなたは自分のところの宇宙重工業産業にも利益を回せと、そうおっしゃりたいのでしょうか？」

「そんなことはひと言もいっていないわ」

「ふむ。そういう経済的な駆け引きはロビー活動でもやっていただきたい。人類の安全を第一に考えなくてはならないこの会議の席でそれを持ち出すのは、いささか品がないのではないですか？」

「狸ジジイが！」と、ソラは小さくつぶやいた。もちろん、それをマイクに拾われるようなへまはしない。

昨日、デニスとシエラが無事救出されたとの報告が大使館からあがってきた。しかし、三日間も閉じこめられていたデニスは、大使館到着直後に気を失ってしまった。ようやく意識が戻ったとの連絡は、ソラが会議に向かう途中でもたらされた。

そして――

「ゲラン。コンテナはどうなったか報告はきた？」

「いえ。苦戦しているようです」

「……正直、この堂々巡りはマテイトスの狸も完全に乗気ね。ポルキアのテロが成就した直後が一番盛り上がるって計算なんですよ」

「残り、三時間です」

「こっちも、とことんやってやるうじゃないの！」

議長が、もう質問はありませんね、と疲れた口調で質している。
ソラは高く手を挙げた。

『星の涙』 コンテナ

小惑星リュエスから打ち出されたコンテナは順調に進んでいた。このまま進めば、三時間で目的地に到達するだろう。

ベルカルチャ惑星開発会社がデトナグループから依頼された通りならば、コンテナは、惑星ペルキス衛星軌道上でデトナグループの宇宙船に回収されることになる。しかし、ステイーたちがデトナグループから指示された到着座標が意図的に改竄されていたため、コンテナはいま惑星ポルキアに向かって移動している。ポルキアの衛星軌道上にデトナグループの回収船が待機していることはおそらくない。回収されないコンテナはそのまま惑星ポルキアの重力にひかれて、その大気圏に突入することになるだろう。大気圏からの打ち出しに対応した涙滴型コンテナは、燃え尽きることなく大気圏を突き抜けてそのままポルキアの地表に激突することになる。着陸を前提としていない大型コンテナの墜落は、まずそれだけでも大惨事だ。そして、もし中に積み込まれている大気組成改良剤が大気中に放出されるようなことになれば、それはさらなる惨事となる。大気組成改良剤は、人間が呼吸するに適さない未開惑星の大気を、それに足る組成に改良するものだ。惑星の大気組成を確認しつつ、適量の投入が必要になるデリケートな薬剤である。それを既に組成の安定した大気に無差別に投入してしまえば、逆に組成を破壊してしまう恐れがある。ひとが住んでいる惑星でそれが起こったら――

デニスを筆頭としたベルカルチャ惑星開発会社の面々は、コンテナの惑星ポルキアへの突入を阻止するべく手を尽くしていた。

「惑星ポルキア地方政府に連絡がとれました」とステイーが声を上げる。惑星ポルキアはデトナ星系政府に属しているため、ポルキアの惑星上にあるのは地方政府という括りになる。

「地方政府による回収はできそうか？」

デニスの言葉にステイーの顔が曇った。

「地方政府の管轄はあくまでも地上に限るということです。軌道上はデトナ星系政府の管轄で、おいそれと宇宙船も使えないとか」

「……そりゃそうだな。デトナ星系政府はどうだ？」

「さつきから呼びかけていますが、まるつきり応答がありません」

と、これはマエナ・ロッサ大使。「デトナ星系政府が状況を把握していないわけがありません。これは、ポルキアを犠牲にするつもりなのですかね」

「おそらく、ESAとデトナ星系政府は結託している。惑星ポルキアは人口密度の低い農業惑星だ。コンテナが突入しても人的被害は少ないことがある程度期待できる。しかも、テロにあつた悲劇の惑星を持つという立ち位置は、星系連合軍の中での発言力を大幅に高めるだろうからな」

「ESAの連中は、コンテナを本当に突入させるんでしょうか」とステイー。「直前で阻止して、自分たちはテロを阻止した、ってアピールをすることもできるはずですが……」

「それはインパクトに欠ける。ひとは、回避された危機はすぐに忘れてしまうからな」

ベルカルチャ大使館の通信室には焦燥感が漂っていた。デニスが事態を認識した時点で、すでに直接惑星ポルキアに向かう時間は残されていなかった。残された手は三つ。ひとつめはデトナ星系政府もしくは惑星ポルキア地方政府にコンテナを回収させるという方法。ふたつめは、近隣の宙域にいる宇宙船のどれかに回収を依頼するという方法。そして三つめは、何かの狙撃兵器でコンテナを破壊するという方法。ひとつめについては、たったいま絶望的な結果が出たところだったが、もともそれほど期待をしていなかった。ベルカルチャの本命はふたつめ。三つめは論外である。

「現場に届きそうな宇宙船はどのくらいある？」とデニス。

「間に合いそうなのは全部で八隻です」ディーアがモニタから顔を上げずに答える。「すべての宇宙船に緊急回線を経由して依頼をしました。うち、旅客船四隻からは拒否の回答がありました。残りが

了承してくれていますう」

「そうか……」

デニスはちいさく息を吐く。

ベルカルチャ王国が運用している「宇宙横断住民管理システム」は、宇宙船の非常用回線を結ぶことで人類の生活圏を網羅するようになっていて。ベルカルチャには非常用回線メンテナンス会社があり、そこが格安で回線維持のメンテナンスを行う代わりに、一部を王国用のシステムとして利用させてもらっているのだった。そのため、ベルカルチャ王国と、宇宙船乗りたちの距離は非常に近い。今回のような非常事態にも、多くの宇宙船が協力をしてくれる。

「協力してくれた船にはお礼を弾む必要があるな」

「はい……あれ？」

デニアの表情が曇る。

「どうした」

「一隻から緊急連絡です。所属不明の宇宙船に進路をふさがれているって……ああ、他からもです」

「……ESAか？ それともデトナグループか？」

「判りません」

「あまり無茶はしないように伝えろ。相手の出方がわからない」

「はい……」

時間は無情に過ぎていく。

「副社長、コンテナに何かをぶつけるのはどうでしょうか？」とステイー。「既にコンテナは補足されています。相応の物量をぶつけることができれば、回収や破壊は無理でも、軌道をずらすことができます」

「先輩としてはナイスアイデア！」

デニアが急いで現地に連絡を取る。

「ガシユピル船籍の工作船が正しい位置にいます。搭載している鉱物塊を投擲してもよいと言っています」

「保証には色をつける。急げ」

「はい！」

現場で対応している宇宙船から映像情報は入ってきていない。繋がっているのは、音声情報と観測データだけだ。

四人はじりじりと結果を待つ。

「結果来ました……失敗です」

「もう一度だ！」

「それが……所属不明船が発砲してきたと。鉱物塊が撃ち落とされたようです」

「くっ……」

デニスは唇を噛んだ。なんとしてもこのテロを完成させるつもりなのか。

「……船を全て下がらせる。次は鉱物塊だけでは済まないかもしれない」

「はい」

「残り時間は？」

「二時間半です」とステイ。

「万事休すか……」

デニスが額に手を当てて頂垂れたその時――

「あの……」

「シエラ？」

「出る前に挨拶をと思って……」

「あ、ああ、そうか。丁寧にありがとう」

デニスは立ち上がると、応接室の入り口に立つシエラに近づいた。

「……状況は教えて貰いました」

シエラは、背後に立つベルカルチャ大使館員にわずかに顔を向けた。

「……そうか。ポルキアは君の故郷だったね。済まない……もしかしたら守れないかも知れない」

「いいえ、守ります。私に考えがあります！」

『星の涙』 #6

——みなさんこんにちは。 銀河ミュージックチャンネル3 のイオナ・アーナスです。今日はとっても哀しい特集です。先日の 星系代表者会議 テロで亡くなったシエラ・ストーンさんの追悼番組をお送りします。なんというか……ほんとうにやるせないですね。シエラさん十七歳でした。これから、たくさんたくさん、わたしたちに素晴らしい音楽を届けてくれるはずでした……ぐすつ。………失礼しました。ええと、今回はですね、シエラさんが惑星ポルキアでバンド活動をしていたころの音源をたくさん用意することができました。名曲「星の涙」とあわせて、在りし日のシエラさんを悼みたいと思います。では……？ え？ なんですか、プロデューサー？ …………は？ え？ 本当ですか？ ちょ……あの、これをお聴きの皆さん、大変なことが……、ああ、ああああ、本当だ！ 番組は急遽変更です……みなさん！ 歌姫シエラ・ストームさんが生きていました！

——突然押しかけてゴメンなさい。シエラ・ストームです。

——ちょ、どうされたんですか？ テロでお亡くなりになったって聞いていました。誤報だったんですか？

——詳しい話はあとで。わたしから重要なお願いがあります。この銀河ミュージックチャンネル3 を聞いてくれている方をお願いします。わたしの故郷、惑星ポルキアが危ないんです！

——え？ ということですか？

——いま、惑星ポルキアに向けてマストライバーから打ち出された

コンテナが移動中です。大気組成改良剤と土壌改良剤を満載したそれは、このままいくとポルキアの大気圏に突入してしまいます。猶予はあと二時間です。多くの人がそれを止めようと宇宙で頑張ってくれていますが、逆にそれを阻止しようとする謎の宇宙船がいつばにいるんです。でも、なんとかしなくちゃならない。皆さん、力を貸してください。惑星ポルキア地方政府とデトナ星系政府はこちらからの連絡になんの反応もしてくれませんでした。お願いです、なにか方法がある方、お手伝い頂ける方、わたしの故郷を守ってください。詳しいデータが必要な場合は、ベルカルチャ王国情報局が公開しています。アクセス方法は……きやつ！

——ちょ、ちょっと、なんですかあなた！

——やめてください。また私をどうにかしようっていうんですか、あなた方ESAは！

* * *

その時、そのパイロットは、惑星ポルキア第三宇宙港のパイロット控え室で音声放送を聴いていた。

「おいおい、冗談じゃないぞ！」

パイロットは控え室を飛び出して管制塔へと飛び込む。

「おい、なんだかこっちに向かってるって本当か？」

「ああ、本当だ」

知り合いの管制官は真剣な表情で答える。

「それを邪魔する連中がいるって？」

「邪魔するって言うより、遠巻きに見守ってるって感じに見えるな。もちろん、大気圏突入を見守ってるんだらうよ」

「……俺の宇宙船、出せるかい？」
「ここで初めて管制官が振り向く。」
「本気か？ 発進許可はおりないぜ？」
「男が宇宙を飛ぶのに、誰の許可がいるって？」
「……そうだな。第三打ち上げ塔を使ってくれ。たったいま、他の打ち上げは問題発生で中止になった」
「……いや、六つの打ち上げ塔全てが必要みたいだぜ」
「パイロットがあごをしゃくると、別のパイロットたちも管制塔に飛び込んで来たところだった。」
「まったく、命知らずばかりだな」と管制官。
「そりゃあ、最高のほめ言葉だよ」

* * *

その時、惑星ポルキア地方政府の食堂で音声放送を聴いていた何人かの職員は、食事を放り出して地方政府庁舎の中を走った。彼らが目指すのは地方政府主席官室。少なくとも二十人からの職員がそこに押し寄せた。

「き、君たち、いったい何事だね？」

「ベルカルチャからの連絡を無視したとはどういうことですか、主席官」

「む、無視などしていない。ただ、衛星軌道より上は星系政府の管轄で……」

「落ちてきたらそんないい訳が利くと思うんですか」

「落ちてても大丈夫だ」

「なぜそんなことが言えるんです」

「落ちるのは山岳地帯でひとは……」

主席官がしまったという顔をした。

「まさか、事前に知っていたんですか？ 一体何を餌に釣られた！」
「いや、そんなことはない！ いまのは、さつき計算させた……その、あのだな」

しどろもどろになる主席官を尻目に、更に数を増した職員たちは、今後の方針を自分たちで勝手に決めはじめた。

「各宇宙港からすぐ発進できる船を確認しろ。重力で加速するまえに回収させるんだ」

「ベルカルチャに連絡して状況を確認しよう」

「万が一に供えて落下地点の予測と、避難準備をしておこう」

わっ、と蜘蛛の子を散らすような勢いで職員たちが駆けだしていく。

あとに残された主席官は、真っ青な顔で立ち尽くしていた。

* * *

その時、デトナ星系日報ポルキア支局のとある記者は、取材先に向かう車の中で音声放送を聴いていた。

「こりゃあ、久しぶりに大きなネタだ！」

日々たいした話題のない惑星ポルキアにおいて、いまの話が本当なら大事件だ。

記者は急ブレーキをかけて車をＵターンさせると、一番近くの宇宙港へと進路を変更した。

その一方で、携帯端末を取り出して長距離通信をかける。

「もしもし、おお、久しぶりだな。え？ いやあ、相変わらずつまらないネタをおっかけてるよ。ところで、銀河ミュージックチャンネル３の放送聴いたか？ ああ、そうだ。現地からの取材記事を優先的にそっちにまわすから、そっちからもネタを貰いたいんだよ。そうそう、今回のシエラの件、どう考えたっておかしいだろ。」

きつと黒幕はE S Aあたりなんじゃねえかと思うんだよ？ あん？
危ない橋なのはわかってるよ。こつちだつて、惑星そのものがや
られちまうかも知れないんだから同じだ。おう、よろしくな！」

通信が終わると、記者は携帯端末を助手席に放り込んだ。

「さあ、面白くなってきたぞ！ ほしの、ほしの、なみ、だ、
ときたもんだ」

記者の車は、制限速度を大幅に超えて、草原の中の道を宇宙港へ
向けて走り抜けていった。

* * *

その時、その人物は銀河の片隅で音声放送を聴いていた。

その人物はニヤリと笑うと、背後に立つ男になにやら指示を出す。
「かしこまりました」

指示を受けた男は、きびきびとした足取りで何処かへ姿を消した。

「……さて、ここで無理矢理にでも恩を売らせて貰うよ。星の女王」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7928m/>

星の女王 ～ソラの物語～

2011年10月12日18時53分発行